
虹の向こう

南瓜姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹の向こう

【Nコード】

N9280U

【作者名】

南瓜姫

【あらすじ】

都会に一匹のネコがいました。

ネコは都会の喧騒から逃れて南海の孤島——ワッフル島に流れ着きました。

ネコはある人間の女の子に恋をしました。

しかし、女の子は姿を消します。

女神様が教えてくれました。「虹の向こうにあの子がいる」と。

ネコは虹を渡って女の子を捜します。

ボクが人間になった訳

ボクはネコ。名もない野良猫だ。

ボクの住んでいる街では、ネコは歩いているだけで煙たがられる。

「しっしっ！ あっち行け！」

「まあ、野良ネコよ。坊や、家に来ちゃうから、食べ物あげちゃだめよ」

ボクは何もしていないのに、ただ寂しくて頭を撫ぜてもらいたいだけなのに。

ひどいときは、子供に追いかけられたり、石を投げられたりしたことがある。ボクは必死で逃げた。つかまったら何をされるかわからない。

それに、よく仲間が車にひかれた。道路に無残にも横たわる死体を何度見ただろう。

物知りのネコが言った。

「都会で暮らすのは大変だ。田舎に行けば、車もないから引かれる心配もない。

何より、田舎の人間はおおらかで、俺達野良ネコを追い回すようなひどいことはしない」

「ねえ、それってどこにあるの？」

ボクは思わず聞いた。

「船に乗ればいいのさ」

翌日、ボクは物知りのネコが言うとおりに船に乗り込んだ。

ゆらゆらと波に揺られる。いったい何日たったのかわからないが、やっとどこかに着いたようだ。ボクは船員に見つからないように島に上陸した。

とても静かなところだった。辺り一面真っ白で、ふわふわとした白いものが空から降ってくる。鼻先にそのふわふわした白いものが乗った。

「冷たい！」

それは、ボクの鼻先に乗ると解けてしまった。ボクは、ふわふわした白いものが気に入って、空から降ってくるものをつかまえようと必死だった。でも、つかまえると解けてしまう。

いいかげんその遊びに飽きたボクは歩き出した。足の裏が冷たい。空が暗くなってきた。どこへ行く当てもない。途方に暮れて鳴いた。しんと静まり返った場所に、ボクの声だけ響いた。

寒い。ボクは暖かな光のもれる家に向かって歩いた。窓から家の中を覗くと、人間たちが楽しそうに飲んだり食べたりしていた。ものすごくたくさん的人数だった。パーティーなのだろうか。

都会の人間も、よく大勢で集まってドンちゃん騒ぎをしていた。そして、あくる日の残飯はボクたちのご馳走になった。

明日になれば食事に取りつける。ボクはその家の軒下で丸くなった。

パーティーが終わったのか、人間が次々に出てきた。ボクを睨む者、愛想よく声をかける者、いろいろだった。

ふわふわとした白いものがさっきよりたくさん降ってきて、風も強くなる。あまりの寒さに、ボクは身体をいっそう丸くした。さっきはつかむと解けてしまったのに、ふわふわした白いものは身体に積もる。だんだん寒さを感じなくなってきた眠くなってきた。おかしいな、ひょっとして死んじゃうのかな。

「ネコちゃん」

ボクは声のするほうに顔をゆっくりと向けた。女の人が話しかけてきた。

「こんなところで寝ていたら凍えちゃうよ」

女の人はそう言うと、ボクの体に降り積もったふわふわした白いも

のを払った。体が凍えて動くことも出来ない。

「どこの子？」

ボクはただ鳴くだけ。

「うちの子になる？」

ボクはわけがわからず、ただ鳴いた。

女の人はクリクリとした大きな瞳でボクを覗き込んだ。そしてボクを抱きかかえた。

こうして、とある牧場の家のペットになった。牧場主はアカリという女の人だ。女なのに、たった一人で牧場を経営している。茶髪のショートカットで、きりつとした目元のなかなかの美人である。

「チャトラン、朝ご飯だよ」

ボクには『チャトラン』という名前がつけられる。野良ネコのボクに初めて名前がついた。ボクの体が茶トラだからなんだって。全くひねりのない名前だ。

アカリに呼ばれて、食卓の前へ移動する。木の床はひんやりと冷たくて足の裏がしもやけになりそうだ。でも暖炉には赤々と炎がともっていて、ボクは野良じゃなくなったんだと実感した。

床に置かれた皿には、小魚が五匹乗っていた。10センチぐらいのワカサギだった。

アカリが申し訳なさそうに弁解している。昨日はこれだけしか獲れなかったんだって。でもボクにしてみれば、朝からご飯にありつけるなんて幸せなことだった。小魚をぺろりと平らげると、ボクは感謝の意をこめて鳴いた。アカリは、それは楽しそうにボクを見つめている。お腹は満腹じゃなかったけど、心は満たされる気がした。

アカリの朝は早い。お日さまが昇る頃には起きて、パンとミルクを

食べて外に飛び出す。動物小屋では、お腹を空かせたウシやヒツジやニワトリが待っている。アカリは一人でエサをやり、乳を搾り、ブラッシングをし、毛を刈り、タマゴを採る。そして一頭、一羽ずつに声をかける。そして小屋の掃除。それが終わると、休む暇もなく畑へ出る。野菜の苗に水をやり、苗の間の雑草を取り、牧草を刈る。それが終わる頃には、お日さまは頭の真上に来ている。家に入り、またパンとミルクで食事を済ますと、今度はボクを連れて海へ行く。

ボクのために魚を釣ってくれるのだ。港の栈橋に座り、釣り糸を垂れているその後ろ姿には疲労感が漂っている。こっくりこっくりと居眠りをしている。引きが来ているのにも気がついていない。ボクがアカリの膝をペシペシと叩いてやると、ハッと頭を上げて竿を強く握る。

二、三日分の食用の魚を釣り上げると、酒場へ寄る。ボクはアカリの隣の席で大人しく丸くなる。酒場のウェイトレスがボクらの向かい側に座り込み、にぎやかにアカリと話している。うるさいなと思いつつも、ボクは居眠りを決め込んだ。

目が覚めると、アカリはウェイトレスからパンの入った袋を受け取っていた。アカリはリュックにパンをしまうと、ボクを抱き上げ、ジャンパーの中に入れた。アカリの襟元からボクは顔だけを出す。

「これなら寒くないよ」とアカリが笑った。

外は木枯らしが吹いていた。ジャンパーの中はふわふわと柔らかく温かくて、ボクは覚えのない親の温もりに触れた気がした。物心ついたときには一人ぼっちだった。だから比べようがないんだけど。

そんなこんなで働きづめのアカリが心配だった。たまに一人で出かけたかと思うと、青い顔をして帰って来ることがある。そんなときボクはアカリの足元に擦り寄った。決まってアカリはボクを抱き上げ、「ただいま、いい子にしてた？」と笑いかけてくれる。ボクは「いい子にしてたに決まってるだろ」って鳴くんだ。そうすると、

アカリの顔がもっと緩んで幸せそうに見えた。

アカリは毎晩暖炉の前に座り、ボクを膝の上に置いて体を撫でてくれる。暖炉の暖かみとアカリのぬくもりに包まれて、ボクはすごく幸せだった。

ある日のことだった。アカリがジェラート山へボクを連れて行ってくれた。山頂の泉の大きな樹の下に美しい女性が立っていた。長い髪をなびかせて、羽衣をまとっている。その女性の周りの空気は虹色に輝き、ゆらゆらと揺らめいている。こんなに美しい人が世の中にはいるんだなってびっくりした。アカリが「女神さま、こんにちは」と言った。女神さま……神さまってことだね。アカリは女神さまと懇意にしているようで、それは二人のやりとりから知る事ができた。

「アカリ、このたびはごくろうさまでした」

「女神さまもだいぶお元気そうで安心しました」

女神さまは、空にかかった大きな虹を眺めた。七色の帯はキラキラと輝いてとてもきれいだ。ワッフル島には常にこの六本の大きな虹がかかっている。

「アカリの働きがあつてこそ、この島が復活を果たしたのです。ありがとう」

アカリは照れくさそうに頭をかいている。女神さまはその様子に目を細めながらささやいた。

「わたくしに出来ることがあつたら言ってくださいね」

「ありがとうございます」

女神さまは、アカリの腕の中のボクに気がついた。

「そのネコは？」

「新しい家族です」

「良かったですね」

女神さまは自分の事のように嬉しいのか、さらに穏やかに微笑んだ。そしてボクに手を差し伸べた。ボクを手の上に乗せた女神さまが言

った。

「チャトラン、遊びに来てくださいね」

ボクが肯定の返事を返すと、女神さまはにっこりと微笑んだ。

それから、アカリが仕事で家を空けるとき、ボクは女神さまに会いに行くようになった。

女神の泉を訪れると、女神さまはいつも極上の笑みで迎えてくれた。

ボクはいつも自分やアカリの事を話す。そして訊ねる。

「アカリと女神さまはどうして知り合ったの？」

「話せば長くなるのですが、一言で表せばアカリにこの島に来るように頼んだのです」

「なぜ？」

「普通の人間には無理なのですが、アカリにはコロボックルや私が見えるのです。そういう能力のある人間にこの島に虹をかけてもらわねばならなかったのです」

「虹？」

「ええ。ワッフル島にかかる虹は元気の象徴なのです。数年前まで、空気はよどみ、水はくすみ、この大地は力をなくしていました。このままではこの島は死んでしまう」

「アカリが何とかしたんだ。アカリにはその力があったの？」

「いいえ。アカリは普通の女の子です。アカリは一生懸命努力して、虹のかかる条件をクリアしていったのです」

「島の人は知ってるの？」

女神さまは首を横に振った。

「知りません。あの子は誰にも相談せずに頑張ってくれたのです。相談したところで、アカリにしか私たちが見えないのだから、信じてもらえなかったでしょう」

「大変だったんだね、アカリ」

「ええ。だからこそ、アカリには幸せになってもらいたい。私はそう強く祈っています」

女神さまとアカリってそんな関係だったんだ。もちろんボクもアカリにはいつもニコニコと笑っていて欲しい。いつも何に対しても一生懸命で、他人を気遣って、自分は倒れそうになっている。でも、ネコのボクは何にも出来ない。ただ、アカリの話聞いてあげるだけなんだ。

ある日のこと、アカリが起きてこなかった。お日さまがずいぶん上に来ているのに目を覚まさない。朝ご飯しか食べないボクはすぐにお腹がすいていた。一人で冷蔵庫の中の魚を取ることが出来ないから、アカリのベッドに飛び乗って顔を覗き込んだ。アカリの息は荒く、苦しそうだった。大丈夫かな？　ボクはアカリの手をペロペロ舐めた。アカリはうつすらと目を開けると、強張った笑顔を作った。「お腹がすいたのね？　ちょっと待ってて」

そう言うと、アカリはけだるそうに起き上がり、ベッドの上に座りこんだ。肩でぜいぜい息をしている。ボクが心配で見上げると、ボクの頭を撫でて立ち上がった。でもキッチンに向かって歩き出した途端、ばたりと倒れてしまった。

どうしよう！　誰か呼んで来なきゃいけないけど、ネコのボクの話が分かる人間なんてどこにもいない。そうだ、女神さまだったら話が出る。ボクは家を出ると、ジェラート山に向かって走った。

女神の泉に着くと、女神さまはコロボックルたちとお話しをしていた。

「女神さま！　アカリが倒れちゃったんです」

「まあ！　どうしましょう。あなたも私たちも人間とは話せませんし……」

女神さまは首をかしげて考えていたが、ふっと顔を上げると、ボクに向かって指を差した。

「チャトラン、人間の言葉が話せるようにしてあげるから、医者に電話をしなさい」

「ボクが!？」

「あなたしかいないでしょう？　お願いします」

「わかりました」

承諾すると、女神さまはボクに向かって手をかざした。キラキラときらめく光のシャワーが頭から振り注いだ。

「あ、あー」

ニヤアじゃない、「あ」って言った。ボクがびっくりしていると、女神さまが告げた。

「コロボツクルが手伝いますから、家から電話をしなさい」

「はい！」

ボクはコロボツクルに両脇からつかまれた。

あつという間に牧場の家の前に移動していた。すごい、これはきつとワープというやつだ。テレビで見た事がある。中に入って寝室を覗くと、アカリはまだ倒れたままだった。

ボクはリビングの電話に近寄った。悲しいかな、ボクの前足は物をつかめるように出来ていない。受話器がとれなかった。すると、コロボツクルたちが受話器をボクの口元に当ててくれて、ダイヤルしてくれた。早く電話に出てよ。コール音が何回かした後、お医者さまが出た。

「はい、こちらメレンゲクリニックです」

「あ、あの、アカリが倒れたんです。すぐ来てください！」

「アカリくんが!？　わかりました。あなたは？」

「そ、そんなことどうでもいいでしょ！　早くお願いします」

「あ、ちよつと――」

コロボツクルが受話器を置いた。何とかお医者さまは呼ぶことが出来た。

「声はもう元に戻っているから安心して。じゃあね、お大事に」

コロボツクルはボクに告げると、すうっと姿を消した。

ボクはアカリのそばに座ってお医者さまを待つことにした。でも、相変わらずアカリは苦しそうで、ボクは泣きそうだった。ボクが人間だったら、アカリを床に寝かせておかないのに。お医者さまにだって運べたはずなのに。ネコのボクはただこうやってアカリの横で見守るしか出来ない。

じきにお医者さまと看護師が来て、アカリをベッドに運ぶと診察を始めた。アカリは過労から風邪をこじらせたらしかった。お医者さまが言うには、栄養状態が悪いことと仕事のしすぎから来ているという事だった。

アカリはお医者さまの手当てを受けている間に気がついた。そしていろいろ問診を受けている。

「アカリくん、朝は何を食べているんだね？」

「パンとミルクです」

「じゃあ、昼は？」

「パンとミルクです」

「夜は？」

「酒場で食べてます」

お医者さまの眉間に瞬く間にしわが寄ってくる。アカリは布団の端をずり上げて鼻まで隠してしまった。

「労作がきついというのに、パンとミルクでは体を壊すのは当たり前だろう！ 以前倒れたときに注意したはずだが？」

「すみません……」

お医者さまは眼鏡の真ん中をくいっと持ち上げる。眼鏡の奥の瞳がきらっと輝いた。

「自炊はしていないのかね？」

「チャレンジするんですけど、食べられるものが出来ないんです」
アカリの声はだんだん小さくなる。お医者さまのさっきの勢いほどこへやら、一転哀れむようなまなざしでアカリを見た。

「困ったね。こんなことをしていると、本当に危ないんだよ」

「はい」

「栄養剤を渡しておくからしばらく飲みなさい。とにかく、何とかしておかずを用意して食べることに。わかったね？」

「はい。あの聞いてもいいですか？」

「なんだね？」

「誰が先生を呼んでくれたんですか？」

「電話があつたんだ。若い男性だった。名乗らなかったがね」

「そうですか」

「とにかく、きちんと食べて、仕事もほどほどに。わかったね」

「はい」

お医者さまはいっぱいお説教をして帰っていった。かわいそうなアカリ。

アカリはベッドに横たわったまま、天井を見上げてつぶやいた。

「そんなことが出来たら、倒れてないわ」

ボクに与えられるエサはいつも生魚だ。アカリって料理が出来ないからだったのか！ ボクはアカリの枕元へ飛び乗って座り、鳴いた。

「そんなこと言ってられないでしょ？ どうするの」って。

でも肝心のアカリはボクの前足を触りながらため息を漏らした。

「誰だって得手不得手はあるわよねえ、チャトラン？」

そりゃそうだけど、また倒れたらどうするの！？ アカリはボクの目を覗き込みながらつぶやいた。

「チャトランが料理できたらいいのにね？」

何でそうなるの！？ ボクだって出来ることならしてあげたいけど、ネコなんかもん。無理でしょ。

アカリはぶつぶつ言っていたが、薬が効いてきたのか眠ってしまった。

風邪が治ると、アカリはお医者さまに言われたとおり、パンとミル

クの他におかずを用意するようになった。ちぎったキャベツと生卵だった。これって料理って言えるのかな？ お粗末な食事の割に、以前にも増して働きづめのアカリは、それからもしょっちゅう倒れた。そんなアカリが心配でたまらなかった。アカリがいなくなっちゃったら、ボクはまたひとりぼっちだ。そんなのいやだ。おはようって挨拶すること。おかえりって迎えること。おやすみって挨拶すること。一緒に出かけること。ソファでアカリに体を撫ぜてもらうこと。一緒に眠ること。もう、どれもボクの生活の一部なんだ。そんなアカリとの生活を守るために、ボクに何が出来る？ いくら考えてもわからない。その時、あの言葉を思い出した。「何かあったら相談なさい」って女神さまが言っていた。アカリにかけられた言葉だけど、自分の都合のいい様に解釈する。女神さまに相談しよう。ボクは夜中にもかかわらず、家を飛び出した。

真っ暗な闇の中をひたすら走る。フクロウが不気味に鳴いていた、キツネが目の前を横切ったりして恐かったけど、必死に走って山の頂上へ向かった。

今夜は満月で、泉の表に月がうつっていた。月の影は風が吹くと揺らめいて散った。ここはなんか神秘的な雰囲気漂っているんだ。

ボクは泉を通り越して、女神の樹の前に立った。

一声鳴いた。樹の梢が揺れたかと思うと、女神さまはその美しい姿をボクの前に現した。

「チャトラン、こんな夜更けにどうしたのですか？」

「女神さま、今日は相談に来たの」

「なんででしょう？」

「アカリの食事のことなんだけど。食生活が悪すぎるから倒れるんだって、お医者さまに叱られたんだ」

「そうなのですか？」

「アカリったら、料理しようとしなんだよ。キャベツはちぎっただけ、卵は生を丸呑みだし」

「アカリらしいですね」

女神さまはクスクスと笑った。笑い事じゃないでしょ！ 女神さまはボクの視線に気がついたのか、コホンと咳払いをした。

「アカリは以前私に泣きついてきたことがあるのです。女なのに料理が出来ないって。私はその時慰めました。女だから料理できなきゃならないことはないって。アカリは元気になりましたが、私の言葉を食べるにしないで料理をしなくなってしまいました」

女神さまは申し訳なさそうに続けた。

「私のせいですね」

「そんなにすごいのか？」

「すごいなんてものじゃありません。一度料理を持てきなさいと言ったことがあります。それは悲惨でした。どうしたらこんなものが出来るのかというほど……」

女神さまはその時の事を思い出したのか手を口に当てた。吐き気をもよおしたみたい。そんなにひどいの！？

「アカリに料理をさせるのは至難の業ですね。諦めた方がいいでしょう」

「でも、また倒れちゃうよ！」

まったく無責任なんだから。女神さまは宙を見てなにやら考え込んでいたが、ボくに視線を移すとニヤッと笑みを浮かべた。

「チャトラン、アカリに恩返しをしたいでしょう？」

「は、はい」

女神さま、何を企んでいるんだ！？ 何かあるぞ、何か。ボクの心臓がバクバクした。女神さまの口から何が飛び出してくるんだろう。

「あなたが料理しなさい」

えーっ！？ ボク、料理するの？

「どうやって？」

「人間の体にしてあげます」

「人間！？」

「アカリには私が紹介します。一緒に住むように命じましょう」

「でも、ボク、料理したことないよ」

「大丈夫。あなたには料理の才があります。テレビでも料理番組はやっているし、町の人間と仲良くなればレシピを教えてくれるでしょう」

なんて勝手な……。どうしよう。でもこのままじゃ、アカリはまた倒れてしまう。それはいやだ。ボクはアカリが倒れていた時の事を思い出した。すごく悲しかった。何も出来ない自分がすごく辛かった。ネコの姿のままじゃアカリを助けられないのは、嫌というほど身に沁みたじゃないか。

「わかった。ボクを人間にして」

女神さまはこっくりとうなずくと、ボクに向かって右手をかざした。白魚のような指先からキラキラと光が湧き上がり、それはボクの体に流星のように降り注ぐ。

その光が消える頃、ボクは人間になっていた。女神さまが手を振ると、ボクの体が服で覆われた。毛がないし、尻尾もないし、指もある。でも間抜けなことにボクは四つんばいだった。

「立ってごらんさい」

ボクは恐る恐る腰を高く上げて足を延ばしたが、手を地面から離す勇気が出ない。

「さあ、手を」

女神さまはボクに両手を差し伸べてくれた。女神さまの手をつかみ、これでもかと握り締めると、ボクは引き上げられた。目の前に広がる景色が変わる。草や花畑が眼下に広がる。アカリに抱っこしてもらっているときみたいだった。

「立てましたね。その場で足踏みしてみましよう」

足踏み？　ボクがぼかんとしていると、コロボツクルたちがボクの脚を持ち上げたり下ろしたりした。そうか！　ボクは右足と左足を交互に上げ下げした。

「そうそう、上手に出来ました。手を離しますよ」

女神さまの手が離れて、若干体がふらついたが何とか持ちこたえる。

前へ進んでみた。手を前に突き出したまま、必死で女神さまに歩み寄る。まるで、生まれたばかりの子ネコみたいだ。少しは歩けるようになったが、バランスが取れない。するとコロボツクルたちが飛んできて、今度はボクの腕を交互に振り始めた。なるほど、手を振るんだな。ボクは自力で手を振って歩いた。泉の周りをくるくる回る。

何とか歩けるようになったボクを見て、女神さまが告げた。

「チャトラン、アカリにはネコであったことは伏せておきましょう。そうね、記憶喪失という事にしましょう。そうすれば、要らぬことも聞かれないでしょうから」

「はい」

「では、参りましょう」

空はいつのまにか明るかった。夜が明けたのだ。凜と張りつめた空気に、心が引き締まるようだった。

習うより慣れよ

朝、鶏の鳴き声が響き渡る牧場に戻ってきた。いつもと変わらぬ朝のはずなんだけど、大きく違う。

ボクはとても緊張していた。テーブルの向かいにはアカリが座っている。女神さまはアカリの横に立っている。女神さまはにこやかに笑みを浮かべながらアカリに話しかけた。

「申し訳ないのですが、この子をアカリの所で預かってくれませんか？ 何しろ、赤ん坊のように何もできませんが、覚えればアカリの役に立つでしょう」

「別にいいですけど」

「良かったですね。タケル」

あ、ボクの名前、タケルなのか。タケルってなんかかつこよくない？ チャトランも悪くなかったけど、断然タケルのほうが良いよね。女神さまって、センスが良いな。

アカリはというと、その名前を聞いて目を丸くして叫んだ。

「タケル！？ この子、男の子なんですか？」

男に見えなかったの？ いったい、ボクってどういうオーラを出しているんだろう。可愛い系かな？

女神さまは澄ました顔をして返事をした。

「そうですわ」

「だめですよ！ どう見ても十代後半じゃないですか。私、嫁入り前なんですよ」

「確かにそうですが、赤ん坊のようなものだって言ったでしょう？」
女神さまは、ボクをチラッと見ながら続けた。

「こんなに可愛らしいんですから、心配しなくても……。それと理由は聞かないで下さい。わたくしを助けると思って」

「でも……」

「とりあえず三ヶ月、ね？」

「わかりました。じゃあ、三ヶ月」

「ありがとうございます、アカリ！」

しぶしぶ了承したアカリの体を女神さまはぎゅっと抱きしめた。

アカリはというと頭をフラフラさせていた。

女神さまったら、ボクが赤ん坊って言った。ネコ暦一年の立派な大人だぞ！

女神さまは言いたい事だけ言って帰って行った。アカリは渋い顔をしている。そりゃそうだよ。いきなり見知らぬ人間、それも男を押し付けられて。それが女神さまとボクの好意だとは、アカリは知る由もない。

「あなた、男の子に見えないわね」

「そうかな」

アカリの目、冷めている。ネコのボクに向けてくれた慈愛のこもった目じゃない。こんなの、いつものアカリじゃない！

そんなボクの気持ちに気づいてくれないアカリは、とうとうしやべり始めた。

「うちはご覧のとおり牧場だから、動物や畑の世話を手伝ってもらうね」

「うん」

「あと、今いないけどネコを飼ってるの」

「仲良くするよ」

ボクはボクに会うことはないけどね。

「タケルくんって、ここに来る前は何してたの？」

「覚えてない」

「そうだったね、ごめん」

嘘をついて、胸がチクつとした。ボクはアカリの事を何でも知っているのに、知らない振りをするんだから。うつむいていると、上からアカリの優しい声が降ってきた。

「朝ご飯は食べた？」

「まだ」

「口に合うかわからないけど」と言いながらアカリが朝食を勧めてくれた。

見ると、パンの入ったバスケットとミルクピッチャーが置かれている。やっぱりパンとミルクで済ます気だな。あつ、でも今日は小皿にチーズが入っている。食べようと手をパンに伸ばしたら、ストップがかかった。

「タケルくん、顔を洗ってね。目やにがついているわ」

「うん」

そういえば、今朝はバタバタしていて顔を洗うのを忘れていた。ボクは手を顔に持っていて撫でまくった。アカリは皿を持ったまま、ぽかんと口をあけてボクを見ている。そんなに見とれるほどボクってカッコイイのかな？ でもアカリの口から出た言葉はボクの想像と違っていた。

「タケルくん、何やっているの？」

「何って、顔を洗ってるんだけど」

アカリはさらに目を丸くした。なんか違うの？ アカリは皿をテーブルに置くと、ボクのそばまで来た。

「こっちに來て」

アカリは親指を立ててクイクイと指し示す。ボクはアカリの後をついていった。着いた先は洗面所だ。

「水で顔を洗うの。見てて」

アカリが栓をひねると、蛇口から水が勢いよく出てきた。その水を両手ですくうと、アカリは顔に浴びせかけて顔を手でぬぐっている。どれだけかぬぐうと、アカリは壁にかけてあったタオルで顔を拭いた。

「顔を洗うっていうのはこういうことよ。はい、やってみて」

ボクはアカリと入れ替わり、洗面ボールの前に立った。栓をひねる。出てきた水を手ですくう。手の隙間からぽたぽた水が落ちる。水で顔を洗うの？ やだな……。手でぬぐえば充分に汚れは落ちる

んじゃないの？

ボクが躊躇していると、アカリが急かした。その目は鬼のようにつり上がっている。

「早くしなさい」

「はい」

問答無用みたい。目をぎゅっとつぶってすくった水を顔にかけた。ぎゃーっ、濡れた！ 横を見ると、アカリが腕を組んでじっとボクを見てる。うう、怖いよ。勇気を奮い立たせ、何回か水をかける。あれ？ 毛が無いせいか気持ちよかったりして……。ゴシゴシ顔をぬぐって、タオルで顔を拭いた。

「女神さまが言っていた意味がわかったわ。ほんとに何も知らないのね」

アカリが呆れたようにポツリとつぶやいた。

居間に戻ると、アカリに促がされて、ボクは大人しく席についた。

「どうぞ」

「いただきます」

アカリが取り分けてくれたパンを手にとってかぶりついた。ネコのときにアカリがくれたことがあったけど、パンってパフパフしていてモサモサするから好きじゃないんだよね。出されたものは残さず食べないといけない。でも喉を通らない。そうだ、パンをミルクで流しちやおう。カップに手を伸ばしかけたけれど、動きが止まる。あれ、アカリってどうやって持ってた？ 思い出せなくてアカリを見るけれど、残念なことにパンを食べている最中だ。カップを眺めてしばらく考える。口の中はいまだにモサモサ地獄だ。もう耐えられない。パンを置いて両手でカップを挟み込んだ。そのまま両側から力を込めて押さえつけ口に持っていた。一口飲んだ。パンがしっとりして飲み込みやすくなった。一息ついていると、アカリが話しかけてきた。

「タケルくん、カップはこうやっての持つのよ」

ボクが四苦八苦しているところを見てたんだね。アカリを見ると、カップから出ている耳みたいのを握っている。なるほど。ボクは自分の手を握ったり開いたりしてみる。よし、準備OKだ。アカリが持っているのをまねてみた。おお、確かにこの方が持ちやすい。達成感にひたってアカリを見る。褒めてくれるかなと思いきや、次の指令が飛んできた。

「食事が終わったら、歯を磨くのよ」

「うん」

「やったことある？」

「ない」

「そう」

アカリがついた小さなため息がボクの耳に入った。

歯を磨いた後、外に出て牧場の仕事をした。アカリに教えてもらって動物の世話をする。

動物小屋ではいつもの面々が迎えてくれた。アカリからウシにブラシをかけてくれと指令が出る。アカリは見本を見せてくれると、ボクにブラシを渡してヤギの方へ向かった。アカリがヤギの世話を始めたのを見計らってか、モウ太郎が話しかけてきた。モウ太郎とウシである。

「おい、チャトラン。どうして人間なんだよ」

「ちよっとわけありでさ。人間になっちゃった」

「へえ、おまえにブラッシングされる日がくるとはね」

何言ってるんだよ、気持ち良さそうなくせに。でも不思議だ。モウ太郎の背中に乗っけてもらっていたのに、今はモウ太郎を見下ろしているんだから。感慨にふけっていると、アカリに呼ばれた。

「タケルくん、こっちもお願い」

「はい。じゃあね、モウ太郎」

「おう、また頼むわ」

ボクはモウ太郎に別れを告げて、アカリの元に駆け寄った。

「おまたせ」

「フワちゃん、あ、ヒツジにブラシをかけてくれる？」

「わかった！」

ボクはルンルン気分で、フワちゃんに近づいた。フワちゃんの毛並みはとってもふかふかしていて肌触りが良いんだ。

「フワちゃん、おはよう」

「あ、チャトランじゃない。どうしたの、その格好」

「ちょっとわけありでさ。これからボクがお世話するからね」

ボクは断りを入れて、フワちゃんの背中に顔をくっつけた。ああ、ほんとに気持ちいい。雲ってこんな風にふわふわしているのかな。顔をうずめたまま、手で毛並を撫ぜ撫ぜしていると、後ろから肩をポンと叩かれた。

「タケルくん、サボってないで、ブラッシングしてね」

「はい」

ちえっ、見つかったちゃった。もっと触っていたかったな。ブラシをフワちゃんの背中に当てる。フワちゃん、気持ち良さそう。顔をうずめたい衝動に駆られる。後ろをそっとうかがう。アカリがこっちを見てた。おっと、危なかった。ボクはブラッシングに集中する。ひとかきひとかき丁寧。さっきよりさらに毛並みが良くなる。スリスリしたい。後ろを向く。アカリがまだ見てた……。

結局、チャンスがめぐってこないまま、動物小屋を後にした。アカリが動物たちを外に出している。ピヨッチがひよこを引き連れて散歩を始めた。ボクもその後について歩く。

「ピヨッチ、ごきげんよう」

「チャトランじゃないか。えらく大きくなっちゃったねえ」

「うん、わけありでさ。ピヨッチが可愛く見えるなんて不思議だよ」
「どうでもいいけどさ、うちの子を踏まないように気をつけておくれよ」

「うん」

体の大きさがぜんぜん違うから、距離感がつかめない。一步を踏

み出したらヒヨコを踏みそうになって、ちょっと距離を開ける。うん、ネコのときと景色が違うな。地面を這うアリンコの姿も見えない。両手を頭の後ろに組んで空を見上げた。空が近く感じる。何か変な気分だった。

「タケルくん、何してるの？」

アカリが呼んでいる。慌ててアカリの元へ駆けていく。アカリは白い目でボクを見てる。そんな目で見ないでよ！いつもの習慣で遊んでいただけだから。

「ひよこが可愛いなと思って」

「可愛いわよね。でも、まだやることあるからね」

アカリはそう言いながら、ジョウロをボクの手にした。アカリってば、結構人使いが荒い。

夕方、空が赤く染まるころ、酒場へ夕食を食べに行く。いつものアカリの習慣だ。薄暗い室内には、黄色がかったランプが灯り、テーブルの上には白いうそくがポツと慎ましく燃えている。情熱的な音楽が流れ、店の奥に作られた小さな舞台では踊り子が官能的な踊りを披露していた。

ボクらはいつもの奥の席に通された。金髪をポニーテールにしたウエイトレスがやって来た。

「こんばんは、あら、可愛い子ね。紹介してよ」

「タケルくんよ。今日から預かることになったの」

「男の子なんだ！？初めまして。あたしはキャシー、よろしく」

「初めまして、タケルです」

キャシーとは初対面じゃない。ネコのときはよく遊んでもらった。彼女はボクをじろじろ見る。それも目を丸くして。ボクってそんなに女っぽいのか？キャシーはアカリに寄って、小声で訊ねている。全部聞こえているよ！

「親戚の子？」

「違うわ。知り合いに頼まれたの」

アカリは面倒くさそうに説明すると、ボクの方を向いた。

「タケルくんは何を食べる？」

「あのさ、手で持って食べられるやつないかな？」

アカリとキャシーが顔を見合わせた。この質問はまずかったかな。女神さまに注意されていたんだよね。スプーンやフォークは上手く使えないだろうから、かぶりつけるものにしなさいって。「ボク、何か変なこと言った？」と声をかけると、キャシーは「そんなことはないよ」と言いながら、メニューを開いた。

「サンドイッチかホットドッグはどう？」

「じゃあ、サンドイッチで」

サンドイッチやホットドッグが何かわからないけど注文する。アカリは他にもいろいろ注文した。

料理が運ばれてくるまでの間、かまってほしくてアカリをじっと見つめた。だって今日はまだ遊んでもらってないんだ。ボクの視線に気づいたアカリは、ビクツとすると視線をそらした。窓の外をぼんやりと見ている。窓の外には暗闇しかないのに。

「ねえ」

「なに？」

アカリがこっちを見た。目の奥に冷たいものが立ち込めている。こんなのいつものアカリじゃない。どうしたらいい？ タケルとしてアカリと仲良くななくちゃ。また初めからやり直しか。人間になった分、ハードルが高くなっている気がするけど。何でもいいや、何か話そう。

「アカリってさ、いくつ？」

「二十歳」

「ボクより、三つ上なんだ。ずっとここに住んでるの？」

「いいえ。来たのは五年ぐらい前よ」

そう答えると、またアカリは窓の外へ視線を移した。また沈黙が訪れる。あんまりにもアカリの態度がつれなくて、ボクはへこんだ。母親に見放された子ネコの気分ってこんなものかな。結局、料理が

くるまでの間、アカリは何もしゃべってくれなかった。

ボクが己の境遇を不憫に思っている間に料理が運ばれてきた。アカリの前には黄色の小山みたいなオムライス。ボクの前には、三角のサンドイッチ。いただきますとアカリがスプーンでオムライスを食べ始めた。とろっとしておいしそう。ボクがじっと見ていると、アカリが気付いた。

「どうしたの？」

「ごめん、なんでもない」

ボクは自分の皿に目を戻した。サンドイッチを一つ手で取った。どの角から食べようか。迷った挙句、てっぺんにかぶりついた。んっ、うまい！

「おいしいね、サンドイッチ」

「初めて食べたんだ？ ユバさんの作る料理はどれもおいしいんだよ」

「ふうん」

「スープも飲んでね。サンドイッチだけじゃお腹が膨れないわよ」
ボクのために注文してくれたんだ。うれしいな。目の前に置かれた小さな皿に入った黄色の液体。その横にはスプーン。これってスプーンを使わなきゃだめかな？ アカリが首をかしげてボクを見ている。どうしよう。冷や汗が出そう。

「スプーンの使い方、わからない？」

「うん」

アカリは呆れたような表情をして自分の前に置かれたスープ皿に左手を添えて、右手でスプーンを持った。

「はい、タケルくんもやって」

ボクもアカリと同じように持ってみたけど、なんか変。アカリはそれに構わず、スプーンを手前からボクのほうに動かして、自分の口へ運んだ。ボクも同じようにやってみる。スプーンの中にオレンジ色のドロっとしたスープがふるふると震えている。緊張するな。

思い切って口をつけてみた。ん、んっ、おいしい！

「良く出来ました」

アカリはにっこり笑った。やった、褒められた。今度はサラダを食べるように言われた。またアカリが手本を見せてくれた。ボクはフォークを持って、皿の中のレタスに突き刺した。レタスを口に入れて咀嚼する。もしやもしやした。ネコって、地べたに生えている草を食べるんだよ。その草と比べると、何の味もしない。もっと、こう苦味が欲しい。ボクが変な顔をしていたのかもしれないが、アカリがうかがってきた。

「おいしくない？」

「おいしくないというか、味がしない」

「そう？ でも、野菜もちゃんと食べなきゃね。ムニエルもあるわよ」

アカリがボクの前に押し出した皿には、ツヤツヤしたピンク色の切り身とぽってりとした白いかたまりが乗っている。アカリがフォークとナイフで切り身を切り分けてくれた。それをフォークですくって食べた。んっ、魚だ。脂が乗っててしょっぱくてなんかいい香りがする。おいしくて食が進むこと！ あっという間に平らげてしまったボクに、アカリは目を丸くしている。

「タケルくんは魚が好きなのね」

「うん」

「じゃあ、そのマッシュポテトも食べてね」

この白いぽってりしたかたまりのことかな。スプーンに持ち変えて、すくい取り口に入れた。マッシュポテトは嚙まなくても口の中で溶けた。

「おいしいね。何、これ？」

「ジャガイモをつぶして味付けしたものなんだって」

「へえ。ボクにも作れるかな」

ボクの独り言を聞きつけたのか、エプロンをつけた人がやって来た。アカリより小さいけど、ふくよかなおばあちゃんだ。

「坊や、料理したいのかい？」

「はい」

ボクの答えに、おばあちゃんはうんうんとうなずいた。

「じゃあ、うちで働いてみるかい？」

「いいの!？」

ゾクゾクした。こんなに早く料理を習うチャンスがめぐってくる。なんてラッキーなんだ、ボク。

「ちょ、ちょっと待って下さい、ユバさん」

アカリが慌てて会話に割り込んできた。

「タケルくんは、その、手先が不器用で、すぐ仕事っていうのもどうかと」

「でも、もう働ける歳だろ？ 仕事しないでどうするんだい」

「そうなんですけど」

アカリの言葉は歯切れが悪い。説明しようがないんだろうな。おばあちゃんは、ニヤニヤと笑みを浮かべた。

「ああ、アカリがこの子を手放したくないんだね。悪かったよ。あんたたち、そういう仲なのかい。早く言ってくればいいのに」

「ち、違います！ 私たち、そんな関係じゃ——」

「何、赤い顔してるんだい。ああ、やっとアカリにも好きな人が出来たんだね」

「ユバさん、ほんとに誤解なんですって！」

おばあちゃんの言葉に、アカリは立ち上がり、テーブルを力いっぱい叩いた。そんなに思いつき否定しなくたって……。

「あの、はっきり言わせてもらいます。タケルくんはスプーンを使うのも初めてみたいなんです」

「そうなのかい？ 訳ありなんだね。まあ、いいさ。あたしが仕込んでやるよ」

「本当にいいんですか？」とアカリが言った。

「女に二言はないよ」

「どうする？ タケルくん」

アカリがボクに確認してきた。ちょっと心配だけど、料理を教え
てもらえるならこんなありがたいことはない。

「ボク、やりたい」

こうしてボクの勤め先がめでたく決まったのだった。

食事を終えて家に帰ると、アカリはさっさと入浴を済ませて、寝室に入ってしまった。取り残されたボクは、ソファでランプの灯りをぼんやりと眺めた。なんだか人間になって損した気がする。人間って抱っこしてもらえないんだ。さっき一緒に寝ようって言ったら、こっぴどく叱られた。

すると、つけっぱなしのテレビから軽快な音楽が聞こえてきた。

アカリが毎朝見ている番組。夜も放映しているんだ。そうだ、テレビを見なくっちゃ。ボクはアカリに料理を作ってあげるために人間になったんじゃないか。本来の目的を思い出してテレビを見る。女性が出てきて料理を紹介し始めた。アカリみたいにメモを取ろうと、テーブルの上に置いてあった紙と鉛筆を手にとった。

「あれ？」

何を書けばいいかわからない。タマゴって言葉はわかるけどどんな字かわからない。そもそも、町に氾濫する看板や標識の字は見た事はある。でも、なんて書いてあるのかわからない。

ボクはがっかりして紙と鉛筆をテーブルに戻した。番組はどんどん進行していく。とにかく見なくっちゃ。番組内では、女性がコンロにフライパンを置いていた。そして薄く油を塗り温めている。冷蔵庫からタマゴを取り出し、シンクのフチにコンコンとタマゴをぶつけた。ぶつけちゃうの！？ 女性は涼しい顔をして、タマゴをフライパンの上に持ってくる、くす玉が開くように両手でパカッとタマゴを割った。タマゴはフライパンの上にダイブすると、白いドレスをひるがえすように広がった。端がビチビチと小刻みに震えている。水を少量入れて、蓋をしてしまった。

次はどうするんだろう？ ボクは画面に釘付けだった。

女性はひとしきりおしゃべりをする、蓋を開けた。タマゴの黄身の部分があの白いふわふわしたもののかぶったようにうっすら白くなっていた。

「はい、目玉焼きが焼きあがりました。切ったキュウリやトマトを添えて完成よ」

女性が誇らしげに皿を見せる。料理屋のショーウィンドに飾られていた目玉焼きと一緒にあった。

料理番組が終わってしまったてやることもないので、あてがわれた部屋に入ってベッドに横になる。いつもと違う天井が目に入る。アカリの温もりのない冷たいベッド。目をぎゅっとつむってみる。疲れているのに、なかなか寝付かれない。何度も寝返りを打った。真っ暗な部屋にはベッドのきしむ音がするだけ。人間って大変だ。気ままなネコの生活がもう懐かしく感じる。いつもアカリに抱っこされて、えさをもらって、どこに行くにもリュックに入れられて、ゆりかごの中のように居心地がいい。でも、そんな生活ともおさらばなんだ。ボクがアカリの役に立つんだ。

そんなことを考えていると、居間の時計が二回鳴った。あれ？ なんだか暑い。掛け布団をはいだけど、ほとんど体が熱を持ってくる。おかしいぞ。そう感じている間に胸が焼けるように痛んだ。一瞬気が遠くなったかと思うと、熱がスーッと引いた。いったい何だったんだ？ 熱が冷めると、今度は寒くなって、掛け布団を引っ張り上げようとした。だが、ぜんぜん手が届かない。あれ！？ 毛むくじゃらだぞ。何のことはない、ネコの姿になっていた。柵からばた餅ってやつ？ やった！ アカリの所へ行こうと。ボクは喜び勇んで、階段を駆け下りた。

「入るよ」と鳴いて、戸の向こうへ滑り込む。アカリはいつもボクのために戸を少し開けておいてくれる。アカリはベッドですやすや眠っていた。ボクはアカリのベッドに飛び乗った。アカリが寝ぼけながらも、掛け布団を上げてくれた。入ろうと思った。しかし、さ

っきの出来事が頭をよぎる。「い、一緒に寝る！？信じられない！」という、アカリの言葉。ボクはベッドから飛び降りて、スゴスゴと自分の部屋に戻った。

「人」生は甘くないみたい

ボクは真っ白なエプロンをつけて、左手にフライパン、右手にフライ返しを持っている。テーブルについているアカリが目を輝かせて、感嘆の声を上げた。

「チャトランが作ったの!？」

「そうだよ。食べてみて」

アカリはボクが作ったオムライスを口にした。つやトロの黄金色のオムライス。ボクのひげが緊張してピンと立っている。口をもぐもぐ動かしていたアカリの顔が、みるみるほころんでいく。

「おいしい! チャトラン、本物のコックさんみたい」

「よかった。ボク、これからずっとアカリのために作ってあげるよ」
「ほんと!? うれしい、チャトラン、大好き!」

そう言って、アカリがボクを抱っこしてくれる。アカリの腕の中はあったかくて柔らかくて、天にも昇る心地だ。

残念なことに夢だった。目が覚めたらボクはふかふかの掛け布団にすっぽりとくるまっていたのだ。お日さまの光が窓から差し込み、ボクの顔を照らしている。まぶしさに再び目をつむる。頭の中は真っ暗で何も思い浮かばない。夢なら覚めないで欲しかった。でも、これはボクの希望なのだ。いつか夢の中みたいに料理上手になって、アカリに抱っこしてもらうぞ。ボクは決意を新たにした。

今日から宿屋で見習い修行の日々が始まる。見習い中は昼間で、仕事を覚えたら夜間の仕事に変わる。

朝、顔を洗って洗面所から出てくると、アカリが近づいてきてボクの顔を覗き込んだ。な、何? 撫ぜ撫ぜしてくれるのかな! ボクは期待に胸を膨らませる。

「ちゃんと洗えたみたいね」

洗顔チェックだった。お預けを食らってダメージは半端じゃない。一気に気分は急降下して、がっくりとうなだれた。そんなボクに構いなしにアカリの指摘は続く。

「寝癖があるわ」

そう言うと、アカリはボクの髪を触った。地肌に触れないところから、どうやら髪が立ち上がっている部分があるみたいだ。アカリに手をむんずとつかまれて洗面所に連行された。鏡の前に立たされる。前髪がニワトリのときかみたいに立っている。寝ぼけていたから気がつかなかった。アカリは水道の栓をひねって水を出すと、その水をすくってボクの前髪に振りかけた。

「何するの！？ 冷たいよ！」

「我慢しなさい。男の子でしょ」

アカリはさらにボクの前髪をワサワサとこねくり回す。次第に、髪が水分を吸ってしんなりしてきた。まるでワカメが頭に乗っているみたい。アカリは洗面台の引き出しからクシを取り出すと、ボクの髪をとかし始めた。なんか地肌にクシがかかって気持ちいい。うっとりしていると、容赦ないアカリの言葉が耳に入った。

「明日からはちゃんと自分で整えるのよ」

「はい」

洗面所を出ると、次の指令が飛んできた。

「着替えてきて」

「はい！」

ボクは、さっと自分の部屋に戻る。アカリが用意してくれた真新しいシャツに靴下、スラックスをはく。靴も履き替えた。

下へ降りていくと、アカリが腕を組んで待ち構えている。思わず後ずさりした。アカリはつかつかとボクの前にやってくると、頭の前からつめの先までじろじろと観察する。そしてボクの首に手を回した。びくっと体を強張らせると、アカリは面白くなさそうに口を尖らせた。

「襟が立ってる」

そう言って襟を直してくれた。なんだ、そういうことか。手を煩わせているから、首を絞められるかと思ったよ。

「これで、大丈夫ね」

アカリがにこりと笑った。ほっとしたボクは思わず、「なんかだんなさまになった気分」と漏らした。すると、「ばかなことを言っていないで、しっかりがんばるのよ」と叱咤された。やれやれ、あの夢が正夢になるのはいつになることやら。いつものようにパンとミルクで朝食を済ませると、ボクは出勤した。

ワッフルタウンの入り口に宿屋はある。その一階が食堂になっており、夜は酒場に変身する。ここがボクの仕事場だ。身の引き締まる思いがする。ボクはドアノブに手をかけて、中に入った。

「おはようございます」

カウンターにいる人が顔を上げてボクを見た。金髪でサイドを三つ編みにしている女性だ。ふんわりとした甘い砂糖菓子、そんな印象だった。

「今日から働く人？」

「はい、お世話になります」

「おばあちゃんから話は聞いているわ。おばあちゃんを呼んでくるから、そちらの席で座って待っていてね」

女性は奥の扉の向こうに消えた。ボクは言われたとおり、窓際の席に座った。さっきの話だと女性はユバの孫ってことだろうか。それにしても緊張する。窓の外に目をやると、ネコが一匹歩いていた。ボクもこの間まではのんびり気ままに歩いていたんだよね。お昼寝が大好きなボクが真面目に仕事できるのだろうかと少々不安になる。待っている時間が長く感じられた。

戸の開く音がして「ご苦労さん」と声をかけられた。ボクが振り返ると、ユバとさっきの三つ編みの女性が立っていた。

「おはようございます」

「紹介するよ。孫娘のマイさ。ここでウェイトレスをしているよ」

「よろしくね」

「タケルです。よろしくお願いします」

「えらいね。きちんとした言葉遣いだ。マイも見習いな」

「はい」

ユバにたしなめられたマイが舌をペロッと出した。言葉遣いもアカリがレクチャーしてくれたんだ。社会人はきちんとした言葉を使わなきゃだめなんだって。

エプロンを支給され、身につける。紐を結ぶのにモタモタしていると、ユバが手伝ってくれた。そのユバに訊ねられた。

「タケルはどうしてこの仕事をしようと思ったんだい？」

「ええと、アカリにご飯を作ってあげたいからです」

「そうかい。そりゃあ、アカリが喜ぶだろうよ。あの子は料理音痴だからね」

ユバは愉快そうに笑った。

厨房に入り、設備や道具の説明を受けた。基本的にアカリの家にあるものと変わりなかった。ただ巨大だった。ボクがすっぽり入るぐらいのずんどう鍋だったり、大きな炊飯器だったり。棚を見るとお皿やコップが何十人分も収められていた。その多さにびっくりしている、トントンと肩を叩かれた。最初の仕事は今日のお昼ごはんを作る。ユバは包丁を右手に持ち、左手で手元にあったメモ用紙を一枚つかむと、包丁に当てた。触れた途端に紙はすぱと切れた。その切れ味に思わず身震いがした。その切れ味の良い包丁で材料を切る。面白いことに、材料を押さえる手はネコの手みたいにグーにするらしい。ネコの手ならボクの大得意だ。ボクは慎重に野菜を切る。ザクザク、トントン、なんだか楽器みたいだ。材料を切り終えると早速調理にかかる。ユバはフライパンをコンロに置いて火にかけた。ボワっと上がる炎にボクはびっくりして仰け反った。

「男の子がだらしのないね」

「ごめんなさい」

謝るしかなかった。だって、爆発したみたいに炎が上がったんだもん。動物は火が苦手だ。元ネコのボクにもそれは当てはまる。でも、アカリにご飯を作ってあげるといふ壮大な目的がある。アカリに抱っこしてもらうんだ。頑張るぞ。

ボクがこぶしをぎゅっと上に向けてガッツポーズをしていると、ユバは勇敢にもフライパンの上に手をかざしていた。すごいな。

「タケルもかざしてごらん」

「はい」

やっぱりね。感心している場合じゃなかった。すごく怖かったけど、人間になったんだから出来るはずだ。そっと手をかざす。じわじわとだんだん熱くなって、我慢できなくて手を引っ込めた。ユバは自分も手をかざすと、大きくうなずいた。

「ここまで熱くなったら油を敷いて、フライパンに良く馴染ませてから野菜を入れるんだ。見ているんだよ」

そう言ってユバはフライパンに材料を放り込んでおりだした。野菜がフライパンの上で、ホップ、ステップ、ジャンプって踊らされている。もし野菜がしゃべることが出来るのなら、きっと「ヤッフィー！」とか叫んでいるような気がする。そんなこんなで、野菜は艶良く炒め上がった。

「塩コショウで味を調えたら出来上がりさ。そこの皿を並べておくれ」

ボクが後ろの配膳台に重ねられていた皿を広げると、ユバはすばやく盛り付けた。そしてスープとタマゴ焼きとホットミルクを作った。

「これで朝ご飯は作れるだろう」

「先生？」

「アカリにご飯を作ってあげたいんだろう。毎日やっていれば出来るようになるさ。頑張るんだよ」

「はい、ありがとうございます」

ユバはホールに向かってみんなを呼んだ。昼食をユバ、マイ、マ

イの両親と一緒に食べた。四人は楽しそうに歓談しながら食事をしている。ボクはだまって話を聞きながら食事をする。これでアカリに朝ご飯を作って上げられる。ユバの心遣いに感謝した。

食後、食器の洗い方を習う。ボク、水って苦手なんだよな。

「水仕事は嫌い？」

ボクの横で洗っていたマイに訊ねられた。ボクは、「慣れないもので」とごまかした。マイはふふっと笑った。

「無理しないで、少しずつ慣れていけばいいよ」

「うん、ありがとう」

マイって優しい。皿洗いはあつという間に終わり、マイは奥の扉の向こうに消えた。お昼休憩だ。何をするあても行くあてもないボクは、とりあえず外の空気を吸いに行くことにした。

少し歩くと、潮の香りが漂ってきた。どこまでも真っ直ぐな海岸線が見えてくる。沖にはカモメがゆったりと飛んでいる。栈橋を見ると人影があった。じっと目を凝らして見る。アカリとタオだった。タオというのはアカリが仲良くしている漁協の職員だ。魚料理が恐ろしく上手い。ネコるとき、ボクもよくご馳走になった。二人は並んで釣り糸を垂れている。ボクはネコのときのように二人に近づいた。「アカリ」と呼びかけると、アカリは振り返った。

「タケルくん、休憩？」

「そうだよ」

アカリに話しかけられて有頂天になっていると、鋭い視線を感じた。視線の主はタオだ。

「アカリさん、その方が例の居候さんですか？」

「ええ」

ボクは軽く会釈して挨拶をした。

「初めまして」

「初めまして、タオです」

タオとはネコのとくに何度も会っているのでボクには親近感しか

ないのだけど、タオからはピリピリした雰囲気を感じられる。それは仕方ないのかもしれない。タオはアカリに好意を持っているんだから。人間の姿で現れたボクをライバルと見なしたのかな。そのタオから意外な言葉が出てきた。

「アカリさん、タケルくん、今晚夕食を一緒にどうですか？」

「まあ、いいの？」

「ええ、この魚をご馳走しますよ」

そう言って、タオは魚籠から80センチほどの大きな魚を取り出した。アカリは大乗り気だ。タオがボクを誘ってくれたのには驚いたけど、すごくうれしい。なんてったってタオの作る魚の煮付けは絶品なんだから。

仕事が終わる頃、タオが酒場に寄ってくれることになっている。

本当はボク一人でも行けるんだけど、何しろここに来たばかりという事になっているので、素直にタオの好意に甘えることにした。

約束の時間に宿屋を出ると、既にタオは来ていた。

「お待たせ」

「いえ、今来たところですから」

そう言って、タオは地面に置いた魚籠を持ち上げた。あの中に大きな魚が入っているんだよね。楽しみ。タオの家に向かって歩き出す。ワッフルタウンを出た所でタオが口を開いた。

「ワッフル島は良い所でしょう？」

「そうだね」

「魚はおいしいし、町の人も皆親切ですしね」

「でも、まだ馴染めないんだ」

「来たばかりですしね。時間が解決してくれるという事もありますから」

「優しいんだね、タオ」

「そんなことはありませんよ」

タオは糸目をさらに細くして微笑んだ。初めて会った人間のボク

に親切にしてくれる。きっとネコのと看みたいに仲良くしてもらえ
る。そう思った。

タオの家のあるメープル湖の岸で、アカリは釣りをして時間をつ
ぶしていたようだ。タオはアカリの姿を認めると、小走りに駆けて
いった。

「アカリさん、お待たせしました」

「こんばんは。今夜はご馳走になります」

屈託のない笑顔を見せるアカリとほんのり頬を赤く染めるタオ。
ちよつとむつとして二人の間に割つて入つてやつた。

「ねえ、今夜は何を食べさせてくれる？」

「タケルくん、催促するなんて失礼よ！」

アカリに叱られてしまった。するとタオが勝ち誇つたような顔を
した。やっぱりボクのことを面白くないと思つてゐるのかな。

「まあまあ、アカリさん。今夜は刺身と煮付けですよ」

おおつ、絶品の煮付けだ。アカリに叱られたこともすっかり吹き
飛んだ。呆れた顔をしたアカリがボクの耳元でコソつとささやいた。
(これからよそのお宅へ入る時のマナーを教えるから、真似するの
よ)

(了解)

タオの後に続いてアカリが「お邪魔します」といって玄関の戸を
くぐる。ボクも同じように「お邪魔します」と言つて中に入った。
アカリが上着を脱いで、ハンガーにかけてゐる。ボクも真似た。「
お手洗いを借りますね」とタオに言いながら進むアカリ。ボクも同
じように断わつてアカリの後をついていく。入つたのは洗面所だ。
「さあ、手を洗つて」

「はい」

ボクはアカリの監視の下、手を入念に洗つた。手をペツペツと振
つて水しぶきを飛ばして、タオルで手を拭こうとすると、アカリに
止められた。

「まだ石鹸がついてる」

「あっ」

手首の辺りに泡が残っていた。もう一度、水で流し、手を振ってからタオルで拭いた。よし、今度はストoppがかからない。アカリは手を洗い始める。先に洗面所を出ると、タオが目の前に立っていた。眉間にしわを寄せて浮かない顔をしている。

「どうしたの？」

「いえ、二人がなかなか出てこないの……」

「心配させちゃったんだ。手の洗い方を教えてもらってただけだから」

「手、ですか？」

ボクは怪訝そうなタオの問いに答えず、いつも座るソファに腰掛けた。

いつもながら落ち着いた室内である。なんていうのかな、和の雰囲気っていろいろだろうか。ボクがまったりしていると、洗面所からアカリが出てきた。ソファに座らないで、そのままキッチンのタオの元へ向かった。二人で楽しそうにしゃべっている。つまらない。ボクは手近にあった青いクッションを抱きかかえた。ネコのときだったら転寝を決め込んだというのに、人間になったらまったく眠くない。昼間、仕事中に居眠りしたらどうしようと心配していたのが嘘みたいだった。することがなくて退屈をもてあましているとき、テレビから軽快な音楽が流れてきた。料理番組である。今日の講師はマイだ。三つ編みの金髪が軽やかにはねて、それは楽しそうに料理を紹介している。さすがユバの孫だけの事はあるな。食い入るように画面を見ると、「食事にしましょう」とタオに呼ばれた。

食事が始まると、最初の期待はもろくも崩れ去った。二人とも気は使ってくれるんだけど、それが気に障る。だって、ネコのときでも同じ時間を共有していたのに、人間になった途端ボクだけ余所者なのだ。絶品の魚の煮付けの味もよくわからなかった。

スキンシップ不足のボクは、家に帰ってからアカリに字を教えてくれるように頼んだ。もっとお話したかったんだ。字がわからないとメモが取れないってアカリに告げると、快く引き受けてくれた。やった！これで、夜の時間が寂しくないぞ。

風呂を済ませた後、居間のソファに隣同士に座って本を読んでもらう。アカリは字を指で追いながら読んでくれた。それなのに、ボクはアカリから漂ってくる香りに心を奪われていた。いつも嗅いでいた匂いなのにどうしてだろう。ぼうっとしていると、静かになったのに気がついた。アカリを見ると、ボクの顔を覗き込んでいた。

「もう眠い？ 目がトロンとしてるわよ」

「え、うん」

まさかアカリの香りにぼうっとしていたなんて言ったら怒られる。「今日は初出勤だったから疲れたのね。続きは明日読んであげるから、今日はもう寝なさい」

アカリは本を本棚に戻すと寝室へ入った。しまった。アカリと長く過ごすためには、まじめに勉強しなくっちゃ。

天使の気まぐれ

仕事を始めて数日がたった。調理にも少しずつ慣れてきて、時間はかかるけれど作れるようになってきた。ボクは一大決心して、アカリに朝食を振舞うことにした。

朝、起きると、アカリはもう仕事に出ていた。急いで身支度を済ませ、外へ出る。アカリは畑で収穫をしているところだった。

「おはよう、タケルくん」

「おはよう。あのさ、野菜を分けてもらっていい？」

「いいわよ、好きなだけ持っていって」

アカリの承諾を得て、ボクは畑から野菜をもいだ。ツヤツヤとした赤いトマト、みずみずしいレタス、水滴を身にまとったキュウリ。その他いろいろと持ち帰った。野菜をシンクに置いて、エプロンをつける。野菜の下ごしらえをし、鍋やフライパンを火にかける。冷蔵庫からタマゴやミルクを取り出す。アカリがおいしいって言うってくれるといいな。時計を見ると、六時半だった。あと三十分もすると、アカリが帰って来る。さっさと作らなきゃ。

テーブルの上に出来上がった料理を並べる。レタスとキュウリとトマトのサラダ、タマゴ焼き、コンスープ、今日は牧場に生っているオレンジジュースも作ってみた。後はトーストが焼けるのを待つだけだ。

戸が開いた。アカリが不思議そうな顔をして入ってくる。そしてテーブルの上を見て驚いたようだった。

「これ、タケルくんが作ったの？」

「うん、そうだよ」

ボクは得意げに答えて見せた。鼻がピノキオみたいに伸びてるかな。アカリが洗面所に手を洗いに行ったので仕上げに取り掛かる。

トーストが焼きあがるチンという音。ボクは皿にトーストを盛り付け、スープをよそう。

アカリが出てきてテーブルについた。

「いただきます。おいしそうですね」

口だけは褒めてくれるアカリは、いまだに笑顔を見せない。それを目の当たりにしてボクの心臓はバクバクしている。アカリがスープに口をつけた。固唾を飲んで見守っていると、硬かったアカリの顔がぱあっとほころんだ。

「おいしい。タケルくん、すごくおいしいよ」

「おかわりあるからね、たくさん食べて」

よかった、今日のところは大成功だ。

「今夜から夕食を作るから、家で待ってて」

「ええ」

アカリが笑ってくれた。人間になって、初めて良かったと思った瞬間だった。

意気揚々と仕事場へ出向くと、マイが店の前で掃除をしていた。

「おはよう」

「おはよう、テレビを見たよ。マイって料理が上手なんだね」

「あれはねえ……いつかばれるから言っちゃうけど」

マイが耳打ちして教えてくれた。本当はからっきし料理が苦手らしい。

「うそ！？ 先生の孫なのにな？」

「あー、それ言っちゃだめ！」

マイは途端に涙目になってしまった。人形のように綺麗な青い瞳がみるみる洪水をおこす。触れちゃいけないところに触ったみたい。

「ご、ごめん！ ああ、どうしよう」

ボクがおろおろしていると、マイはホウキをボクに押し付けて、ワッフル広場の方へ走って行ってしまった。ほんとにどうしよう。ぜんぜん悪気はなかったのに。すると、宿屋からユバが出てきた。

ボクの顔を見て、心配そうに訊ねた。

「どうしたんだい？」

ボクは今の出来事をユバに話した。ユバは小さくため息をついて宿屋へ戻っていった。そして手に袋を持って出てきた。

「それでも食べさせておやり。悪かったね。マイはどういうわけか料理は全くだめなんだ。舌は肥えているんだけどねえ」

ボクはお礼を言って、ワッフル広場へ向かった。

ワッフル広場は役場の前にある。花壇が整備されていて、広場の端っこには時計塔が正確に時を刻み続けている。その奥の高台からは海を見ることができて、恋人たちが愛をささやきあったりしているのを見た事がある。

マイは広場のベンチに腰掛けていた。もう泣いてはいないようだが、うつむいていた。ボクはそっと近づいた。

「マイ、さっきはごめん」

「ううん、こっちこそごめんね。本当のことなのに……」

とっても素直なマイに心臓がチクッと痛む。傷つけちゃったんだよね。ボクは返事をせずに隣に座った。そして袋をマイに差し出した。

「はい、これ」

「何？」

「先生にもらったんだ」

マイは袋を受け取ると、開けて中味を取り出した。宝石みたいにキラキラした赤い粒だった。

「タケルも食べなよ。おばあちゃんの作るキャンディはおいしいんだよ」

「ありがとう」

ボクは差し出された袋の中に手を入れて、ひとつつまんだ。出てきたのは緑色のキャンディだ。

「あ、メロン味だね」

マイはキャンディをほおぼって頬を膨らませたまま言った。ボクもキャンディを口に入れる。確かにメロンの味が広がった。そしてガジガジかじった。

「だめだよ、かじっちゃ。口の中で転がすの！」

真剣に怒るマイに少々びっくりしながらかじるのをやめた。甘くてほっぺが落ちそうだった。舐めていると幸せな気分になる。そんな気がした。ふと、横を見ると、マイは足をぶらぶらさせて、空を仰いでいた。

「私ね、おばあちゃんやお母さんの真似してよく料理したんだ。でも、どういうわけか、まずいのしか出来ないの。おばあちゃんの孫っただけで、おいしい料理が作れるのが当たり前って他人は見る。」

そう思うと、余計頑張らなくちゃって気合が入りすぎちゃうのよね」
マイはマイなりにプレッシャーと戦っているらしい。でも、やっぱり作り続けないと上手にはなれないと思う。

「先生は毎日作っていれば上手になるってボクに言ったよ？」

「それは、タケルに料理の才能があるからだよ。私はだめ」

落ち込むマイを何とか勇気付けたくて、ボクの料理に対する意気込みを話すことにした。

「ボクさ、アカリにご飯を作ってあげたくて頑張ってるんだ」

「へえ」

マイは興味を示したようだ。

「マイも誰かのために作ってみたら？」

「誰か？ そんな相手いないもん」

口をつんととがらせて、マイは立ち上がった。そして、ボクをじっと見下ろしていたかと思うと、体をかがめてボクの目のまん前に顔を近づけた。大きくて澄んだ青い瞳がボクを見ている。あんまりきれいで吸い込まれそうだ。

「じゃあ、タケルが食べてくれる？」

「ボクでよかったら」

「うん、ちょっとやる気が出てきた！ これ、ありがとう」

マイは袋を顔の横で振りながら笑った。あの砂糖菓子みたいな笑顔だった。

それから、ボクとマイは休憩のときに料理をするようになった。同じものを作ってお互いの料理を試食する。そして、おかしいと思う点を二人で話し合う。そして次の日にまた作る。その繰り返しをした。

発見したことは、マイの舌は異常に鋭いってことだ。味については正確に材料まで言い当てる事が出来るし、的確な評価は出来る。本能的に美味しいものを求めている。そしてあれを入れたらもっとおいしくなるんじゃないか。そう感じて入れる。すると、とんでもないものが出来上がる。あくなき探究心が暴走の元なのだ。

でも絶句するほどすごかったマイの料理はだんだん良くなっていった。マイの熱意が感じられた。

ある日のこと、二人で出来た料理を批評しあっていると、後ろから声をかけられた。

「仲のいいことだね」

そこに立っていたのは、夜の酒場でウェイターをしているチハヤという男性だった。見た目は女みたいにキレイなやつんだけど、少しひねくれた物言いをする。ボクが下手に出て話しかけても、深入りするのが嫌なようで、のらりくらりとかわされる。しかし、どういうわけか今日はしつこくからんできた。

「今日は早いだね」

「店長に呼ばれたんだ。ところで、君たちは何をしてるのさ」

「見ればわかるでしょ？ 試食してもらってるのよ」

「マイ、君って性懲りもなくまた作ってるの？ やめとけって言うただろ」

「チハヤには関係ないでしょ！ タケルはチハヤと違って優しいんだから」

一瞬、チハヤの表情がひきつるのが見て取れた。

「へえ、それは良かったね。タケル、今度胃薬分けてあげるよ」

「チハヤのバカ！」

マイが手近にあった布巾を投げつけたが、チハヤはそれを難なく交わして店を出て行った。マイを見ると、手をぎゅっと握り締めて、目に涙をためている。

「大丈夫？」

ボクはマイに椅子に座るように促がした。ボクはグラスに水を入れて、マイの前に置いた。そして向かい側に座る。あんなひどい言い方をするなんて、二人の間には何かあったのだろうか。聞いたけれど、マイは何も教えてくれなかった。

その日の夕食の席で、アカリに話を聞いてみた。

「マイとチハヤって何かあったの？」

「あるにはあったけど、どうして？」

ボクは今日の出来事をアカリに話して聞かせた。アカリは黙って聞いていたが、思い当たることがあるみたいだった。

「以前、マイが感謝祭の日にケーキを焼いてチハヤにプレゼントしたの。そのときのチハヤの感想を聞いたマイが落ち込んだことがある」

「なんて感想？」

「甘くて、くどくて、飲み込むのも無理、吐き出していいって聞いたんだって」

「すごい勇氣だね。ひょっとしてそれから料理しなくなっちゃったの？」

「ええ。あの頃のマイはチハヤの事が好きだったから」

「そうか。トラウマなんだね」

「でも、いいじゃない。今はタケルくんがいるんだから」

「えっ！？ ボクとマイはそんな関係じゃないよ」

「そう？ お似合いだと思うけど」

「アカリ、ひどい！」

ボクは思いつきアカリをにらみつけた。誰のために人間になったと思っているんだよ。

アカリはボクの迫力に押されたのか、少々バツが悪そうだ。ごちそうさまって言うのと、そそくさと食器を持ってキッチンへ行ってしまった。

ボクとマイの努力の成果が試されるときが来た。フリーマーケットの料理の販売をユバから任されたのだ。ボクらは、休憩時間はもちろん休みの日も頭をつき合わせて、何を作ろうか、ラッピングはどうしようか、店番のローテーションなどを計画した。

「何を出す？」

「私が出るのは、クッキー、キャンディかな」

「ボクは、ケーキとプリンだ」

「じゃあ、クッキーとキャンディは前日に作れば良いよね。当日は早起きしてケーキとか作ろう」

「そうだね。あと、屋台の飾り付けやラッピング材も用意しないと」

「ああ、やることいっぱいだね」

マイは青い瞳をキラキラさせている。とっても嬉しそうだ。またその青い瞳に吸い込まれそうになる。ボクがぼうっとマイの瞳を見ていると、トントんと肩を叩かれた。

「タケル、どうかした？」

「ううん、なんでもない。材料はお店から発注しよう」

「じゃあ、ラッピング材は私が買ってくるね」

「ボクも一緒に行くよ。荷物持ちにはなれるよ」

「じゃあ、今から行こうよ」とマイは嬉しそうに笑った。

仕立屋は宿屋の目と鼻の先だ。マイに手を引っ張られて、仕立屋へやって来た。お菓子を詰めた袋を縛るリボンを買うためだ。

「どれがいいかな」

マイは手を後ろに組んで、たくさんのリボンとにらめっこしている。

「お眼鏡に適うのはあった？」

「うん。お菓子によって色分けするか迷ってるの」

マイは腕組みをして、首をかしげて考え込んでいる。その姿が可愛らしくて思わず頭をポンポンと叩いてしまった。「何？」と上目遣いでにらむマイ。ボクは笑ってごまかす。結局マイは五色のリボンを買求めた。その入った紙袋を抱えて店を出る。ボクもその後について出る。すぐマイを追い越して、袋を取り上げた。マイは口を尖らせてボクを見た。

「何するの？」

「ボクの仕事でしょ」

マイは「ありがとう」と言っ、ボクの腕に自分の腕をからませしてきた。そして「なんかデートみたいだね」と頬を赤く染めた。

家に帰り、早々に自分の部屋に入る。ベッドに腰掛けて腕を見た。マイと腕を組んだ。それだけなのに胸がドキドキする。どうしたんだろう、ボク。こんな感情は初めてだった。

フリーマーケットの日、ボクとマイは朝からてんでこ舞いだった。当日作る分を作り、冷ましている間に会場へ出向いて店の飾り付けをする。二人で、ああでもないこうでもないと言い合いながら作業する。

店を開けると早速お客が来た。アカリとタオだ。

「わあ、おいしそうなのがいっぱいね」

「アカリ、おまけするからいっぱい買ってよね」

「うんうん。このクッキーは誰が作ったの？」

「えっへん！ 私だよ」

マイが腰に手を当ててふんぞり返っている。アカリはクスクス笑って、試食のクッキーを口にした。

「おいしい！　マイ、上手になったね」

「アカリ」

マイはアカリに抱きついた。アカリは苦笑しながらマイの頭を撫でている。その後、

アカリとタオは何やら相談してたくさんのお菓子を買っていたくれた。

お店は思いのほか盛況で、昼過ぎにはほぼ商品が無くなるほどだった。夕方残っていたのは、クッキーの袋が五つだった。

「すぐ売れたね」

「うん。私のクッキーが売れるなんて夢みたいだよ」

マイは胸の前で手を組んで瞳をきらきらさせて喜んでいる。ほんとにうれしそう。ボクも自分のことみたいにうれしい。二月前のことか嘘みたいだにマイは上達した。

あわただしい時間も終わりを迎える。店じまいの時間になった。残った商品を片付けようとしたら、クッキーの袋が宙に浮いた。

「これもううよ」

チハヤがクッキーの袋を手に使っていた。頬を赤く上気させて、その顔はなんとも照れくさそうである。チハヤがこんな表情をするなんて意外だった。チハヤがポケットからお金を出そうとしていると、マイがチハヤの手から袋を取り上げた。

「チハヤに食べさせるのなんか無いもん！」

マイの言葉にチハヤの顔は一気に青ざめた。呆然としているチハヤにかける言葉が見つからない。

「そう……売りに協力してやろうと思ったのに」

チハヤはマイを悲しそうに見つめた後、捨て台詞を残して去って行く。マイはというと袋を握り締めたまま、わなわなと震えている。

ボクはマイを広場のベンチまで連れて行き、座らせた。

「どうしてそんなにチハヤに辛く当たるの？　マイらしくもない」

「いいのよ。チハヤなんか、冷たくて口が悪くて意地悪で……」

後はポロポロ涙を流すだけで答えになっていない。アカリが言っていた。マイはチハヤが好きだったって。きっとマイの心の中に、まだチハヤが住んでいるんだ。

「マイ、ボクはマイの素直なところが好きだな」

「えっ？」

マイがはじかれたようにボクの顔を見た。ボクはニコツと微笑んで見せた。

「今日のチハヤは素直だったよ。『これもらうよ』って言ったただけだ。マイが取り上げちゃったから、憎まれ口を叩いたんだよ。意味わかる？」

「うん」

「自分が変わらないとだめなんだよ。マイはチハヤが好きなんですよ？」

「わ、私は――」

「隠したってだめだよ」

ボクは屋台からクッキーの袋を持ってきて、マイの手の中で粉々になっているものと交換した。

「さあ、追いかけてこれを渡して謝るんだよ。わかった？」

マイは頼りなげにボクを見上げた。ボクの大好きな、透き通った青い瞳が涙で濡れている。

「マイは笑っていた方が断然可愛いよ。ほら」

ボクは、マイを立てさせてそっと背中を押した。マイは振り返って涙を手でぬぐうと、「行ってくる」と告げて走っていった。嬉々として走っていくマイの後ろ姿に胸がきゅっと縮こまった。

一人で屋台を片付けて、売り上げをユバに渡して、家に帰る。牧場までの道のりはいつもと違って遠かった。足が重くてちっとも進んだ気がしない。やっとのことでたどり着く。アカリはまだ帰っていないかった。薄暗い部屋の中、灯りもつけずにボクはソファの前まで来た。手近にあった赤いクッションを抱えてソファに座る。何だ

ろう、胸が苦しい。チハヤと仲直り出来たかな。マイのことを考えるたびに切なくなる。ボクはクッションに顔をうずめた。

気がつく、部屋の灯りがついて明るくなった。アカリが帰って来たのだ。アカリはソファでうずくまるボクの姿を見てびっくりしたようだ。

「どうかしたの？」

「何でもない」

アカリはボクの向かい側に座った。アカリにしつこく話を聞かれた。アカリの熱心さにほだされて、ボクはマイとチハヤの事を話した。そして、今ボクの心を占めている空虚感について吐露した。アカリは黙って聞いてくれた。

「アカリが言ってたよね？　マイはチハヤのことを好きだったって」

「ええ」

「だからボク、マイをチハヤの元に行かせたんだ。マイ、泣いていたけどうれしそうに走っていった。そのとき心臓を鷲づかみされたように痛んだ。それからマイのことが頭をよぎるたびに、胸が苦しくなる。どうして？」

アカリは辛そうな表情を浮かべた。右手の親指を口元に持って行き、目を伏せたり首を横に振ったりしていたが、手を膝の上に置いてボクを見た。

「タケルくんはマイに恋をしてたんだよ。だからショックだったんだね」

マイのこと好きだった？　ボクの頭の中をマイと過ごした瞬間^{とき}が駆け巡る。気付いた途端、目から涙が溢れ出した。

「タケルくん、ちょっと大人になったね」

アカリの差し出してくれたハンカチで顔を隠した。初めての恋はしょっぱい後味がした。

女神さまはいたずら好き

今回のフリーマーケットが成功を収めたことで、ボクはユバの代わりに酒場でシェフをすることになった。しかし、一つ問題があった。マイとの特訓はどうするか。ボクは夕方出勤になるからだ。せっかくマイの腕が上達し始めたところだったので、このままなし崩しに特訓をやめるのはかわいそうだった。すると、チハヤがマイの先生を買って出てくれた。「ボクが教えてあげるよ。でも、手加減しないからね」って照れくさそうに言った。そのときのマイはともうれしそうだった。でも、その笑顔を目の当たりにしてもボクの心は波立たなかった。

今日は日曜日、酒場はお休みである。とっても良い天気で空には雲ひとつない。うん、絶好の昼寝日和だ。

昼ごはんを食べているときだ。アカリが窓の外を見て、ため息をついた。こんなに良い天気なのにどうしたんだろう。

「ため息なんてついて、どうかしたの？」

「チャトラン、どこへ行っちゃったのかと思って」

ネコのボクの話しか。自分のことなのに知らん顔して話すのって、結構苦勞するんだよね。

「ペットのネコだっけ？」

「そう。タケルくんが来た頃から姿を見せないの」

「ど、どうしてだろうね」

そりゃボクがチャトランなんだから出てくるわけがないんだけどさ。顔を見せたほうがいいのかな。相変わらず戸を少し開けておいてくれるんだよね。でも、人間になったときに言われた「一緒に寝る!？」信じられない」って言葉がトラウマになって、ネコに戻っても行く勇気が出ない。

いろいろと思いをめぐらせていると、アカリがボクの顔を覗き込

んでいた。な、何かな。まだ墓穴は掘っていないぞ。

「タケルくんって、ネコが嫌い？」

「そんなことないよ。大好き」

そう、自分が大好き。アカリも大好き。

「そう、それなら問題ないわよね」

アカリはスプーンを置くと、宙を見上げてつぶやいた。

「女神さまに相談してみようかな」

「そ、それがいいよ」

「じゃあ、一緒に行こうか。しばらく会っていないんでしょ？」

「う、うん」

実は何度も相談に行っているんだ。人間の世界ってわからないことだらけで、話を聞いてもらっている。でも、今日はお昼寝日和…

「でも、今日は良いお天気だからお昼寝しない？」

「しない。タケルくんが行きたくないなら、一人で行ってくるわ」

「い、行っく！」

慌てて前言撤回する。一緒に出かけてくれることなんてほとんどないんだもん。こんなチャンス逃すわけには行かない。お昼寝は次の機会にしよう。

食後、アカリに連れられてジェラート山に出かける。女神さまがうまいこと誤魔化してくれることを期待して。

吹き渡る風が女神の泉の表にさざなみ立てている。風はやさしくて、野の花もうれしそうに頭を揺らしている。女神さまは大樹の根元に座り、コロボックルたちとおしゃべりしている。ボクたちが歩くので、かさかさと草を踏みしめる音がする。その音に気づいたのか、女神さまがこちらを見てニッコリ微笑んだ。

「あら、アカリにタケルではありませんか。ごきげんよう。二人そろってどうしたのですか？」

「こんにちは、女神さま」

アカリは深くお辞儀をした。ボクもあわてて真似をする。体を起こしたアカリが唐突に話を切り出した。

「あの、ネコー——チャトランを探してもらえませんか？」

「あら、チャトランならアカリのそばにいるでしょう？」

「えっ？」

女神さまは澄ました顔をした。アカリはきよんとしていいる。ボクはと言うと、顔から血の気が引いた。女神さまったら何を暴露しているんだよ！　ボクの顔色に気づいたような女神さまは、それでも素知らぬ体で得意げに答えた。

「あなたの牧場の近くでよく見かけますわ」

アカリは眉をひそめた。

「そうですか？　私たちは見ないんですけど」

「おかしいですわね。ガールフレンドと仲良く散歩をしているのを見かけますわ」

女神さまってば、悪乗りしすぎ！　それってボクとアカリのことを言っているんでしょ。でも、それを聞いたアカリの声のトーンが数段落ちた。

「そうか。チャトラン、友達が出来たんですね。だから帰ってこないんだ」

「そ、そんなことないよ！」

思わず反論してしまった。ボクはガールフレンドなんていないし、アカリのそばにずっといるんだもん。

でも、ボクが反論したせいで、アカリはまたきよんとする。女神さまなんて手を口元に当てて笑いをこらえている。そして目の端ににじんだ涙をふきながら、アカリにささやいた。

「アカリにはチャトランみたいに手のかかるタケルがいるから良いではありませんか」

「女神さまが押し付けたんでしょ！」

ボクは雷に打たれたみたいに衝撃を受けた。まだそんな風に思っていたんだ。ボクってアカリの役に立ってないのかな。塩をかけら

れたナメクジみたいに体が縮んでいくみたい。それに胸の中にすっぱいものが広がってくる。

すると、アカリは急にガバツと振り返った。そして真っ青になった。

「タケルくん、そういう意味じゃないからね！ 迷惑とかじゃないから。助かってるし、にぎやかだし——」

アカリが身振り手振りを交えて弁明している。これって、ボクが居候していることをアカリは迷惑に思っていないってことだよ？
ボクは女神さまを見た。問いかけるようなボクのまなざしに、女神さまがニツコリ笑ってうなずいている。ボクはすごくうれしくなった。人間になって後悔したこともあったけど、今のアカリはボクを必要としてくれてるんだ。

「ありがとう、アカリ！」

ものすごくうれしくて、思わず抱きつく。するとアカリの悲鳴が女神の泉にこえました。女神さまは口元に手を添えて、「まあ、やりますわね」って笑うし、アカリには突き飛ばされるし踏んだり蹴ったりだ。

ジェラート山から帰ってきててもアカリはご機嫌斜めだ。抱きついたのがそんなに嫌だったのかな。

今夜もアカリに字を教えてもらおうと思って、本を持ってアカリのところへ行く。アカリはボクを上目遣いで睨んでる。でも、ここで引き下がったら今夜の楽しみがなくなっちゃう。

「ねえ、教えて」

アカリは返事をせずにボクから本を取り上げた。アカリのアーモンド型の瞳はつり上がってるし、唇はアヒルみたいにとんがってる。どうしよう、まだ怒ってるみたい。立ち尽くしていると、アカリが自分の隣を指し示した。あっ、許してくれたのかな。ボクはうれしくなってちょこんと隣に行儀良く座った。今読んでもらっているのは、「はなのみち」というお話だ。小学生用の本なんだって。図書

館で借りてきてくれたらしい。

「くまさんが、ふくろをみつけました。おや、なにか。いっぱいはいっている」

いつものようにアカリが本を読んでもくれる。とっても優しいお話でボクは好きだ。

「はい、今度はタケルくんが読んで」

ボクは渡された本を受け取り、字を追う。

「くまさんが、ふく……？」

「ふくろ」

「くまさんが、ふくろをみつけ……ました。おや、なにか。いっぱいはいっている……？」

「はいっている」

「くまさんが、ふくろをみつけました。おや、なにか。いっぱいはいっている」

全部読めた！ ボクはうれしくてアカリの顔を見た。

「読めたよ！」

「えらい、えらい」

アカリがニツコリ笑って褒めてくれる。

「じゃあ、今度は書いてみようか」

今読んだ文を紙に書くんだ。最初はアカリがボクの手を持って一緒に書いてくれた。一人で書いてみなさいって言われる。ボクは紙の前で姿勢を正す。緊張するな、うまく書けるかな。一字一句ゆっくり書く。

「出来たよ！」

紙をアカリに見せると、アカリはじっとボクの書いた字を見た。

「ちょっと残念ね。『さ』が鏡文字になってる」

紙を見ると、『さ』が『ち』になっていた。ボクは慌ててその横に正しく書き直した。

「これでいい？」

「いいわ。良く書けました」

「やった！　じゃあ、あの本読んで」

「はいはい」

ボクのお気に入り、*「ルドルフとイッパイアッテナ」*という本なのだ。野良ネコのルドルフとその土地のボスネコのイッパイアッテナのお話だ。その本を読んでもらっていると、都会での生活のことを思い出す。そしてアカリの柔らかな声を聞いていると、なんだか安心して眠くなってくる。抱っこしてもらえないけど、すごく満ち足りた気分だ。

いつの間にか眠ってしまったみたいで、ボクはソファで横になっていた。体には毛布がかけてある。回りをぐるっと見回してアカリを探す。アカリは暖炉の前のロッキングチェアに座りうたた寝をしていた。時計を見ると、もう十二時をさしている。ボクは毛布をたたんでアカリのそばに行く。少し口をあけて気持ちよさそうだ。時々口の端が上がって楽しそう。どんな夢を見てるのかな？　そんなことを思いながら、アカリの背中と膝の下に手を入れて抱え上げた。アカリをベッドに連れて行く。そしてそっとおろす。アカリは「うん」とうなったが、そのまま布団で丸くなる。ネコの時には出来なかったこと。人間なら出来ること。ボクは人間になって良かったって思えた。

女神さまはいたずら好き（後書き）

「ルドルフとイッパイアッテナ」は本当に寿が大好きだった本です。
ふと思い出して書いてしまいました。

愛ってなあに？

酒場で仕事をするようになってから、常連のオセと知り合いになった。オセは大酒飲みで毎晩のように通ってくる。親しくなると酒場へ通う理由をこっそり教えてくれた。ウェイトレスのキャシーに惚れているんだそうだ。キャシーは金髪をポニーテールに結ったグラマーな女性だ。竹を割ったような性格で、彼女は変わっていると言われるボクにも親切に世話を焼いてくれる。そんなキャシーに相手にされなくて撃沈しているオセを慰めるのが最近の習慣だ。

ボクは今夜もキャシーに体よくあしらわれたオセの愚痴を聞いていた。

「なあ、キャシーって男がいるのかな」

オセはひじをテーブルにつけて頬杖をついている。すっかり酔っているようで、いつもの精悍さは感じられないぐらいだ。ボクはオセの向かい側に座っているのだが、そのオセがぼやんとしてうつろにボクを見ている。

「いないんじゃない？ あの強面のハーパーさんが目を光らせているんだよ」

オセはカウンター越しにグラスを磨いているキャシーの父のハーパーに目をやった。丸刈りであご髭を森のように蓄えて、目つきは鋭い。体もがっしりしていてまるでプロレスラーみたいな人だ。でも、本当は仕事に疲れた人を癒したいって酒場を始めた心の優しい人なんだよね。ボクの返答に「それもそうだな」とオセは笑った。「ねえ、キャシーのどこが好きなの？」

オセは思い出し笑いをして惚気始めた。

「勝気そうに見えて、可愛いところがあるんだよ。幼馴染の俺しか知らないことだけだな」

「ふうん、そうなの」

「それで、お前はどうかなんだ？」

「ボク？」

「アカリじゃないのか？」

アカリのことは大好きだ。でもマイのときみたいに胸が切なくなったりしない。どっちかというと、心配でたまらなくて、一緒に寝て抱っこして欲しい存在だ。それってどうなんだろう。

ボクが返答せずにいると、オセはニヤニヤしながらボクを見た。

「タオがアカリにまわりついていているのは気にならないのか」

「気になるけど。ただの友達でしょ？」

「そうかもな。タオが恋人宣言したことはないな」

そうだよ。タオが恋人になっちゃったら、ボクがアカリのそばにいられなくなる。そんなの絶対に嫌だ。タオは良いやつだけど、それとこれとは話は別だ。オセは顎をさすりながらボクをじっと見た。「いつも愚痴を聞いてもらってばかりで悪いからな。今日はお前の相談に乗ってやる」

ボクは普段から切望していることを相談することにした。人間のオセなら知っているかも知れない。願ってもないチャンスだ。

「あのさ、どうしたら一緒に寝られるかな」

「ね、ね、寝るっ！？」

オセの慌てようといったらない。一緒に寝ちゃまずいの？

「お前なあ、男と女と一緒に寝るのは結婚してからだろう」

ふむ、そういうもののな。じゃあ、アカリと結婚すればいいんだ！ オセは頭をポリポリとかきながらボクを見た。

「都会っ子はこれだからなあ」

ボクは都会から来たことになっている。なぜかという、不思議ちゃんだからだって。なんだよ、不思議ちゃんって。バカにされているとは思えない。オセは薄ら笑いを浮かべながら、氷の入ったグラスを揺らした。氷がグラスにぶつかって、カランカランと音がする。

「お前がびっくりするようなこと言うから、酔いがさめちゃった。ところで、実際アカリとはどういう関係なんだ？」

「アカリはボクの飼い主だけど」

「飼い主!？」

オセはまた目を丸くした。そしてボクから視線を外して額に手を当てる。頭を横に振ったり、眉をひそめたり、忙しそうである。そんなことを一時した後、ぼそりとつぶやいた。

「アカリってそういう趣味だったのか。知らなかったな」

その後も自分の世界に入り込んでぶつぶつしゃべっている。業を煮やしたボクは待っていられなくてオセに訊ねた。

「ねえ、どうしたら結婚できる？」

「それを俺に聞くんなんて……お前、俺に恨みでもあるのか？」

オセはテーブルに代金を置いて、肩を落として帰って行った。オセに恨みなんてないよ。自分で相談に乗ってやるって言ったくせに！

ぶんぶんしながらテーブルを片付けて厨房へ戻ってくると、チハヤが腕組みをしてボクを待ち構えていた。マイがボクのことを、自分たちのことを後押ししてくれた良い人だって説明してくれたみたいで、それからのチハヤはボクに対して少し心を開いてくれたみたいなのだ。

「タケル」

「何？」

「オセと何を話してたのさ」

「どうしたらアカリと一緒に寝られるかって聞いたんだ」

「ね、寝る!？」

チハヤも慌てだした。人間ってどうなっているんだろう。寝るって禁句なの？ チハヤは頬を赤くすると、コホンと咳払いをした。

「オセは何て？」

「結婚してからだって」

「そりゃそうだね」

オセの言ったことは間違っていないらしい。よし、今度はチハヤだ。

「どうしたら結婚できるか知ってる？」

チハヤは困ったような顔を見ると、手を広げて、お手上げのポーズをとる。

「僕はまだ経験がないからさ。そういうのは経験者に聞いたら？」

「そうか！ その手があったね。ありがとう。誰に聞こうかな」

カウンターの裏でグラスを磨いているハーパーがいる。聞いてみよう。幸い客は誰もいない。ボクはつかつかとハーパーに近寄り、カウンター越しに話しかけた。

「ハーパーさん、聞きたいことがあるんですけど」

「なんだ？」

ハーパーはグラスを磨く手を止めた。教えてくれるんだと思ったボクはカウンターに手を着いて身を乗り出した。

「どうしたら結婚できる？」

「け、結婚！？」

「うん」

やっぱり驚いた。どうしてかな。

「誰と結婚したいんだ？」

「アカリ」

「そうか、アカリはいい子だ。どうしてアカリと結婚したいんだ？」

「一緒に寝たいから」

「ね、寝たい！？」

ハーパーはグラスを落としそうになった。まるでお手玉をしているみたい。グラスを捕まえると、ひゅうと息を吐き出して、何事もなかったようにグラスを磨きだす。そしてボクを問いただした。

「寝たいってなんだ。愛しているからじゃないのか？」

「愛してる？」

「じゃあ、質問を変えよう。アカリはお前にとって何なんだ？」

「アカリは飼い主だよ」

「飼い主！？」

ハーパーはまたグラスを落としそうになった。かろうじて死守し

たグラスをカウンターに置くと、「今時の若いやつは何を考えているんだ？」と、ぶつぶつ独り言を漏らしている。

「教えてくれませんか？」

ハーパーの顔を覗き込んだ。ハーパーはボクをじっと見つめたかと思うと、肩をガシッとつかんだ。

「何？」

「タケル、お前とアカリのプライベートなことは俺には関係ない。

でもな、愛する女のことを飼い主って、おかしいぞ」

「おかしい？」

「結婚は愛し合う者同士がするんだ」

「愛し合う者同士？」

「そうだ。好きなだけじゃだめだ。相手のことをこの世の中の誰よりも大事に思えること。そして相手もそう思ってくれないとだめなんだ」

「そうなんですか」

ボクはアカリといつも一緒にいたいし、ご飯を作ってあげたいし、抱っこされたい。それだけじゃだめってことかな。

「アカリにその気持ちを話した事はあるのか？」

「一緒に寝ようって言った事があります。叱られたけど」

「そりゃそうだろうな。好きの前に、寝ようって言われたら怒る。

どちらにしろ、お前に結婚はまだ早いと思うぞ」

ハーパーはさめた目でボクを見る。ボクはハーパーに礼を言って、厨房に戻った。

結婚はまだ早いって言われてしまった。じゃあ、一緒に寝られないじゃないか。どうしたら良いの？

今日は仕事が休みだ。アカリは遊んでくれないので一人で出かけることにした。

港まで足を延ばすと、栈橋の辺りにネコがいるのが見えた。黒いネコだった。なんだか懐かしくなって、ネコに声をかけてみた。

「ねえ、ここは君の縄張り？」

ネコは目を丸くしてボクをじろじろと見る。

「そうよ。あんた、人間のくせにアタシとも話せるんだ」

「まあね。元はネコだから」

「へえ！ 驚いた。なんで？」

「いろいろあってね」

ネコと並んで海を見ていると、昔のことが思い出された。仲間の死、人間の子供に追い回されたこと、残飯をあさっていて怒鳴られたこと、辛かった都会での生活。ボクはアカリのそばにいられて、何不自由ない生活が出来て幸せなんだ。一緒に寝たいとか、撫ぜ撫ぜしてほしいとか、抱っこしてほしいだなんて贅沢な望みなのかな。

「君はこの生まれなの？」

「ええ。あなたは都会から来たの？」

「そうだよ。君、この島で生まれて良かったね。都会は野良ネコが住むには大変なんだ」

「そうなの」

すると漁協の建物の影から、か細い鳴き声が聞こえてきた。振り向くと、こちらをうかがっている二匹の子ネコがいた。クリクリした丸い瞳を輝かせている。黒いネコが子ネコたちを呼んだ。子ネコたちは、母ネコがボクと普通に話しているからか、恐がらずに寄ってきた。

ボクは子ネコを一匹手に乗せた。片手に乗るくらいちっちゃい。耳の下をコチヨコチヨしてやると、気持ち良さそうに伸びている。

「可愛いね。いくつ？」

「生まれて三ヵ月くらい」

「ご主人は？」

「あっち」

黒いネコの視線の先に、一匹のネコがいて、こっちを睨んでいた。「ボクのこと、わかるのかな？」

「不思議なんじゃない？ ネコの気配がするのに、人間の姿だから」

ネコの姿だったら、追いかけていたかな。

「君、幸せだね。ご主人やこんなに可愛い子供たちがいて」

「あんたも早く結婚すればいいじゃない。もういい歳でしょ」

ネコだったら、結婚してもおかしくない年頃ということか。

「そうなんだけど……ねえ、愛してるってどういう事かわかる？」

「愛してる？」

「そう。だってご主人と結婚したのは愛してるからなんでしょ？」

「どうなのかしら。いつも一緒にいるのが当たり前だったから。知らない間にくつついちゃった」

「ふうん」

聞く相手を間違えたかな。子ネコを返して、ボクはそこを離れた。

まだ時間があつたので、教会まで足を延ばす。教会の墓地には女の人っていて、墓の前で祈りをささげていた。ボクの足音に気がついたようで、女の人が振り返った。

「あら、見かけない方ね？」

「タケルです。アカリのところで世話になってます」

「アカリさんのところの居候さんね。うわさは聞いているわ」

「うわさですか？」

「ええ。可愛い居候さんがいるって」

女の人は手を口に当てて笑った。ソバージュのゆるくかかった髪は肩の上まで伸びており、上品そうな婦人だ。

「あら、自己紹介がまだだったわね。私はミオリ。彫金士よ」

「アカリとはどういう関係なんですか？」

「アカリさんには力になってもらったの」

ミオリの話はこうだった。ご主人が亡くなられて生きる気力もなくなっていたときに、アカリに会い、慰められ励まされ、ご主人の後を継いで彫金の道に戻ったということだった。

「まだご主人を愛しているんですか？」

「ええ。亡くなくても、あの人は私の心の中で生きていますもの」

「そういうものなんですか？」

「そうね。あの人との思い出があるから私は生きていけます。あの人を思うだけで幸せな気持ちになる」

ミオリは両手を胸の前で組んで目を伏せた。なんともいえない幸せそうなミオリの姿にボクは驚いた。愛してるってことは報われなくても構わないってことなのだろうか。

「ご主人があなたに語りかけることも抱きしめることもないのに？」

ボクの言葉に、ミオリは一瞬ビクツと体を震わせた。そしてその切れ長の美しい瞳からひとすじの涙がこぼれた。

「そうね……でもあの人と出会えて良かった。そう思っています」

「ごめんなさい。失礼なことを聞いて」

ボクはポケットからハンカチを取り出して、ミオリに差し出した。ミオリは軽く頭を下げてハンカチを受け取ると涙をぬぐった。

「そんなことを聞くなんて、タケルくんは好きな人はいないの？」

「わからないんです。その人のことをどう思っているか」

ミオリは作り笑いを浮かべた。

「きつといつかわかる日がきますわ。それまで大事に温めることね」

そう言うとき墓地を出て行った。

ボクはその後姿を黙って見送った。初対面の人になんてひどいことを聞いてしまったんだろう。

日は西に傾き始め、空が茜色に染まりだした。アカリに夕ご飯を作る時間だ。教会から家に帰ろうとメープル湖の脇の道を歩いていた。カラムル川地区との境辺りに指しかかろうとしたときだった。

アカリとタオが立ち話をしているのが見えたので声をかけようと近寄った。しかし、ある言葉が聞こえてきて、ボクは反射的に物陰に隠れた。

「好きです」

タオの顔が赤い。それは夕焼けのせいではないだろう。アカリは目を丸くして口を手で覆っていた。

「アカリさんのことを考えると、心が温かくなるんです。こんな気持ちちは初めてです」

「タオさん」

「私と付き合っただけませんか？」

タオはアカリをまぶしそうに、アカリはまっすぐにタオを見つめている。

ドキドキドキ。ボクの心臓が悲鳴をあげている。アカリたちに聞こえてしまふんじゃないかと思うくらいに。ボクはリュックを胸の前で抱え、音が漏れないように心臓を隠す。でも頭の中は、アカリは何て答えるんだろうってことでもいいだ。立ち聞きなんてするものじゃないってわかっているけど、この場を去るなんて出来ない。固唾を吞んで見守った。

「あの、私……」

アカリがモジモジしていると、タオはニツコリと微笑んだ。

「返事は急がなくていいですから」

タオは地面に置いてあった魚籠を持ち上げた。

「また釣りに行きましょうね」

そう言うと、自分の家に向かって歩いていった。アカリは、それを切なげな表情で見送る。その場でしばらくたたずんでいたが、ため息を一つくと牧場に向かって歩き出した。

ボクはその場で膝を抱えてしゃがみこんだ。まさか目撃者になるなんて。それもアカリに対しての告白だなんて。ボクがアカリのことをどう思っているか、それもよくわからないのに、他人の告白シーンを見る羽目になるなんて。

しばらくじっとしていたせいか、いくぶん落ち着きを取り戻したボクは牧場に向かって歩き出す。でも心の中は悶々としている。アカリに会ったら何を話そう、そんなことばかり考えていた。

牧場に戻ると、アカリは動物たちを動物小屋に追い立てているところだった。でも、なんかうつろな感じで、モウ太郎たちが勝手に

小屋に入っている風だった。ボクはそれを横目で見ながら家に入
た。とても言葉をかけられるような気分じゃない。さっさとご飯を
作ってしまおう。そう思った。

ローリエの香りが部屋中に漂う。今晚はポトフと香草焼きにした。
いつもの時間にご飯は出来上がったというのに、アカリは家に入っ
てこない。出来立てを食べてほしくて、呼びに行くことにした。

外は薄暗くなり、明けの明星が輝いている。アカリは出荷箱の上
に腰掛けて空を見ていた。ボクはそっとアカリに近づいて、何気な
くを装って声をかけた。

「アカリ、ご飯だよ」

「タケルくん」

アカリはゆっくりと振り返る。アカリの瞳はやっぱりうつろで何
を映しているのかボクにはわからない。何も知らない振りをして訊
ねる。

「どうかしたの？」

「ちょっと疲れただけ」

アカリは動こうとしない。

「ポトフと香草焼きを作ったんだよ。帰って食べよう」

「先に食べて」

まるでボクに無関心なアカリに、なんだか不安になってくる。ボ
クはアカリに再度声をかける。

「帰ろう。もう冷えてきたよ。風邪ひいちゃうよ」

「ごめん、ひとりにしておいて」

岩のように動かないアカリ。

ボクはあきらめてひとりで家に入る。そしてひとりで夕食をとる。
味見をしたときはおいしかったのに、すごく味気なかった。

ボクは禁断の手を使うことにした。深夜ネコになったボクはアカ
リの部屋へ入る。アカリはやっぱりまだ起きていた。ボクが鳴くと、
アカリはベッドの上で起き上がった。

「チャトラン！ 今までどこに行っていたの」

ベッドに飛び乗ると、アカリはボクを抱き上げた。そして何度も頬ずりした。久しぶりのスキンシップにボクはうっとりした。アカリの膝の上に乗って、撫ぜ撫ぜしてもらう。

「チャトラン、話を聞いてくれる？」

返事をする、アカリが話し出した。やっぱりタオのことだった。ボクはそれを聞いていて複雑な気持ちになった。アカリは話し疲れたのか、やっと寝付いた。それを見届けてボクはベッドを抜け出す。部屋を出るとき、振り向いた。やっとアカリに抱っこしてもらえたのに、撫ぜ撫ぜしてもらえたのに、ちっともうれしくなかった。アカリの安らかな寝顔にこういうわけか胸に苦いものが広がった。

翌朝、起きてきたアカリはまだ元気がない。ボクはテーブルに着いたアカリの前にジュースを置いた。

「具合が悪いの？」

「ううん、そんなことないわ」

嘘ばかり。アカリの食欲はなくて、いつもの半分も食べなかった。

「何か悩んでるの？」

「悩んでなんかいないわ」

嘘ばかり。アカリはチャトランだったら抱っこして何でも話すんだ。そう思うと、腹の中がふつふつと煮えくり返ってくる。ボクはアカリの何なんだ？ ただ食事の世話をするだけの人なのか。

「そんなにボクって頼りない？」

「タケルくん？」

アカリは困惑した様子でボクを見ている。

「ボクよりチャトランのほうが役に立つんだ」

「何を言っているの？」

「今まで迷惑かけてごめん。さようなら」

ボクはアカリに別れを告げて家を飛び出した。後ろでアカリが呼

んでいたが、そんなことかまわない。女神さまに会ってネコに戻してもらおう。タケルのままではアカリの心の拠りどころになれない。

女神の泉に着いたボクは精一杯の大きな声で女神さまに呼びかけた。

「女神さま!」

「タケルではありませんか。慌ててどうかしたのですか?」

「ボクをネコに戻して!」

女神さまはびっくりした様子でボクを見る。下のほうでアカリがボクを呼ぶ声がした。ボクは大樹の裏に隠れた。走ってきたアカリは息も絶え絶えに女神さまに訴えた。

「女神さま、タケルくんが来ませんでしたか?」

「タケルですか? 来ていませんが」

「どうしよう。私のせいだ」

「落ち着きなさい。どうかしたのですか?」

「さようならって言って飛び出しちゃったんです。あんな彼は初めてで」

「思い当たることは?」

「実は、私人間に告白されて悩んでいたんです。心配してくれたけど、話すことも出来なくて白を切っていたら、ボクよりチャトランのほうが役に立つんだって」

「まあ、そんなことを言ったのですか。わたくしも探しましょう」

「私も――」

「いいえ。ひとりで帰ってくるかもしれません。アカリは家で待っていてあげなさい」

「わかりました。お願いします」

足音が小さくなって、やがて聞こえなくなる。

「もう出て来ていいですよ」

女神さまに言われて、ボクは大樹の陰から出た。

「アカリがタケルを探していましたね」

「でも、女神さま。アカリはネコのボクには悩みを話すのに、人間のボクには何も言ってくれないんだ。アカリはタケルよりチャトランのほうがいいんだ。だからネコに戻して！」

「落ち着きなさい。ネコに戻ったら二度と人間になれませんよ。ネコの寿命は短い。それにアカリがタケルを探しに来たではありませんか。チャトランは探さないでしょう？」

「そうだけど」

「可哀想にあんなにうろたえて……。あなたがいなくなったらアカリはきつと悲しみますよ。とにかくお帰りなさい」

女神さまに諭されて女神の泉を後にした。ジェラート山をゆっくりと下山する。自分の中でまだ納得できなかった。それにアカリに会って何を言えればいいのかもわからなかった。

ジェラート山のふもとにミオリがいた。ボクを見つけると、声をかけてきた。

「珍しいところで会いましたね」

「ミオリさんは何しに？」

「彫金のモチーフの参考にね」

そう言って、スケッチブックと色鉛筆を掲げた。スケッチブックには野に咲く花が描かれていた。ミオリに誘われて、切り株に腰をかけた。すると水筒からコップに注いでボクに勧めてくれた。ハーブティだった。ほんわりと湯気が立って、ハーブの香りが立ち込める。口を含むと、それはとても温かくて胸にしみた。

「元気がないようだけど、どうかしたの？」

ハーブティのマジックなのか、ミオリのやさしげな眼差しのおかげなのか。ボクは心の中のモヤモヤを話してしまった。

「アカリのことを心配しているのに、アカリは何もボクに話してくれない。ペットのネコには話せてボクには話せないんだ。それってボクがどうでもいい存在だから――」

「それは違うと思いますわ」

ミオリはボクの手を取った。

「以前、ある人をどう思っているかわからないって言っていましたね。それってアカリさんのことね」

ボクは無言でうなずいた。

「アカリさんが言っていました。タケルくんが来てからにぎやかになったって。彼の作る料理は温かいって。それって彼女の健康を考えてのことでしょう？」

「うん」

「そしてアカリさんの心の支えになりたいと思う気持ち。それも素晴らしい愛の形だと思います」

「ボクはアカリを愛しているってことなの？」

「ええ。逆にアカリさんもあなたのことを気遣っていますわ」

「そう？」

「ええ。相手のことを大切に思っているから、心配かけたくないって思うこともあります」

「だから相談してくれないの？」

「何を悩んでいるのかわからないからはっきりとは断言できませんけれど、そうだと思いますわ。相手を思いやって見守ることも大事ですよ」

ミオリはボクにハーブティのおかわりを勧めてつぶやいた。

「タケルくんがうらやましいわ。思いをぶつける相手が生きていて」「ミオリさん」

「あなたたちを見ていたら、私もこの世界に思いをぶつけられる相手が欲しくなりました」

そう言って、ミオリは空を見上げた。

ミオリに礼を述べてボクは牧場の家に向かう。ミオリの言ったことを反芻する。心配をかけたくないから話さない。相手を思いやつて見守る。アカリに何があったのか知っていたのに、ボクはどうしてアカリから聞き出そうとしたのか。アカリが心配なんじゃない。

自分が捨てられるかもしれないという不安なのだ。なんてずるいんだろう。

そんなことを考えながら歩いていると、いつの間にか牧場の家の前まで来ていた。扉を少し開けて中をのぞく。アカリは椅子に座り両手をかたく握り締めてうつむいていた。ボクはさらに扉を開けた。油切れした蝶番がギギッと音を立てる。その音に気づいたアカリが顔を上げた。目を見開いたかと思うと、あっという間に表情が緩んで目じりが下がる。黙って立ち上がりつかつかと歩み寄ってくる。ボクは思いつきり頭を下げた。

「ごめんなさい」

アカリは頭を下げたままのボクの肩に手を置いて起こしてくれた。「ううん、謝るのは私のほうよ。心配してくれたのに邪険にしてごめんね」

それだけ言うと、今度はアカリがうつむいてしまった。

「ボクこそ、すねてごめんなさい。あの……」

目の前のアカリはすごく弱弱しくて壊れそうに見えた。ボクはアカリを見つめる。アカリは視線に気がついたのか、顔を上げてくれた。許しを請う。自分で啖呵を切ったくせに。でも、体裁なんてどうでもいい。アカリのそばにいられるなら。

「ボク、まだここにいていい？」

「いいよ」

アカリが右手を差し出した。握手だな。人間って仲直りするとき握手するんだよね。ボクは右手を服の端でゴシゴシふいてからアカリの手を握った。抱っこされるより、撫ぜ撫ぜされるより、すごくうれしかった。

ライバルはタオ

宿屋の休みは日曜日だ。日曜日でもアカリは牧場の仕事がある。だから遊びに誘っても断られる。しかし！ 漁協は月曜日休みなのだけど、その日は牧場の仕事を早々に切り上げて、タオとカラメル滝に釣りに行くのがアカリの習慣になっている。何か不公平だ。ボクだって、おとなしくしてはいない。今日はアカリにまとりついて、遊びに行こうって誘うんだ。

アカリは牧草地で仕事をしている。モウ太郎やフワちゃんたちがそれぞれ群れを成して草を食んでいる。いつもどおりのんびりした日だ。ボクはその合間を縫ってアカリに近づいた。そして、そくさと彼女の前へ進み出る。

「ねえ、アカリ。ボク、今日休みなんだ！」

「よかったわね」

アカリは牧草を刈りながら、気のない返事をした。いつもどおりだな。

「ねえ、カラメル滝に行かない？」

「カラメル滝は、明日タオさんと行くからやめておくわ」
ちえっ、失敗した。どこかいいところはないかな。

「じゃあさ、オオトリ島は？」

「行かない」

「じゃあ、メープル湖」

「行かない」

「ジェラート山」

「行かない」

「もう！ どうして遊んでくれないの！」

「じゃあ聞けど、どうして私を誘うの？ マイやチハヤだって休みでしょう？」

「誘えるわけないじゃん。マイとチハヤは恋人同士なんだよ?」

アカリは、目を見開いた。

「あら、タケルくん。よくわかっているじゃない」

「だ、か、ら!」

いいかげんボクが激高すると、アカリは手を止めて呆れたような顔をした。

「わかったわ。お昼ごはんを食べたら出かけましょう」

「やった! 作ってくる」

やっとデートにこぎつけたぞ。お昼は何にしようかな。畑を見ると、シュークリームみたいなキャベツがつやつやしておいしそう。よし、お好み焼きにしようっと!

「アカリ、畑のキャベツもうね」

畑に入って、たくさんあるキャベツの中からどれにしようか品定めする。ボクらに食べてって言うてるやつは誰だ? でも、どれもこれも「食べて食べて!」って言っているみたいで迷っちゃうな。ボクがキャベツ畑でしゃがみこんでいると、アカリが心配そうな顔をして近寄ってきた。

「タケルくん、どうかしたの? 気分が悪い?」

「違うよ。どのキャベツにしようか迷ってるんだ。どれもこれもおいしそうだから」

そう答えると、アカリは表情を緩めた。そして手近にあったキャベツのひとつをカマでざっくりとしとめて、ボクに差し出した。

「これがいいよ」

「あ、ありがと」

問答無用なんだね。ちよっとびっくりしちゃった。

家に戻って早速キャベツを剥く。キャベツの葉はパリッとしていて、すぐ裂けちゃう。でも、いいか。どうせ千切りにするんだし。キャベツの旬は春だよ。春っていえば恋の季節だよ。ボクが愛情込めて作ったお好み焼きを食べたら、きっとアカリだって元気になる

さ。

剥いた葉を洗って、まな板の上でザクザク切る。この音、好きなんだよね。とっても潔いじゃない。切ったキャベツをざるに入れた。冷蔵庫を開ける。この前、アカリが大型冷蔵庫を買ってくれたんだ。ボクがいろんな食材を買ってきては冷蔵庫へ入れていたから、アカリの好きなジュースやカクテルを入れる場所がなくなっちゃったためだ。でも、アカリは怒らなかった。毎日ありがとうって言うてくれたんだ。すごうれしかった。

タマゴを取り出して扉を閉める。ボールにタマゴを割りいれて、軽くほぐす。棚から小麦粉をサラサラって入れて混ぜたら、千切りキャベツと揚げ玉も投入する。この揚げ玉がミソなんだ。フライパンを熱して油を入れて、タネを流す。ジュワッって音とともに、ボクの気持ちがかもったお好み焼きが出来上がっていく。ボクはガス台の前にいすを持ってきて座り、フライパンを見張る。そして、お好み焼きに願をかける。

「アカリと一緒に寝てくれますように」

「寝ません」

ハッとして振り返ると、アカリが帰ってきていた。

「おかえり。ごくろうさま」

アカリはボクの労いの言葉にも無言で洗面所に入ってしまった。

ボクの愛情のたっぷりこもったお好み焼きを食べた後、アカリが連れて行ってくれたのはコトリ島というところだった。無人島みたい。気候はどちらかと言うと夏のようで、長袖のシャツを着ていると汗ばむくらいだった。アカリは木陰に敷物を敷いて、その上でくつろいでいる。ボクは遠慮がちに横に座った。

「静かなところだね」

「そうでしょ。ボーっとしたいときはここに来るのよ」

「今日はボーっとしたいってこと？」

「そんなことはないけど。タケルくんは何がしたいの？」

逆に質問された。ボクはアカリのほうを向いて正座をした。

「ボクはアカリとお話がしたい」

アカリはきょとんとした。いつも一緒に生活しているのにどうしてということだろう。でも、アカリは自分のことを話したがらない。ボクは記憶喪失ってことになっている。でも意外なことにアカリが快諾してくれたのだ。

「いいよ」

「ほんと？」

アカリはニツコリ笑った。よし、まずは差しさわりのない話題にしよう。

「五年前に来たって言ったけど、どうして？」

「女神さまにスカウトされたの」

ふむ、女神さまの言うとおりでな。今度は誘導するぞ。

「ボクの料理、おいしい？」

「おいしいよ」

「じゃあ、ボクを専属コックにしない？」

「どういう意味？」

「だから旦那さんにしない？」

「しない」

ちえっ、だめか。じゃあ気になっていることを聞くことにするか。タオの名前は出せないから、オブラートに包んだ質問にしよう。

「じゃあ、誰と結婚するの？」

「誰とも結婚出来ない」

「出来ない？」

「だから一緒には寝ないからね」

おっと、防衛線を張られちゃったか。でも気になることを言ったよね。結婚出来ないって。

「私ばかり質問されているのも面白くないわね。記憶は戻った？
どうしようかな。」

「うん、少し」

「わかることだけで良いからね。タケルくんはどこから来たの？」

「都会」

「家族は？」

「知らない。物心ついたときには一人だった」

「そう。一人でどうしていたの？」

「家もないし仕事もないから、食べ物盗んで食べたり、食堂の人に恵んでもらったり、公園で寝たり」

「まあ！」

アカリはびっくりしたようだ。野良ネコじゃ当たり前なことも、人間では浮浪者扱いだ。ちよつと赤裸々過ぎたかな。

静かになった。聞こえてくるのは波の音だけだ。変だなと思って横を見ると、アカリが両手で顔を覆っていた。

「ど、どうしたの？ どこか痛いのか？」

アカリは首を横に振る。ボクはアカリの肩をゆすって訊ねる。

「ねえ、言ってくれないとわからないよ」

「だって……タケルくんが不憫で」

ボクが可哀想だっていうの？ 呆然とした。アカリがボクのために泣いてくれている。

「アカリ、ありがとう。ボク、今はすごく幸せだよ。こうやって普通に生きていけるし、アカリと一緒に楽しいしさ」

「タケルくん」

「でも、アカリと一緒に寝てくれると、もっと幸せになれるんだけど」

ボクがそう言うと、アカリは体をわなわなと震わせて「ばか！」と叫んだ。

翌日、アカリは牧場の仕事を済ませると、カaramel滝へ出かけていった。出勤まで時間があったので、ボクはカaramel滝へアカリたちの様子を見に行くことにした。

カaramel滝の岸辺でアカリと夕方は向かい合ってたらずんでいた。

何か、深刻な雰囲気だ。何を話しているか聞こえなくて、やきもきする。ただ、二人の神妙な顔が見えた。小鳥のさえずり、滝の水の落ちる音、草が風になびいてこすれる音。木漏れ日がスポットライトのように二人に降り注いでいる。タオが笑みを浮かべながらアカリに話しかける。そして滝に向かい、釣りざおを振った。釣り糸は弧を描いて水面に着水した。アカリも追従するように釣りを始めた。

話が終わったようなのでボクは二人に近づく。最初にアカリが気づいた。

「あら、タケルくん」

アカリの言葉にタオも振り返った。心なしかタオのこめかみがぴくっと動いたような気がする。

「何しに来たの？」

アカリってばひどい。完全に邪魔者扱いじゃん。こんなときのためにボクは用意してきたものを見せた。

「温泉で温泉タマゴを作ろうと思ってさ」

「そうなの」

カラメル滝の上のほうに、温泉が湧いているのだ。「じゃあね」と気のない振りをして二人の後ろを通り過ぎ、反対側のがけを登る。程なく目的の温泉に着いた。早速かごに入れたタマゴを温泉につける。そして、がけの下をのぞく。アカリの姿がぼっちり見える。

二人は本当に釣りに没頭している。しばらくすると、アカリたちは竿を固定した。何をするんだろうと見ていると、タオがバスケットから水筒を取り出して、カップに注ぎアカリに渡した。おいしそうに飲むアカリを見つめるタオ。それを飲み干すと、アカリは竿を片付けて帰ってしまった。

腕時計を見ると、もう昼だった。早く帰ってご飯の支度をしなくっちゃ。ボクはタマゴの入ったかごを持って、慌ててがけを下りた。タオはまた釣りをしていた。その後ろを通り抜けようとすると、呼び止められた。

「タケルくん、偵察ですか？」

「へっ？」

「バレバレですよ」

そうらしい。バレバレついでに聞いてしまおう。

「タオってアカリに告白したんでしょ」

「どうして知っているんですか？」

「偶然通りかかったって」

タオは狼狽していたが、あきらめたようにため息をつく。

「そうですか。想っているだけでは振り向いてもらえませんかね」

OKしてもらったと言わないところを見ると、タオはまだ返事をもらっていないのかな。そうだとしたら少し望みが繋がった。不謹慎だけど、なんだかうれしくなった。

「これあげるよ」

ボクはカゴから出来立てほやほやの温泉タマゴをひとつ手渡した。

そして、急いでアカリのあとを追いかけた。

不吉な予感

朝、ポストに手紙が入っていた。アカリ宛だ。ボク、少しだけど字が読めるようになったんだ。毎晩アカリに教えてもらってるおかげだね。裏を返しても差出人の名前はなかった。ただ太陽みたいなマークが記してあった。ソファに座ってテレビの天気予報を見ているアカリに声をかけた。

「アカリ、手紙だよ」

「ありがとう」

手紙を渡すと、アカリは封筒を眺めていたが、裏を返すと顔色がさっと変わった。ちよつと心配になって聞いてみた。

「誰から？」

「パパ」

アカリは答えると、テレビのスイッチを切った。父親からの手紙を見て、嬉しくないなんてどういうことだろう。

「嬉しくないの？」

「ええ。何が書いてあるか、想像つくし」

「何が書いてあるの？」

「家の問題だから」

そう言うのと、自分の部屋に入ってしまった。

ちえっ、アカリったら、また隠し事なんだ。ああ、でもミオリさんが言ってたよな。黙って見守ることも大事だって。ここは一つ、大人になって見守ろう！

その数日後、アカリが倒れた。毎日、ちゃんとご飯を作って食べさせていたのに。クリニツクのベッドの上で横たわる青い顔をしたアカリを見ると胸が張り裂けそうだった。肩をポンと叩かれた。ウォン先生だった。

ボクは診察室へ呼ばれた。そこには、髪が長くて、涼しい目元の

女性が慎ましく立っていた。先生はカルテを開くと、僕に質問をした。

「タケル、最近のアカリくんの様子を教えてくださいかい？」

「相変わらず、働いてます。早寝早起きです」

「食事の量は？」

「最近、半分ぐらい残します。お腹の具合が悪いのかって聞くと、そんなことないって言います」

「ふむ、アニス、どう思いませんか？」

アニスと呼ばれた女性は長い髪を揺らしながら首をかしげた。

「そうですね。アカリはダイエットしているんじゃないかしら」

「そういえば、風呂上りに体重計に乗ってはため息をついてます」

「それが原因か。ぜんぜん太っていないと思うけどね。あれだけの仕事量なのに、食事を減らすなんて自殺行為だな」

「若い女の子なんだから、体重は気になりますわ」

アニスの意見を聞いて、先生は小さくため息をついた。

「アカリくんには私から話しておこう」

「はい、お願いします」

「タケルさん、先に病室に戻ってください。後から行きますから」

何で、アカリはダイエットなんかしてるんだろう？ 太ったように見えないけど。人間になってからアカリの体を見てないからわからないや。

アカリは病室で大人しく横になっていた。アカリはさっきよりは頬に赤みが差している。点滴のおかげなのだろうか。ボクの顔を見たアカリが声を発した。

「タケルくん。心配かけてごめんね」

「そんなこといいんだよ。ねえ、ダイエットしてる？」

「え、ああ、まあ」

アカリは歯切れの悪い返事をした。ボクは身を乗り出して、布団に手をかけた。

「どうして？ アカリはぜんぜん太ってないよ」

「そんなことないのよ。お腹の周りがちよっとね」

アカリは横たわったまま、苦笑いをした。これじゃあ、ボクが人間になる前と同じじゃないか。

「そんなことやめてよ。ボク、心配なんだ」

「でも、私としては切実なの」

「じゃあ、お腹見せてよ」

ボクが掛け布団を引っ張ると、アカリが抵抗する。

「い、嫌よ！」

「そんな聞き分けのないこと言わないの！」

「どっちがよ！」

二人で、すったもんだを繰り返していると、戸が開いて手で口元を覆ったアニスが笑いながら入ってきた。

「ほんとに仲がいいですわね」

「ア、アニス、そんなじゃないからね！」

また、アカリってば全力で否定したよ。いいんだ、すねてやる。

ボクは椅子を病室の隅に持っていつて膝を抱えて座った。それを見たアカリは呆れ顔だ。アニスときたら、ますます笑い転げている。

「いやですわ、タケルさんたら。可愛らしい」

「えっ？ 可愛い？」

「はい」

アニスが涙を拭き拭き答えた。ボクの上でることって可愛いのか？ それは困る。ボクはアカリと結婚するんだから。男らしくならないといけないんだから。

結局アカリは五日間入院した。そして今日は退院の日である。

アカリは入院中ずっとベッドで横になっていたので足の筋肉が落ちてしまい、足取りもおぼつかない。自動車のないこの島で、どうやってアカリをつれて帰ればいいのか。そうだ、アカリを荷車に乗せて運ぼう。荷車まではおんぶすればいい。モウ太郎に協力を頼み、

アカリを迎えにいった。

クリニックへ迎えにいくと、アカリは身支度を整えて待っていてくれた。とっても嬉しそうで見ているボクまで嬉しくなってくる。張り切ってアカリの前で背を向けてひざまずいた。

「何？」

「歩けないでしょ？ ほら、乗って」

「いいよ、歩ける」

そう答えて、アカリはすくっと立ち上がる。でも頭を押さえてふらついた。

「ほら！ ふらふらしてるじゃないか。危ないからおぶっていく」

「ヤダ！」

「『ヤダ』じゃないの。途中で転んだらどうするの！」

すると、アカリの傍らでカバンを持って待っていたアニスが助けくれた。

「アカリ、今日のところは甘えておきなさい。荷車までなんですし」「でも」

アカリは恨めしそうにアニスを見つめている。アニスは笑顔を貼り付けて首を横に振る。その目は笑っていない。

「もっと入院します？」

「いいえ」

アニスに諭されて、アカリはおとなしくボクの背中に乗った。

病室から外の荷車まで五分もかからない。どういうわけか、アカリはボクから体を浮かしている。それじゃあ、歩くより筋肉を使うんじゃないのか？ 背中で息切れしているアカリをひょいっと背負いなおすと、悲鳴が上がった。

「何するの！」

「何って、それはこっちのセリフでしょ。そんなに踏ん張ってどうするんだよ」

「だって……恥ずかしい」

「ボクとアカリの仲でしょ」

「そんな誤解されること言わないで！」

ひどい、アカリ。ボクはむっとして、そばにあったいすにアカリを座らせた。ぽかんとしているアカリの背と膝に手を入れひよいと持ち上げた。

「わっ！ や、やめて」

「聞き分けのないこと言うからだよ。危ないから暴れないの！」

もう、こんなに元気な病人がいるのかな。あんまりアカリが暴れるものだから、落としそうになる。

「もう！ アカリ、いいかげんにしないと怒るよ！」

ボクがキツと睨むと、アカリはやつとおとなしくなった。アカリって甘やかしてはいけないのか？

おとなしくなったアカリを荷車に乗せた。ボクは荷車を引いてくれるモウ太郎に寄り添い、背中を撫ぜた。

「モウ太郎、ゆっくり頼むよ」

「任せとけて。アカリちゃんのためだ」

頼もしいやつ。ボクは荷車に乗ると手綱を握って、アカリに「行くよ」と声をかけた。アカリはこっくりとうなずいて、先生とアニスに頭を下げた。

ガタガタゴトゴト、ボクらを乗せて荷馬車は行く。お日さまはポカポカと気持ちよくて、頬を撫ぜる風は心地いい。後ろを振り向くと、アカリが気持ちよさそうに空を眺めていた。

「どう？ 外の空気は」

「すごく気持ちいいわ」

ボクはアカリの答えに満足し、前を向いて手綱を握りなおす。

「今日はお休みをもらったんだ」

「私のために？」

「そうだよ。一人にしておくとおとなしく寝てないでしょ」

アカリは無言だ。図星だったみたい。それにはかまわず話しかける。

「お昼はね、アカリの好きなオムライスを作ってあげるからね」

「ほんと？」

「ほんと。今朝ピヨッチがいいタマゴを産んでくれたんだ」

「楽しみね」

アカリの声音は本当にうれしそう。でも、すぐ無茶をするアカリに再度釘を刺す。

「ねえ、アカリ。もう無理しないでね。ボク心配でたまらないんだ」

「ごめんなさい。これからちゃんと食べます」

「ほんとだよ？」

「はい」

素直なアカリにちよつとうれしくなる。ボクがお兄さんになったような気分だ。

牧場に着くと、アカリがボクに動物たちのところへ連れて行つてとおねだりをした。ボクはアカリを抱っこして、牧草地でお昼寝をしているフワちゃんたちのところへ連れて行った。アカリをおろしてやる。すると、動物たちが我も我もとアカリに群がってきた。アカリはニコニコ顔でみんなに声をかけていた。とても幸せそうなアカリ。一通り挨拶が終わったようなので、ボクがアカリを抱き上げようとする、アカリに止められた。アカリはそのまま大地に寝転がった。

「気持ちいい」

ボクはあきれて、アカリの横へしゃがみこんだ。急いで、お風呂を沸かさなくちゃ。

「ボク、お風呂を沸かしてくる」

そういつて立ち上がろうとすると、アカリの手が伸びてきてボクの足首をつかんだ。

「タケルくんもつきあってよ」

珍しい声がけにボクは喜んで隣に寝転がった。空には、いろんな形の雲が浮かんでいる。アカリはそれを一つ一つ指差して、名前を

つけた。

「あれはモウ太郎ね。あっちはフワちゃん」
しばらくすると、アカリは静かになった。

「疲れた？」と声をかけると、アカリは「ううん」と答えた。

「いつも面倒かけてごめんね」

「別に面倒なんて思っていないよ」

「タケルくん、もう牧場の仕事は覚えてくれたんだよね？」

「うん。何とかこなしたよ」

「ありがとうね」

そう言うと、アカリは大きくため息をついた。

「どうしたの？」

「ううん、タケルくんも成長したなと思って。私がいなくても大丈夫そうね」

ボクはがばっと起き上がると、アカリの顔を覗き込んだ。

「何言ってるの！　ボクがついてないとアカリが大丈夫じゃないでしょ！」

「それは言ってる」

アカリは小さく笑った。高い空を見上げるアカリの目が寂しげにキラッと光った。アカリは目をゴシゴシこすると、起き上がりボクに向かって手を差し伸べた。

「おなかすいた。家に連れてって」

「うん！」

ボクはアカリを抱っこした。ボクに向けられたアカリのまなざしがキラキラしている。こんな視線が向けられるなんて思わなかった。とても幸せな時間だった。

届かない思い

最近のアカリはボクのボケにも突っ込んでくれて、いい感じである。ちよっと仲良くなったかなって、もうすぐ春も訪れるのかなって期待に胸が膨らむ日々である。そんなある日、アカリがうれしそうに帰ってきた。

「拾ってきちゃった!」

アカリの腕の中にいたのは、黒い子ネコだった。それもオス。ボクよりかなり幼い。なんか見たことがある気がする。

「こいつ、どうするの?」

「もちろん飼うわ。名前も決めたの。クロだよ」

相変わらずひねりのない名前だ。そんなことは関係ないとばかりに、クロは機嫌良さそうにゴロゴロと喉を鳴らしている。アカリはソファに座ってクロを膝に乗せて背中を撫ぜている。むかむかしてきた。あそこはボクの指定席なんだ。クロに渡すわけにはいかない。

「アカリ、クロを放してよ!」

「どうして?」

「だって」

答えたくても答えられない。

「変なタケルくんだね?　クロ」

アカリはクロを顔の前まで持ち上げてスリスリしてる。うらやましい……。クロがアカリの鼻を舐めた。

「だめっ!」

「タケルくん、さっきからどうしたの?」

クロは勝ち誇った顔をしてボクを見てる。くそ、こいつ確信犯だな。

何も言い返せなくて、ボクはキッチンへ戻る。アカリとクロの楽しそうな声が聞こえてきて、気分は最悪だ。

仕事へ行く時間になった。

「いってきます」

「いってらっしゃい」

上機嫌のアカリは、クロを抱いて見送ってくれた。わざと恨めしそうに見つめても、幸せに浸りきっているアカリには気付いてもらえなかった。

酒場でも、家が気になって仕事に身が入らない。ぼーっとして調理していると、ストップがかかった。

「ちょ、ちよっと！ それ、入れ過ぎ！」

チハヤに止められた。彼は趣味で料理をしているが、腕前はボクよりはるかに上だ。

はっとしてボールを見ると、サラダの上にマヨネーズが山盛りになっていた。

「あ……」

腑抜けていると、チハヤがボクを厨房の隅に追いやった。さっさとサラダを作り終えると、お客に持っていつてくれた。戻ってきたチハヤはトレーをカウンターに置くと、ボクの顔を覗き込んだ。

「タケル、どうしたの？ 今日、おかしいよ」

ボクはクロのことを懇切丁寧に話して聞かせた。しかし、チハヤの反応は期待したものじゃなかった。

「たかがネコじゃない？」

「ネコだから問題なんじゃないか！ ずっと抱っこしてもらって、撫ぜてもらって、アカリと一緒に寝るんだよ！」

「そ、そうか。それは大変だね」

チハヤは顔をひきつらせた。チハヤにとっては他人事だけど、ボクにとっては重大な問題なんだ。

「ところでさ、アカリとはどうなってるの？」

「どうなってるって、何にも変わってないよ」

「そんなに妬くぐらいなら、早く告白して恋人になったら？ そう

したらネコみたいにあかりにくつつけるじゃん」

そうか！ そうだね。一緒に寝たかったら、結婚しろってオセも言っていた。でも、アカリってボクのことを、手にかかる子ってぐらいにしか思っていないよ。

「どうしたら恋人になれる？」

「アカリに、頼もしいって思わせないとね」

「頼もしい……」

その一言、ボクにはものすごくハードルが高い気がする。アニスには可愛らしいって言われちゃったし。

家に帰ると、アカリはクロを抱いてソファでうたた寝していた。ボクがちらりと見ると、クロも気がついたようで片目を開けた。

「にゃに？」

こいつ、かなり幼いな。

「おまえ、どこから来たの？」

「わからにゃい」

「ママは？」

「いにゃくなっちゃったの」

そう答えると、親が恋しくなったのか、ニャアニャ泣き出した。うわっ、アカリが起きちゃうよ。ボクはクロを抱きあげてポンポンしてやった。幸いアカリはまだ寝ている。

「探してやるからさ。元気出すんだぞ」

「うん。兄ちゃん、おなか空いた」

現金なやつ。ボクはクロを片手で抱えて、キッチンに立った。冷蔵庫を開けて、ミルクを取り出し小鍋に注いで温めた。まだクロは赤ちゃんみたいだから、人肌にしてあげなくちゃ。鍋のふちがふつふつしてきたので、火からおろして腕の内側にスプーンで一滴垂らしてみる。うん、熱くもなくちょうど良さそう。哺乳瓶に入れて乳首をかぶせる。おなかの空いているクロがミャアミャアとうるさい。あやしなからソファに戻ってクロを膝の上で抱っこした。早速クロ

の口に哺乳瓶を近づける。すると、クロは手で一生懸命哺乳瓶を押さえてちゅっちゅと吸い始めた。あんなに憎らしかったのに、なんだか可愛らしく見えてくる。何？ 赤ちゃんって可愛い……。

クロがちゅっちゅと吸っている音に反応したのか、アカリが目を覚ました。

「タケルくん？」

「アカリ、ごめん。起こしちゃったね」

「いいのよ。クロにミルクあげてくれたんだ」

「うん、お腹が空いたらしくて泣いてたから」

アカリはそれ以上しゃべらず、ボクをじっと見ている。

「何？」

「可愛いでしょ？」

「うん、予想外に」

クロはお腹が膨れたようで眠ってしまった。哺乳瓶から口が離れていき、無意識にちゅぱちゅぱしている。その姿が可愛くて、思わず頭を撫でてしまった。

「ボクも本物の赤ちゃんが欲しいな」

「とっぴもないこと言うのね」

「とっぴじゃないよ。ねえ、アカリ、ボクの子を産んでよ」

「あなたって子は……」

アカリは呆れた顔を見ると、クロを僕から取り上げ、寝室に入っていた。

ちえっ、ボク、本気なんだけど。

翌日、アカリとクロの取り合いになった。ボクがミルクあげたいんだもん。でも、二人でクロを挟んでわいわいやっているのがすごく楽しかった。

昨日みたいに、アカリとクロに見送られながら仕事へ出かけた。

うん、パパになった気分だね。

行く途中で、あの港でおしゃべりした母ネコに会った。ずいぶん慌

てた様子で走っている。なんか無性に気になって声をかけてみた。

「ねえ、どうしてそんなに慌てているの？」

「子供がいなくなっちゃったの」

母ネコは泣きそうな顔をした。子ども？ 黒ネコ…… クロ！

「黒いネコだったよね？ うちにいるけど、君の子かな？」

「見せて！」

ボクは母ネコを抱えて、急いで家に戻った。

クロはアカリとソファで遊んでいた。ボクと母ネコは窓からその様子を伺った。

「あのネコ？」

「坊やだわ！」

「アカリは、一人で泣いてたから拾ってきたって言ってたんだけど。とにかく、ここで待ってて」

ボクは母ネコを外に待たせて家に入った。ボクが入ってきたのに驚いたアカリが目を丸くした。

「あら、タケルくん。仕事に行ったんじゃないかった？」

「うん、あのさ、クロと同じ黒ネコが外にいるんだ」

「ほんと？」

アカリはクロを抱えたまま窓辺へ移動した。クロは母ネコを認めた途端、アカリの腕から飛び降りて、窓ガラスをガリガリと引っかいた。アカリはそれをじっと見ていたが、さみしそうな表情を浮かべると、クロを抱いて玄関に向かう。クロに頬ずりをしながら戸の前で立ち止まった。

「もうお母さんと離れちゃだめよ」

そう言うと、戸を開けてクロを地面に下ろした。クロは一声鳴くと母ネコの元へ走っていった。しばらくの間、クロは母ネコにまわりついていったが、アカリを見てもう一声鳴いた。そして母ネコと元来た道を歩いていった。

それを見ていたアカリがポツリとつぶやいた。

「またいなくなっちゃった」

「アカリ？」

「クロもチャトランも」

両手で目を覆って泣きじゃくるアカリ。様子がおかしい。こんなことで泣くなんて。アカリの肩に手を伸ばしたが、触れることがためらわれる。どんな言葉をかければいいかわからない。

「アカリ、泣かないで」

ボクは涙で濡れたアカリの手を取った。小さくて柔らかなアカリの手。この手を離しちゃいけない気がする。

「ボクはどこにも行かないよ。ずっとそばにいる」

「タケルくん……」

アカリはボクの名前をつぶやいた。顔をくしゃっとさせて笑った。無理やり笑顔を作っている。

「だめよ。そういう言葉はいつか現れる大事な人のためにとっておかないと」

「ボクの大事はアカリだよ！」

でも、アカリは首を横に振るばかりで何も答えてくれなかった。

はじまりはいつも雪

朝ごはんのできる時間になってもアカリは部屋から出てこなかった。いつもは食事の前に一仕事するのにだ。スープが冷めてしまう。ボクはアカリの部屋をノックした。返事がない。「入るよ」と声をかけて戸を開けた。ボクの目に飛び込んできたのは眠った形跡のないキレイなままのベッドだった。

「アカリ？」

ベッドに手を当ててみたが冷たかった。ベッドの下もクローゼットの中も見ただけ、いなかった。そのクローゼットの中の服がすべて無くなっていた。それがわかったとき、体からさーっと血の気が引くようだった。

窓辺においてある机の上に手紙が置いてあった。一通は町長宛でもう一通はボク宛だ。手紙を開くと、アカリのきれいな文字が並んでいた。

――タケルくん、私はここに長く居過ぎたようです。居心地が良くて、タケルくんの作るご飯がおいしくて、毎日一緒にいることが楽しくて、私は自分の境遇の事を忘れていました。私は帰らなければいけません。今までありがとう。

なんだ、これ。別れの手紙じゃないか。ひどいよ。どうして行っちゃうの？ ボクのこと、嫌いになっちゃったの？ ボクは捨てられたの？

手紙にはそれだけしか書かれておらず、行く先などについて触れられていなかった。探すにも探しようがない。手がかりはないかと、机の引き出しを捜す。あの太陽のマークの入った封筒が出てきた。これを手にしたときのアカリの様子は明らかに変だった。何か手が

かりがあるかもしれない。ボクは中身を取り出して読んだ。

——アカリ、虹がかかったのであろう。戻って来い。海神が待ちくたびれておる。

海神って神さま？ どうしてアカリに神さまから手紙がくるんだ？

どうすれば良いのか途方に暮れる。ふと、もう一通の手紙のことを思い出した。町長宛の手紙だ。とりあえず届けることにしよう。

役場はワッフル広場の奥に建っている。町長は役場の前をほうきで掃除をしているところだった。ボクの姿を認めると、掃除する手を止めていつものようににこやかに挨拶をしてくれた。

「おはようなのだよ」

「おはようございます」

「おや、顔色が悪いようだが……こんなに早くに何か用かね？」

「アカリからです」

ボクは町長宛の封書を差し出した。町長は怪訝そうな表情を浮かべながら受け取ると、手紙を取り出して読み始めた。すると、見るうちに町長の顔が険しくなった。

「アカリさんは？」

「今朝気づいたときにはもういませんでした」

町長は腕組みをして考え込んでいる。町長の手紙には何を書いてあったんだろう？

「あの、何て書かれていましたか？」

「一身上の都合で故郷に帰ることになった。牧場の処分を頼むと書いてある」

もう戻ってこないつもりなのか。

「あの、どこへ行くか書いてありませんか？」

「書いてないね」

「じゃあ、アカリがどこから来たか知っていますか？」

「彼女のここへ来る前の話は聞いたことがないのだよ」

ボクがアカリを探すことを伝えたと、町長はしばらく牧場をあのままにしておくと一言してくれた。

ボクは牧場に向かって歩きだした。まだモウ太郎たちにエサをあげていない。

動物小屋に入ると、モウ太郎たちが近寄ってきた。

「モウ太郎、おはよう。お腹が空いたの？」

「お腹はいっぱいだ。それよりアカリちゃんは？」

「アカリ、どこにもいないんだ。どうして？」

「アカリちゃん、おかしかったんだ。昨夜遅くに来て、『明日の朝のご飯だからね』ってエサをエサ箱に入れて、小屋の掃除をしていたんだ」

アカリ、あの時家を出て行く気になってたんだ。

「アカリ、家出しちゃったんだ」

「何だって！？ オレたちを置いてか？」

モウ太郎はうなだれた。動物たちのすすり泣く声が聞こえてきた。みんな捨てられたって思うよね。ボクだってそう。モウ太郎がボクの服の端を加えた。ボクはモウ太郎を見る。

「チャトラン、アカリちゃん、探してくれよ」

「うん。アカリは絶対連れて帰る」

モウ太郎と約束したものの、手がかりも無い。途方にくれて、ふと空を仰ぐと、虹が目飛び込んできた。そうだ、女神さまなら何か知っているかもしれない。急いでジェラート山に向かった。

女神の泉に女神さまの姿はなく、ひっそりと静まり返っていた。

「女神さま、お話があるんです！」

ボクは大きな声で叫んだ。辺りにこだましたボクの声は返事をも

らえずにいる。どうして女神さまは出てきてくれないんだ？

「女神さま、お願いです。アカリがいなくなっちゃったんです」

女神さまは答えてくれない。おかしい。ボクの声は聞こえているはずだ。

「女神さま、聞こえているんでしょう？ どうして出てきてくれないの？」

なぜだかわからない。どうして女神さまが邪魔をするんだ？ 猛烈な憤りと焦りがこみ上げてくる。

「教えてください。ボクはアカリを探さなくちゃいけないんだ。女神さまは知っているんでしょう？ どこに行ったのか教えてください！」

大樹がざわざわとこずえを揺らす。虹の上から光がさしてきた。その光の中から女神さまが姿を現す。そしてボクを哀しそうに見つめた。

「タケル、アカリはあなたに探して欲しくないそうです」

「そんなの嘘だ！」

女神さまは目を伏せてしまった。嘘じゃないの？

「どうしてアカリはボクの前から姿を消さなくちゃならないの？」

「それはわたくしの口からは言えません」

「ボクが人間だから？ チャトランじゃないから？」

女神さまは両手を胸の前で組んだ。

「いいえ。こんなことになるなんて。わたくしが浅はかでした」

「どういう意味？」

女神さまは首を横に振るだけだ。

「女神さま、教えてください。ボクは……アカリがいないと生きていけない」

ボクはその場で膝をついてしまった。そうだ、アカリのいない人間の世界はボクには何の意味もない。アカリの役に立ちたいんじゃない。ボクがアカリのそばにいたいんだ。

「あなたにとって、必ずしも良い結果をもたらさないかもしれませ

ん。それでも行きますか？」

女神さまの言葉の意味がわからなかった。でも、今アカリに会わなければいけない。

「はい、行きます」

「アカリはカスタネット大陸の神の座にいます。この虹を渡っていきなさい」

「ありがとう、女神さま」

「幸運を祈ります」

ボクは女神さまに礼をのべると、ジェラート山を下りた。その足で宿屋へ行き、しばらく休むことを伝えた。マイやチハヤは自分たちのことのように心配してくれた。役場へ出向いて、アカリを探しに行くことを伝え、その間の動物の世話を頼み、ワッフル島を後にした。

虹は神の座まで伸びていた。神の座はカスタネット大陸のガナツシュ鉱山の更に上にあり、頂の下には雲海が広がっていた。岩だらけのそこは風が吹きすさんでいる。しっかり立っていないと吹き飛ばされそうだ。奥に進むと台座が見えた。でも誰もいない。台座に上ってみた。

「アカリ！ どこ？」

あらんかぎりの大きな声で呼んでみた。でも返事はなくて、ボクの声がこだましているだけだった。途方にくれて座り込む。アカリ、本当にこんなところにいるの？ いるならどうして出てきてくれないの？ なんだかすぐくやるせなくて、膝を抱え込んで顔をうずめた。

どれくらいここにいるのだろう。寒さが身にしみてくる。顔を上げると、神の座に雪が降ってきた。もう風は吹いていない。はらはらと舞い降りてくる真っ白い雪。アカリと初めて会ったときもこん

な雪が降っていた。雪はあのと看みたいにボクの体に降り積もっている。手のひらを上に向けると、雪が落ちてきた。それはボクの体温ですつと解ける。このままここにいたら死んじゃうな。それも良いかもしれない。だってアカリがいなんだもん。ボクは一人ぼっちなんだ。ボクは神の座で横になった。ネコみたいに丸くなってぎゅっと目をつむった。

お家に帰ろう

ボクは目を開けた。体は横になっている。あのまま眠っちゃったんだ。目だけをキョロキョロと動かして辺りを探る。視界に飛び込んできたのはこの世のものとは思えない場所だった。見たこともないお花畑が広がっている。暑くもなく寒くもない。周りには誰もいない。ボク、死んじゃった？　ここは天国？

すると、上から声が降ってきた。すごく太く、厳かな声だった。

「きさま、どうしてここにいるのだ」

ボクは起き上がって声の主を見上げた。オレンジ色に輝く長い髪をなびかせて、白い布を体に巻きつけたとても綺麗な男の人だった。

「アカリ——女の子を捜しに来たんです。目が覚めたらここに」

「アカリを？」

男の人はボクをじろじろと見た。

「なぜ探しに来たのだ？」

「連れて帰るためです」

「どうして連れて帰るのだ？」

「ずっと一緒にいたいから」

想いを込めてそう伝えようと、男の人が目を剥いてボクを見た。

「きさまが、アカリの言っていた居候か。帰るがいい。アカリは神の妻となる身なのだ」

全身を雷で打たれたようなショックを受けた。あの手紙は本当だったんだ。アカリが神さまと結婚する。アカリがボクに探すなど女神さまに言ったのはそのためだったんだ。やっぱり捨てられた？

アカリにとってボクはどうでもいいペットだったのか。ボクは目の前の男の人を見ていられなくて下を向いた。

そのとき、草を踏みしめる音が近づいてきた。その音はボクの前でぴたっと止まった。

「タケルくん！？」

顔を上げると、目の前に立っていたのは色とりどりの花を抱えたアカリだった。いつもの服じゃない。さっきの男の人みたいに白い布を体に巻きつけている。ひどく驚いた様子だった。アカリは花束を地面に置くとボクの肩をつかんだ。

「こんなところに来るなんて、意味がわかってるの!？」

「そんなこと知らない。アカリ、迎えに来たよ」

アカリは黙って顔を背けた。ボクは肩に置かれたアカリの手をつかんだ。

「ねえ、ボクのこと嫌い？ 顔も見たくない？」

「そんなことないわ」

アカリはボクの顔を見て違うと言ってくれた。ここからが肝心なんだ。アカリの手紙は仕方なく故郷に帰るって感じだった。アカリの本心を聞き出さなきゃいけない。

「アカリは神さまと結婚したいの？」

「……」

アカリはボクの質問に返事をしない。言いたくないのか、答えられないのか。

「アカリ、嬉しくなさそう」

「そ、そんなこと」

「一緒に帰ろう。みんな心配してるよ」

アカリは何も言ってくれない。悲しそうな目でボクを見ているだけだ。どうして何も言ってくれないの？ つかんだアカリの手に力を込める。すると、ボクの手は男の人によって剥がされた。

「さっきも言ったであろう」

男の人がまたボクの邪魔をしてくる。相手が誰であろうとボクには関係ない。

「それはアカリの意味じゃないんでしょう？」

「アカリの意味など関係ない」

「そんなのおかしいよ！ アカリはちっとも幸せそうじゃない。あなたは何のためにアカリに強要するの？」

「……きさまには関係のないこと。早く立ち去れ！」

「嫌だ！ ボクは認めない！」

男の人は腕を組み、ボクを睨みつけている。ボクも負けまいと睨み返した。空気はピンと張り詰めて、ちよつと目をそらしたら負けちやいそうな気がした。

神さまが横に目線をそらした。そのとき不意に腕が痛くなる。見ると、アカリが泣きそうな顔をして引っ張っていた。

「タケルくん、もういいの。ありがとう。ごめんね、黙って出てきちゃって。ちゃんとお別れすればよかったのよね」

ちゃんとお別れしたって納得するわけがない。知っていたらアカリを離すわけがない。

「ボク、アカリのそばにいるって言ったでしょ！ アカリは放っておくとすぐ倒れちゃうんだから」

そうだよ。アカリはすぐ無茶をするんだ。一人にしておいたら倒れちゃう。

「タケルくん……」

ボクたちのやり取りを黙って見ていた男の人は、顎をさすりながらアカリを見て、次にボクを見た。

「そこまで意思が固いのならチャンスをやろう。スープを持って来い。我をうならせることが出来ればアカリを自由にする」

「ほんとう？」

男の人は「二言はない」と言った。でも、今度はアカリが男の人に食って掛かった。

「そんなの無理に決まってる。ひどい！」

アカリの言葉がどんな意味を持つのか、このときはわからなかった。男の人はアカリを無視した。

「一週間後、持って来い」

そう言うのと、その場を後にした。

残されたボクとアカリは黙って見つめあった。

「どうしてここがわかったの？」

「女神さまが教えてくれたんだ。ねえ、アカリは神さまを愛しているの？」

「決められたことだから」

アカリはボクに話しながら、実は自分自身に言い聞かせているようだった。アカリが望んでいるならまだしも、決められたことだから結婚するなんて。ボクは思わずアカリの肩をつかんだ。

「そんなのおかしいよ。絶対ボクは諦めないからね」

アカリは哀しそうにボクを見つめるだけだった。

きっとアカリは無理やり結婚させられようとしているんだ。絶対にあの人をうならせるスープを作ってみせる。そしてアカリを連れて帰る。ボクはすぐワツフル島に帰って、スープの試作を開始することにした。

「ああ、もう！　どんなスープを作ればいいんだろう」

ボクは髪をくしゃくしゃと搔いて宙を仰いだ。あそこって明らかに天国だよな？　ああいう人たちって何を食べているんだろう。アカリに聞いておけばよかった。いや、待てよ。神さまならワツフル島にもいるじゃないか。ボクはメモとペンを持ってジェラート山に向かった。

ジェラート山の女神の泉へ着くと、女神さまが待っていてくれた。一部始終を見ていたらしい。

「大変でしたね」

「はい。でもチャンスをもらえたから」

「珍しいですわね。あの偏屈な人が」

女神さまはぼそぼそつぶやいている。女神さま、時間がないんだってば。ボクはイライラして女神さまに質問した。

「あの、天国にいる人って何が好きなの？」

「輝くレベルのものです。一番重要なことは、神々は食事しないということです」

「そうなんだ。じゃあボクはどうすればいいんだろう？」

「並よりは高級の方がいいのですが、とどのつまりスープに込められたあなたの願いの強さを押し量りたいのでしょうか」

ボクの願いの強さ？ アカリを思う気持ちってことだろうか。

「何かヒントになりましたか？」

「はい。ありがとうございます」

ボクは女神さまにお礼を言って、ジェラート山を下りた。

並より高級で思いのこもったスープか。先生に相談してみようかな。ボクはその足で宿屋へ向かった。

ユバは厨房で大鍋をかき回しているところだった。声をかけると、手を止めて厨房から出てきた。

「おや、一人かい？」

「はい。先生、お聞きしたいことがあるんですけど」

ユバはボクに席を勧めて、向かい側に座った。

「何を聞きたいんだい？」

「高級なスープを作りたいんです」

「フカヒレスープは？」

「あれって下ごしらえに時間がかかるでしょう？ あと五日で仕上げたいんです」

「五日かい？ じゃあ、コンソメスープにするんだね」

「作り方を教えて下さい」

ボクはユバから作り方を教えてもらった。

早速家に帰り材料を集めた。牧場で採れた輝く野菜たち。ニンジン、タマネギ、セロリを丁寧洗い、サイコロ状にカットする。それらを大陸から取り寄せたブイヨンでコトコト煮込む。スープの入った大鍋をずっと見張る。野菜たちは、浮いては沈みを繰り返す。

ボクとアカリの生活を見ているようだ。毎日毎日笑ったり怒ったり泣いたりのにぎやかな日々。アカリ、今頃何をしているのかな。ちゃんとご飯は食べているかな。あそこにいたアカリは別人みたいだった。あんなのアカリじゃない。瞳の奥の輝きが消えていた。まるで果てのない暗闇を歩いているような絶望した瞳。アカリは元気で明るくなくちゃ。でもあの人の口に合わなかったらどうしよう。いや、悪いことは考えない。ボクはアカリのそばにずっといるんだ。アカリのためにずっとご飯を作るんだ。人間になると決めたときに誓ったじゃないか。

大鍋を見る。野菜がとろとろに煮崩れている。灰汁を取るために卵白を入れて丁寧に漉す。浮いた脂分を丁寧に、丁寧にすくい取る。透き通った琥珀色のコンソメスープが出来上がった。

出来上がったスープを前にボクは考えた。ボクのしようとしていることは正しいんだろうか。だって、ボクはアカリのそばにいたいから、こうやってスープを作って勝負しようとしている。アカリに頼まれたわけじゃない。アカリのためじゃなく、ボクのためにやっているとしたら。それは愛じゃなく、ボクのエゴなんじゃないか？

約束の日、ボクはコンソメスープをポットに入れた。そして虹をかけてくれる女神さまの元へ行く。

女神さまがボクの顔を見て首をかしげた。

「どうかしましたか？」

「女神さま、ボクのしようとしていることは正しいの？ おせっかいなの？」

女神さまはボクをじっと見ていた。そして泉を指差した。水面がゆらゆらと小波をたてた後、アカリの姿が映しだされた。白い布を体に巻きつけている。そしてベッドらしきものに寄りかかり、涙を流している。

「アカリは海神の元に嫁ぎたくはないのです。親が勝手に決めたこ

と。しかし、アカリの親の力は絶対に逆らうことが出来なかったのです」

「女神さまの力でも？」

「わたくしの力など及びません。わたくしはアカリの力になってあげることが出来ませんでした。あの子に助けてもらったというのに」女神さまは胸の前で手を組むと、うつむいてしまった。なんだか気の毒になってくる。ボクが「女神さま」と声をかけると、女神さまは「ごめんなさいね」とにっこりと微笑んだ。

「タケルがアカリのところへ行くに行ったとき、わたくしは心の底から喜びました。迷うことはありません」

「ありがとうございます。ボク、行って来ます！」

ボクはポットを抱えて虹を渡った。

神の座に降り立つ。今日雪は降っていないくて、風もなかった。台座を見ると、あの男の人が、オレンジ色の髪をなびかせて立っていた。

「逃げずに来たな」

「アカリは？」

「ここにはいない。さあ、食べさせてみよ」

「ちょっと待ってくれ。神」

突然違う男の声が頭の上からした。見上げると、なんと空にクジラが浮かんでいるではないか。そして声はクジラの方から聞こえてくる。黒い影がポツと現れたかと思うと、だんだん大きくなってきた。そしてその影は神と呼ばれた男の人の横に降り立った。

「俺の嫁に手を出すふとどき者の顔を見に来た」

この人がアカリの婚約者の海神なんだ。浅黒い肌に長くウェーブのかかった黒髪をなびかせている。その目はギラリと鋭い。

「海神、理由は説明したはずだ」

「しかし、その結果如何によって、俺はアカリを奪われるかもしれないんだろう？」

「うむ、まあそうだな」

「俺も参加させてもらう。おまえ、早くしろ」

とても横柄な神さまだ。ボクは台座にクロスを敷いて、皿とスプーンを並べた。保温ポットからスープを皿に注ぎ、後ろに下がった。神さまと海神は台座にあぐらをかくと、スープをスプーンですくった。一口飲んだ神さまは顔色一つ変えない。海神にいたっては眉間にしわを寄せている。口に合わないのかな。ボクがじっと様子を伺っている、神さまが口を開いた。

「よく作ったな」

「じゃあ！」

「アカリを連れて行くがいい」

「ちよっと待て！」

海神が待ったをかけた。神さまは怪訝そうな顔をした。

「なんだ、文句はないと思うが？」

「神は黙ってくれ。おい、俺からアカリを奪うならそれ相応の覚悟があるんだろうな？」

海神にじつとにらまれた。さすが海を統べる神さまのことはある。

その迫力に押されてしまう。ボクは「はい」と返事をした。

「おまえの命をもらう」

「ボクの命？」

考えてもみない展開だった。海神はアカリを解放する気なんてささらなかったんだ。一瞬これまでのことが走馬灯のように頭を駆け巡る。初めてアカリに会った日のことから、人間になったときのこと、ボクのご飯を食べてアカリが笑ってくれたこと。死んじやつたらもうアカリのそばにいられない。でも、ボクが命を差し出さなければ、アカリが不幸になってしまう。アカリと離れ離れになるなら死んだほうがまだ。ボクの命でアカリが幸せになるほうがどれだけいいか。

「わかりました」

ボクはその場にひざまずいて、手を胸の前で組んだ。やっぱり、

ボクは死ぬ運命だったんだ。これまでいい夢を見させてくれた女神さまにお礼を言わなくちゃ。でも、もう会えないか……。

「ちょっと待って！」

聞きなれた声が聞こえる。振り返ると、アカリが立っているのが目に入った。アカリはボクの前まで来ると、ひざまずいてボクの肩をつかんだ。

「やめてよ！ 私のために命を差し出すことなんてない……タケルくんが死んじゃったら私も生きていけないよ」

ボクはアカリの頭を撫ぜた。アカリがネコのボクにいつもしてくれたように何度も何度も撫ぜた。

「いいんだ。ボク、短い間だったけど幸せだったよ。アカリはワッフル島に帰って。モウ太郎たちが待ってる」

「タケルくん！」

アカリの目からポロポロ涙がこぼれてくる。ボクのために泣いてくれるんだね。ありがとう。野良猫だったら誰もいないところで野垂れ死にするところだったのに、アカリに泣いてもらえたボクは幸せだ。

ボクは立ち上がり、海神の前でひざまずいた。そして彼の目を見た。

「さあ、早くしてください」

「おまえ……」

海神はそう言ったきり動かない。ボクはだんだん迫ってくる死に、恐くなって目をぎゅっとつむった。死ぬときは苦しいのかな。死んだら天国にいけるかな。でも、魚を盗んで食べたから地獄に落ちちゃうのかな。生まれ変わったら、アカリに会いに行こう。いろいろなことを考えながらそのときが来るのを待った。

「海神、もうその辺でいいだろう」

神さまの太い声がした。目を開けると、海神は神さまと睨みあっ

ている。そして舌打ちすると、ボクを睨みつけた。

「幸せになんかせせない。……覚えておけ」

海神は捨て台詞を残すと、空に浮かんでいるクジラに飛び乗った。クジラは雲の波間に消えていった。

ボクは体中の力が抜けて、その場に座り込んでしまう。ボク、命拾いしたみたい。アカリが駆け寄ってきてボクを抱きしめてくれた。

「ばか！ 無茶ばかりするんだから」

アカリは泣きながら笑ってる。よかった、海神は諦めてくれたんだ。

そんなボクらを神さまが腕組みをして見下ろしている。

「約束どおり、アカリは自由の身だ」

「ありがとうございます」

「アカリ、荷物をまとめて来い。我はこの者と話がある」

「はい。タケルくん、後でね」

アカリの姿が見えなくなると、神さまは台座の上であぐらをかいた。

「ここへ来い」

神さまが指差したのは、神さまのすぐ前の場所だ。ボクがそこまでいくと、今度は座れといった。ボクは神さまのまん前で正座した。

「命と引き換えに娘の幸せを願ってくれてありがとう。礼を言う」

「娘！？」

「そうだ。アカリは我が娘だ」

アカリって神さまの子だったんだ。神さまは顎に手をやりながら、ボクをチラチラと見る。

「それで、その、おまえはアカリのことをどう思っているのだ？」

「どうって、アカリと結婚したいと思っています」

「そ、そうか。ふつつかな娘だがよろしく頼む」

「え、いえ、こちらこそよろしく願います」

神さまはこっくりとうなずくと、ボクの頭に手を乗せた。何をす

るんだらうとビクビクとしていると、ほのかに頭が熱くなる。それがだんだん下へ降りていく。ついには、つま先まで熱くなってきた。

「こ、これなんですか!？」

「もうすぐ終わる。黙っている」

口は出せるけど体は動かなかった。命拾いしたのに、なんか不安だ。さっきの神さまの様子だったら大丈夫だよ、と自分に言い聞かせる。

しばらくすると神さまは手をどけた。

「ネコに娘をやるわけにはいかぬからな」

「知ってたんですか!？」

「我を誰だと思っているのだ。全知全能の神なのだぞ。もう夜中にネコに戻ることはない」

神さまは鼻をふんと鳴らした。

神さまはここで待つように言うと、神の座の奥へ姿を消した。しばらくしてアカリがいつもの格好で、大きなバッグを抱えて戻ってきた。ボクはアカリのバッグを受け取って、手を差し伸べた。アカリは笑みを浮かべてボクの手を取ってくれた。七色に輝く虹がボクらの足元まで伸びてきた。虹の向こうでは、女神さまやコロボックルやワッフル島みんなが待っている。アカリ、帰ろう。ボクらの家があるあの島へ。

極上のスープを君に

ワッフル島に戻ったボクらは以前と変わらぬ生活を取り戻した。アカリが帰ってきたことを、島の人たちもみんな喜んでくれた。でも、ボクらの関係は相変わらずで、姉弟みたいだった。ボクは毎日のように、「一緒に寝てくれる？」と訊ね、アカリは「ばか！」と一蹴する。

夜の酒場に、珍しい客が現れた。漁協職員のタオである。アカリとあれからどうなっているか、ボクは知らない。ただ、恒例のカラメル澆での釣りは続いているようである。タオは店の隅の席に座った。チハヤがオーダーを取って戻ってきた。

「ウナギ丼一つね」

チハヤはそう言うのと、ハーパーのところへ向かい、あれこれ話している。ハーパーはシェーカーにアルコールと氷を入れると、リズミカルに振りだした。タオがカクテル？　と思いながら、ボクは自分の仕事に取り掛かる。ウナギに串を打ち、焼きにかかる。ウナギに向かってパタパタと団扇を仰ぐ。匂いは香ばしくて良いんだけど、煙がもうもうと上がって煙いったらありゃしない。コホコホしながら作業をしていると、チハヤが戻ってきた。

「それ出来たら、タケルが持っていって」

「えっ、どうして？」

「タオのご指名だよ。なんかやらかしたの？」

「別に何も……」

何もした覚えはないんだけど。

出来上がったウナギ丼を持ってタオの元へ向かう。ほんのりと顔を赤くしているタオに「おまちどうさま」と声をかけて、ウナギ丼をタオの前に供する。タオは「ありがとうございます」と礼を述べ

ると、辺りをきよろきよろ見回した。

「他にお客さんも居ないようですから、少し私に付き合ってくださいませんか？」

ボクは了承してタオの向かいの席に座った。

タオは合掌すると、箸を口にくわえ、割る。パキッと良い音を立てて箸が二つに分かれると、ホカホカと湯気が立つウナギ丼に箸を入れた。ご飯とウナギを箸ですくい、口に放り込む。もぐもぐと咀嚼し、ゆっくりと飲みこんだ。そして表情を緩めた。

「おいしいです。さすがですね」

「そんなことはないよ」

ボクが謙遜すると、タオは箸を持ったまま丼を見つめた。そして視線をボクに移した。

「アカリさんに食べさせるために頑張ったんでしょ？」

「なんで知ってるの？」

タオは何か思っていたようにクスクスと笑った。

「初めて会ったころのタケルくんは、箸を持つ手もおぼつかなかったですからね。それが今ではシェフにまでなりました。一方、アカリさんはいまだにからつきし料理が苦手です」

「そうだね」

何でもお見通しなんだな。ボクが感心していると、タオは追い討ちをかけるように告げた。

「アカリさんのことが好きなんですよ？」

タオがまっすぐにボクを見てる。ごまかす必要も無いだろう。

「うん。大好き」

「そうですか」

タオはそう答えると、再び食事を始めた。ボクは黙ってそれを見守る。いったいタオは何しに来たんだろう。そういうことを考えているうちに、食事を終えたタオは「ごちそうさま」と言って合掌した。そして「おやすみなさい」と、席を立て帰ろうとした。

「タオ？」

ボクが問いかけるように呼びかけても、笑みを浮かべるだけで何も言わずに帰っていった。

なんか腑に落ちないまま、テーブルを片付けて厨房へ戻ってくる
と、チハヤにつかまった。

「何話してたの？」

「料理褒められた」

「それだけ？」

疑るようなチハヤの目。チハヤにはどうしてか嘘つけないんだよね。

「アカリが好きなんでしょって聞かれた」

「なるほどね」

チハヤが腕を組んで、したり顔をする。何、何がわかったの？
でもチハヤは教えてくれなくて、さらに質問を投げかけてきた。

「それでタケルはアカリに言ったの？」

「何を？」

「だから、好きってさ」

「言っていない」

「まだ言っていないの!？」

チハヤはやれやれと言わんばかりに手を広げて首を横に振る。だって、もし口にして拒否されたらそばにいられなくなる。そう思うと、怖くて言えない。

「そんなじゃ、一緒になんて寝れないね」

「そうだね……チハヤはどうなの？」

マイとチハヤは付き合っているが、まだ結婚はしていない。チハヤは得意げに話し始めた。

「プロポーズした」

「うそ!？」

「嘘なもんか。来月結婚する」

すごい。プロポーズしちゃったんだ。ボクは羨望のまなざしでチ

ハヤを見つめた。

「ねえ、なんてプロポーズしたの？」

「それは内緒」

そんな！　どうやってするのか知りたいじゃん。もったいぶるチハヤに食い下がる。

「ねえ、お願い。教えて！」

するとチハヤは、「他言は無用だよ」と言いながら詳細を教えてください。

マイの誕生日に、マイの大好きなケーキと花束をプレゼントして「結婚してやってもいいけど」って言ったんだって。けっこう上から目線なんだな。

「ふうん。プレゼントしてプロポーズするんだね」

「まあ、けっこう勇気が要るけどさ。そのときは無我夢中だし、マイがOKしてくれたときは死んでもいいと思ったね」

へえ、意外かも。クールなチハヤがそこまで思っちゃうんだ。

「まあ。タケルにはまだ結婚は早いと思うけどさ」

「どうして!？」

「だって、まだアカリに抱っこしてもらおうとか思ってるんでしょ？」

「そうだけど」

「じゃあ、ダメだね。絶対に早い」

抱っこしてもらいたいって思っていちゃダメなの？

「チハヤはマイに抱っこしてもらいたくないの？」

「僕は抱っこしてもらより、抱っこしてあげたいね」

青天の霹靂だった。結婚できる男は抱っこしてあげたいって考えるんだね。よし！　ボクもアカリを抱っこしてあげたいって思えるように頑張ろう。でも、何を頑張ればいいんだろう？

店の入り口のドアベルがチリリンと鳴って客が入ってきた。チハヤはトレーを持って接客に向かった。

何やかやしている間に、チハヤとマイの結婚式の日になる。ボクとアカリは式に参列した。チハヤとマイは微笑みながら、お互いに見つめ合っている。とても幸せそうだった。式が終わり、教会の外に出てきた二人に皆でライスシャワーを浴びせかける。マイがブーケを投げた。ブーケは宙高く舞ってアカリの手の中にすっぽりとおさまった。「次はアカリの番ね」と参列者は口々に誉めそやす。とっても照れくさそうなアカリを見ていると、まんざらでもないのかなと思ったりした。「結婚は出来ない」と言っていたのは、海神との約束があつたからだろう。海神が諦めたのだし、神さまが「よろしく頼む」と言ってくれたのだから、アカリにプロポーズしてもいいんだよね、きっと。

神の座から帰って数ヶ月もたったころ、いつものようにアカリに訊ねた。

「ねえ、アカリ。一緒に寝てくれる？」

「まだそんなことを言ってるの？」

「だって」

ボクはアカリをじつと見つめた。もうネコに戻ることはないんだし、人間としてしか抱っこしてもらえないんだもん。

いつものように一蹴されると思いきや、アカリはボクにチャンスをくれたのだ。

「じゃあ、私にもスープを作って。おいしかったら考えてもいいわ」

「ほんと!？」

「女に二言はありません」

親子そろって同じことを言うんだから。

休日、出来上がったスープをテーブルについているアカリの前にそっと置く。目の前のアカリがスープをスプーンですくう。黄金色の愛がアカリの口に運ばれていく。ものすごく思いを込めて作ったんだ。ボクのアカリへの愛情たっぷりのスープ。神さまに献上した

ものなんか目じゃないぐらい。だってアカリとボクの幸せがかかっているんだから。

「どう？」

アカリはものすごく真顔だった。何の感情も読み取れない。スプーンを持ったまま固まっている。こんなところまで親子そっくりだ。そんなアカリがやっと口を開いた。

「タケルくん」

「何？」

「スープはおいしい」

「ほんと!？」

でもアカリはボクを申しわけなさそうに見上げた。

「でも、寝るのはちょっと」

拒否された。おいしいけどダメってことは……。

「あのね、一緒に寝るのは結婚相手じゃないと——」

「そうだね。ごめん」

もう何にも聞こえなかった。人間になった意味も、ここにいる理由もなくなった。絶望の波が押し寄せてくる。何度も何度もボクを押し流そうとする。とうとうふられちゃったんだ。次なんて無い。これからどうしよう。もう完全な人間になっちゃったし。身の振り方を女神さまに相談に行かなくっちゃ。涙が溢れ出しそうだった。ボクは皿を下げようとした。すると、アカリがボクの手を押さえた。

「タケルくん、どうしたの？」

ボクは深々と頭を下げた。アカリが気を遣うから泣き顔は見せられない。

「今までお世話になりました。ボク、出ていくよ」

「何言ってるの!？」

「だって、寝てくれないんでしょ」

「もう! 私が言いたいのは、順序が違うってことよ」

「えっ、どういう意味？」

「だから――」

ボクはアカリをまじまじと見た。赤い顔して恥ずかしそうにボクを見つめている。アカリが何かを言った。かすかに聞こえた言葉がボクの中の時間を止めた。

「もう一回言って」

「いやよ」

アカリは慌てふためいて後ろを向いた。

「大好きって言った？」

「もう、タケルくんのほか！」

アカリは顔を両手で覆ってしまった。ボクは自分の頬をつねってみた。痛い。夢じゃない。アカリが大好きって言ってくれた！

ボクはアカリの正面に回りこんで、アカリの手をそっとつかんだ。ゆっくりと顔を覆っている手はずす。アカリは怒っていた。口をきゅつと尖らせてボクを睨みつけている。

「ボクも大好きだよ。これから先もずっと一緒に居たいんだ」

アカリがボクの名前をつぶやいた。怒った顔が緩んでいく。

「だから……ボクと結婚してください」

「はい」

――やった！

ボクはアカリの脇に手を差し込んで、アカリを抱き上げた。小さくて華奢なアカリの体はメリーゴーランドのように宙に舞った。

終わり

番外編 極上のスープを君に（アカリ視点）

「アカリ、一緒に寝てくれる？」

いったい何を考えてこのセリフなの！？ どうしていきなりこのセリフなの！？

物事って順序があるじゃない。「好き」って告白して、恋人同士になって、愛を育んで、プロポーズする。それなのに、タケルくんはすべてすっ飛ばして、「一緒に寝てくれる？」って言うのだ。

新婚のマイとチハヤの家に遊びに行ったときのことだ。三人でお茶を飲んでいると、当然私のことに話題が触れる。

「ねえ、タケルとはどうなの？」

マイが目をランランと輝かせて質問してくる。すると、チハヤまで身を乗り出してきた。

「僕も興味ある」

二人に見つめられてドギマギしてしまう。そんなに報告することもない。

私が神の座に帰る直前、タケルくんは言ってくれた。

「ずっとそばにいる」「ボクの大事はアカリだよ」

でも、帰ってきてからは全然だ。確かにそばにいてくれる。でもその言葉の持つ意味がわからない。私のことを異性として見てくれているのか、家族として見ているのか。

返事に困ってしまい、ティーカップの縁をくるくるとなぞる。

「……別に、ただの同居人だし」

「まだそんなこと言ってるの？」

マイが目を真ん丸くして、あきれたようにつぶやいた。

「タケルって結構モテるって知ってる？」

「そうなの？」

「ここにきたときより男らしくなったし、イケメンだし、優しいし。タケルはアカリ一筋だけど、のんびりしていると誰かにさらわれちゃうよ」

「さらわれる？」

「ルーミ。あの子、積極的なんだよ。しょっちゅう宿屋で食事してタケルをテーブルに呼んでいるんだから」

へえ、ルーミがねえ……。初めてタケルくんを仕立屋に連れて行ったときは、「可愛い！ ワンピース着せていい？」と聞いてきたことは覚えている。

すると、今度はチハヤが質問してきた。

「ところでさ、タケルってまだ『一緒に寝て』って言うてくるのかい？」

「ええ」

タケルくんだったら、チハヤにまで言っていたのか。

「僕さ、聴いたことあるんだけど」

チハヤは、そこまで言う私の目を覗き込んだ。もったいぶって何を言おうとしているんだろうか。

「あいつ、本当に一緒に寝るだけでいいみたいだね」

「どういう意味？」

「ただ、アカリの横で眠りたいだけ。あわよくば、抱っこしてもらって撫ぜ撫ぜしてもらいたいんだってさ」

「何、それ？ ネコみたいね」

マイが楽しそうに笑った。そんなマイの頭をこつんと叩いて、チハヤは続けた。

「以前、アカリが黒ネコを拾ったことがあっただろう？」

「ええ」

「あの時、真剣に嫉妬してたよ」

確かにあの時、彼は真剣に怒っていた。

「タケルに関して言えば、まったくよこしまな気持ちはないね。かえって、それが心配だけだ」

そうなんだ。下心はないのか。

タケルくんがチャトランだってことはパパから聞いた。それでもおまえはタケルのそばにいるのかと念を押されたからだ。それを聞いても私はワッフル島へ戻ることを決めた。どんな形になったとしても、タケルくんのそばにいたいと思ったからだ。

私がチャトランと出会ったのは雪がしんと降っている寒い日だった。酒場の軒下で体に雪をまとうてうずくまっていた小さな小さなネコ。私を見て弱弱しく鳴いていた。その姿がけなげで思わず連れて帰ってしまったのだ。それからチャトランとの生活が始まった。毎日、どこに行くにも連れて行った。夜は抱きかかえて一緒に眠った。

でも、チャトランが突然居なくなり、代わりにタケルくんが現れたのだ。何にもわからない赤ん坊のような彼にびっくりした。そのときは彼がチャトランだったなんて夢にも思わなかった。今になると思ひ当たることはある。フワちゃんの毛並みに顔を擦り付けたり、ピョッチたちの後を嬉しそうについて歩いたり、暇さえあると昼寝をしたり、ふわふわと飛んでいる蝶を追いかけてたりした。あの奇行もネコだったからだと思うと納得できる。

彼はいつでも一生懸命だった。私に食べさせるためにシェフにまでなつたのだ。そのことを知ったのはずいぶん後のことだったんだけど。タケルくんはいつでも私のそばに居てくれて尽くしてくれて可愛らしくて弟みたいな存在だった。

でも、ある日を境に変わった。タケルくんが家出をしたのだ。原因は私だったんだけど、居なくなるとき、確信した。彼が私の心の中に住み始めていたことを。

ユバさんから電話があり、夜の酒場に配達に来た。裏口から入り、

荷物を収める。タケルくんは頑張っているかなと厨房をのぞいたけど姿がない。変だなと思っていると、チハヤが私を見つけて近寄ってきた。

「タケルなら、あっちだよ」

チハヤの指差したのはホールだった。タケルくんがテーブル席に座っていて、その向かいにはルーミが座っている。

「今夜も指名だよ。もてるね、タケルって」

マイの言っていたことは本当だった。チハヤは「さあどうする？」と言わんばかりに私の顔を見ている。それを無視して二人の様子を観た。ルーミは頬を赤く染めてタケルくんを見ている。その目は恋する乙女って感じでキラキラしていた。タケルくんは後姿なので、どんな顔をしているかわからない。

タケルくんには来たことを内緒にしてもらい、私は家に帰る。牧場までの帰り道、一人で歩いているとなんか横が寂しい。神の座から虹を渡って帰るときのタケルくんの手のぬくもりを思い出してしまう。

ある日のこと、タケルくんがいつものようにいつものセリフを投げかけてきた。

「アカリ、一緒に寝てくれる？」

ルーミのことが脳裏によぎる。私はちょっと考えてみた。今の関係を進展させるにはちょうどいい機会かもしれない。変わり者のタケルくんがまともなことを言うのを待っていたら、いつまでたっても変わらない。そう思って、こんな提案を試してみた。

「じゃあ、私にもスープを作って。おいしかったら考えてもいいわ」
何を考えるのか、そのときは自分でもわからなかった。

休日の夕食のテーブルに上がったのは、私の大好きなカボチャのスープだった。皿によそわれた黄金色のスープにスプーンを入れる。とろっとしてふるふると震えた。タケルくんがそれは真剣なまなざ

しで私が食べるところを見つめている。彼にとってはテストみたいなものなのだろう。緊張しながら口に入れた。口の中で、カボチャの甘みとタマネギの甘みが広がる。ぜんぜん喧嘩してなくて、調和している。今まで飲んだどのスープよりもおいしかった。

しかし、はたと気づく。おいしいって言ったら、寝なくちゃならない。下心がないからって、一緒に寝られるわけがない。常識を重んじる私としては、順序はちゃんと守りたい。私は体を硬直させた。どうしよう、どういう返事をすればいいの？ 私から言わなきゃいけないの！？

狼狽しているせいか、素直な気持ちを吐露してしまった。

「スープはおいしい」

「ほんと！？」

タケルくんの顔がぱあっと明るくなる。でも次の言葉で奈落の底に突き落としてしまった。

「でも、寝るのはちよっと」

すると、タケルくんの表情が一気に暗くなった。しばらく呆然とした彼は、「ごめん」と言いながら、皿を片付けようとした。私がその後に言った言葉は耳に入っていないみたいである。

皿にかけたタケルくんの手にぽたりと雫が落ちた。泣いている！
？ 私はタケルくんの手に自分の手を重ねた。

「タケルくん、どうしたの？」

すると、タケルくんは顔を伏せたまま深々と頭を下げた。

「今までお世話になりました。ボク、出ていく」

私の言っていることをまったく聞いていない。私は慌てた。

「何言ってるの！？」

「だって、寝てくれないんでしょ」

タケルくんが涙で潤んだ瞳で私を見つめている。あの雪の日のことを思い出してしまった。胸がきゅんと縮こまる。可愛い過ぎる。抱きしめたい。いやいや、だめだ。彼はチャトランじゃない。タケルという人間なのだ。そういう扱いをしなくっちゃ。私は彼の手を

ぎゅっと握り締めた。

「私が言いたいのは、順序が違うってことよ」

「えっ、どういう意味？」

「だから――」

タケルくんは私の言葉を待っている。人間の常識が通用しない、ネコの発想だ。いつも大胆なことを言うくせに、肝心なところで気が利かないんだから。

「大好き」

私はありったけの勇気を使って告白した。突然押し付けられた男の子。でも、その彼はもう私の人生においてなくてはならないのだ。一方目の前の彼はぽかんと口を半開きにして目を丸くしている。そして、この期に及んでこんなことを言っただけだ。

「もう一回言って」

「いやよ！」

私は恥ずかしくて後ろを向いた。あんな言葉二度と言えるわけもない。

「大好きって言った？」

やっぱり聞こえていたんじゃない。顔から火が出そうで、思わず両手で覆ってしまう。すると、靴音が後ろから前へ移動してきた。顔を覆っていた手をつかまれて、ゆっくりと手は下げられる。私は口を尖らせてタケルくんを見上げた。彼の目も顔もリングのように真っ赤だった。

「ボクも好きだよ。初めて会ったときからずっと。だからこれから先もずっと一緒に居たいんだ」

タケルくんが「一緒に寝る」じゃなくて「大好き」って言うてくれた！

「だから……ボクと結婚してください」

私のことを異性として見てくれたのね。胸が高鳴って口がパクパクする。まるで池のコイみたい。私はゆっくりと深呼吸をして「はい」と答えた。その途端、体がふわっと浮き上がり、宙を舞っ

た。ぐるぐるぐるぐる、目が回ってくる。

「タ、タケルくん、ストップ！」

タケルくんはやっと私を下ろしてくれた。でも、頭がふらふらして立ってられない。腰がずとんと落ちた。タケルくんが慌ててかがんで心配そうに私を伺っている。私は頑張って立ち上がる。でも、足がもつれて倒れそうになった。

「アカリ！」

次の瞬間、私の体はタケルくんの腕の中だった。見つめあう私たち。時間が止まったみたいだった。すると、どういうわけかタケルくんの顔が近づいてきた。ま、まさかキス！？ 心臓がドキドキして爆発しそう。びっくりして固まっていると、タケルくんは私の鼻の頭をペロッと舐めた。すごく満足そうな彼。いいのかな、結婚できるとかな……。

番外編 極上のスープを君に（アカリ視点）（後書き）

これにて終了です。

この後のお話は「かぼちゃ文庫」にて連載中です。
気になる方はのぞいて見て下さい。

基本、一週間更新です。

上記のとおり、ブログにて更新しておりました。

読者数も伸びませんし、感想などいただけないので、面白くないんだなと……。

しかし、ブログまで足を運んでくださる方がおみえなので、こちらにてUPします。

今までご足労おかけし申し訳ありませんでした。

また週末に更新できればと思っています。

もちろんブログでも更新いたします。

ボクの秘密

いつもどおりの朝の食卓だ。テーブルに食事を並べていると、モウ太郎たちのえさやりを終えたアカリが帰ってきた。アカリがテーブルにつくのを見届けて、スープの皿を持って向かい側に座った。アカリは「お腹ペコペコ。いただきます！」と合掌すると、スープを飲み始めた。

もうすぐボクとアカリは結婚する。何も知らないボクは、アカリに何もかも教えてもらっている。婚約、式、指輪、新生活の準備とやることはいっぱいあった。今までどおり生活するだけだと思っていたのは大間違いだった。

でも、アカリは嫌な顔一つしないで、準備を進めてくれる。

「アカリ、ごめんね。何にも手伝えなくて」

ボクって全然頼もしくない。ボクが謝ると、アカリは手を止めてにつこり笑った。

「いいのよ。男の人はやることなんてほとんどないんだもの」

「そうなの？」

「ええ。お嫁さんは、式の衣装もあるし、式までに綺麗にならずにちゃいけないし」

「綺麗にならずにちゃいけないの？ アカリは今のままで十分綺麗だよ」

「ありがとう」

アカリは頭をかきながら笑った。そしてお腹に手を当てた。

「少し、ウエストを絞らないと、ドレスが綺麗に着られないのと思うのよね」

「絞るって、またダイエットするつもり！？」

「ええ」

まだ懲りていないらしい。結局アカリのお腹を見ていないからなん

ともいえないけれど。倒れちゃなんにもならない。当然ボクは猛反
対した。

「だめっ！ 絶対だめっ！ また倒れちゃうじゃないか。ヤダよ、
そんなの。ボクは今のアカリがいいの！」

「タケルくん」

アカリはすごく嬉しそう。そうだよ。抱っこされるなら柔らかいほ
うがいい。

「ボク、プニプニがいい！」

アカリの表情が固まった。目からは光が消えうせて、口は半開きで
ある。ひよっとしてまずいことを言っちゃったかな。

「そう、私、プニプニしてるのね」

「ごめん、落ち込まないで。ボク、細いのより、プニプニしてるほ
うが好きなんだもん」

「プニプニ……」

アカリは繰り返すと、がつくりとうなだれた。

朝食を終えた頃、注文していたダブルベッドが届いた。ボクは寝室
にすえられたダブルベッドを見つめた。これでアカリと一緒に寝る
んだ！ ボクはアカリの腕をつかんだ。

「ねえ、アカリ、寝てみて」

「えーっ!？」

「お願い！」

拝み倒すと、アカリは渋々横になってくれた。ボクはすかさずその
横に寝転がった。そして頭をアカリの腕にくっつけた。ああ、アカ
リと一緒に寝るのはどれくらいぶりだろう。

「幸せ！」

ボクがつぶやくと、アカリが頭をなせてくれた。

「よかったね」

「うん、ありがと！」

でも、なんか変なんだよね。しっくりこないというか、以前と違う

というか。

「ねえ、アカリ、抱っこして」

「だ、抱っこ!？」

「うん、お願い」

アカリは渋々ボクを抱えてくれた。おかしい、やっぱりおかしい。以前はしっぱまですっぱりアカリに抱えてもらったのに……。

「どうかした？」

「うん、何か違うんだよね」

「ネコのときと？」

「うん……」

あれ？ アカリ、「ネコのときと」って聞いたよね。ボクはびっくりしてガバツと起き上がった。

「アカリ、知ってたの!？」

「ええ。パパに聞いたわ」

聞いちゃったんだ。ボクはベッドの上で正座した。アカリ、ボクがネコだったってことをどう思ってるんだろう。それにだましていたみたいでバツが悪い。膝の上に置いた両手をぎゅっと握り締めた。

アカリが不思議そうな顔をして、ボクの手にとつと触れた。

「どうかした？」

「ごめんなさい」

「何が？」

アカリも起き上がった。

「ネコだって言わなかったから。ねえ、ボク、元ネコだけどそれでもいい？」

「いいから結婚するんでしょ？」

アカリ、許してくれるんだ。ボクはうれしくなってアカリに抱きついた。アカリは、わつと言ってベッドに倒れこむ。目の前にはアカリの顔。クンクンと嗅ぐ。アカリのいい匂いがする。アカリの顔を見ると真っ赤になっていた。可愛い。リングゴみたい。ボクは、アカリの鼻の頭をペロツと舐める。

「アカリ、ボク変な気分になってきた」

「えっ！？ わっ、だめ！」

ボクはアカリに突き飛ばされた。

アカリはベッドから降りると、「まだまだやることあるからね」といって下へ降りていった。残されたボクはなんともモヤモヤした気分のまま置いてきぼりだった。

急いでアカリの後を追いかける。アカリは放牧地にいた。モウ太郎たちを動物小屋から出している。ボクも鶏小屋に入って、ピヨツチたちを外に出すことにした。

「さあ、ピヨツチたち、お外に出るよ」

「コケッ！」

ピヨツチは嬉しそうに羽をばたつかせる。そうなのだ。完全な人間になったら、ピヨツチたちの言葉がわからなくなった。寂しかったけど、これは幸せの代償だ。ピヨツチたちの言葉がわからなくなつて、みんなボクたちの家族なんだ。

ピヨツチたちを外に出した後、アカリのそばに駆け寄った。

「何する？」

「草取りするわ」

「じゃあ、ボクも！」

アカリの隣にしゃがみこんで草をとる。ぶちっとちぎると、何かが飛んだ。あつ、バツタだ。飛んだ先にカマキリが見えた。カマキリが何かをじっと睨んでる。その視線の先にはチヨウチヨが花に止まって羽を休めていた。

「面白い？」

アカリがにつこり微笑んで訊ねてきた。ボクは見られていたのかとちょっと恥ずかしかった。

「うん。ボクもネコのときはそうだった。食べ物盗んだり、野犬に追いかけられたり」

「大変だったんだね」

ボクはこつくりとうなずいた。

「だからモウ太郎たちはボクが守ってあげなきゃって思う」

ボクの言葉を聞いたアカリはにっこり微笑むと草取りを再開した。

お昼ごはんの後、仕立屋に来了。アカリのドレスを選ぶんだ。小さいセラフばあさんと、長い髪のおとなしそうなコトミが相談に乗ってくれた。

「タケルはこのタキシードね。問題はアカリだね。どんなデザインが好みなんだい？」

「出来ればマーメイドラインがいいんですけど、このおなかじゃ無理ですよ」

アカリはお腹を指差しながらつぶやいた。

セラフばあさんは、突然アカリのお腹を両手で触り始めた。

「や、セラフさん、くすぐりたい！」

アカリは身をよじって笑ってる。そっか！ ああいう風になるとアカリは喜ぶんだな。今度やってみようっと。

「お腹なんて出てないじゃないか。ご希望通り、マーメイドラインのドレスを作ろうかね」

セラフばあさんはアカリの体に紐を当てている。何してるんだろう。ボクはコトミに聞いてみた。

「あれ、何やってるの？」

「採寸です。寸法を測って、ドレスの型紙を起こすんです」

「ふうん」

何のことかわからないけど、返事をしておいた。

その後、指輪を買いに彫金士のいる鍛冶屋へ行く。アカリはプラチナの指輪が良いんだって。ボクは何でもかまわない。

「指輪？」

「そうよ。結婚した二人が同じデザインのものを指にはめるの」

「それって、首輪と同じなの？」

「首輪と似てるかもね。結婚の証。私はタケルくんのものっていう証。反対に、タケルくんは私のものって証」

そうか！　今まで首輪しか知らなかったけど、人間も首輪の代わりにするんだ。

「それ、いつするの？」

「結婚式でお互いの指に指輪をはめるのよ」

へえ、そうなんだ。アカリは彫金士に自分の要望を伝えている。ボクが手持ち無沙汰で窓の外を見ていると、オセが帰ってきて、ボクに向かってしゅたつと右手を上げた。

「よう、どうした？」

ボクはアカリのほうへ視線を送ってから答えた。

「指輪を買いに来たんだ」

「そうか。おまえたち、本当に結婚するんだな」

オセは腕を組んでしげしげとボクを見つめた。

「オセも、ボクには結婚は早いって思ってるの？」

「えっ！？　そんなことはないぞ。誰かに言われたのか？」

「チハヤ」

「ああ、チハヤね。気にするな。あいつは毒舌だ」

オセはボクの肩をポンと叩いた。

「愛し合ってればいいだろ。アカリはしっかりしてるし、おまえはちゃんと働いているし」

「そうかな」

「そうだ。アカリのことを聞いていい子にしろよ」

「何だよ、それ！」

オセは「すまんすまん」と笑いながら答えた。そりゃ、ボクだってわかってるけどさ。落ち込むから言わないで欲しいよ。

その日の夜、ボクとアカリはソファで向かい合って議論していた。

「ねえ、今晚から一緒に寝ていい？」

ダブルベッドは二階のボクの寝室にある。

「だめ！ 式を挙げるまではだめなの」

「今朝、寝てくれたでしょ？」

「あれは試しに寝てみただけ。それに、タケルくん、変な気分になったって」

アカリがボクを睨んでる。そういえばそんなこと言ったっけ。ちえっ、つまんないの。

アカリ、ご機嫌斜めかな。そうだ！ セラフさんの技、やってみようっと。ボクはすくっと立ち上がると、アカリの横まで移動した。アカリが、「何？」と言わんばかりの顔してる。アカリ、喜ばせてあげるからね。ボクはアカリに飛び掛ってお腹をゴニョゴニョ触った。

「や、やめて！ くすぐりたい！」

「だめ！ アカリ、怒ってるもん」

アカリってば、口では嫌だって言っているけど、大笑いしてすごく楽しそう。ボクは張り切ってこそぐった。

五分後、アカリはソファでぐったりしていた。

「タケルくんのバカ……もう一緒に寝てあげない」

「えっ！？ 嘘でしょ？」

ボクは飛び起きてアカリを見た。アカリは目に涙をためて口を尖らせてる。

「アカリ、喜んでたじゃない」

「限度があるでしょ！ 笑い死ぬかと思った」

しょんぼり。怒られちゃった。ボクはがっくりと肩を落としてうつむいた。そのとき、アカリが下から顔を覗き込んできた。目がにんまりとして何かなと思ったら、アカリの手がお腹に伸びてきて、次の瞬間体にムズムズ感が走った。

「ぎゃっ！」

「お返しだあ！」

アカリがボクをこそぐってる。ボクはくすぐったくて、くすぐったくて、体をよじった。

「や、やめて！」

「だーめ！」

こそばゆくて死にそう。涙まで出てきた。

「ごめんなさい、もうしないから！」

いっぱい謝ると、アカリはやっとやめてくれた。笑いつかれたボクはソファにおお向けになった。ネコのときはおなかをゴニョゴニョされるのがとっても好きだったのにどうしてだろう。肩で息をするボクの横にアカリは座った。

「疲れた？」

「うん」

「一緒に寝るのは結婚式が終わったらね」

「うん」

「いい子ね」

アカリはボクの頭をポンポンと叩いた。

ない!?

「盗まれたっ!？」

アカリが大きな声を出した。

ボクたちは鍛冶屋に来ている。アカリが大声を上げたのは、どういうわけかボクたちの注文した指輪だけが盗まれたからだ。

「昨日は確かにあったんです」

店主のミオリが困った顔をして語った。

昨日、完成した指輪を金庫にしまって店を閉めた。今朝、店に来てみると金庫がこじ開けられ、中にしまっていたボクたちの指輪だけが消えていたという。

「どうしよう。結婚式は明々後日なのに」

アカリが泣きそうな顔をしている。

「他のじゃだめなの？」

「結婚指輪には、タケルくんがプロポーズのときにくれた青い羽も材料になっているの。だから代わりはないわ」

プロポーズには青い羽が必要だというこの島に伝わる話をボクは知らなかった。だってチハヤは青い羽のことを一言も言わなかったんだもん。伝説を後で知ったボクは、慌てて女神さまに青い羽をもらってきた。そしてアカリに再プロポーズしたのだった。

「じゃあ、指輪を探さなきゃ」

「どうやって? 相手は泥棒なのよ」

アカリが悲しそうにボクに訊ねた。ボクだってわからない。ネコだったら、クンクンと匂いをかいで犯人を追跡してやるのに。

ミオリと三人で頭をつき合わせていると、鍛冶屋のドアがバンッと開いた。三人でそちらを見ると、立っていたのは浅黒い肌のオツドアイの男だった。左手に分厚い本を抱えている。アカリがまた大きな声を出した。

「魔法使いさん！」

「アカリ……久しぶり」

オッドアイの男はうつすらと笑みを浮かべた。この男はアカリの知り合いなのか。

「ほんとに久しぶりね。元気だった？」

「おかげさまで。……そちらが？」

オッドアイの男はボクを見てアカリに訊ねた。アカリはボクの腕をとって答えた。

「私のだんなさまになる人。タケルくんっていうの。タケルくん、こちらは魔法使いさん。小さいときによく遊んでもらったの」

ボクは頭をぺこりと下げて挨拶をした。

「初めまして。タケルです」

「初めまして」

魔法使いは口数が少ないようだ。それにボクに対してなんら興味がわかないらしい。すぐさまアカリに向き直ると、こう言った。

「神さま……アカリ、助けるように……」

アカリは口をあんぐりあげたまま固まった。ボクもだ。だって、事件が起こったのはついさっきだ。そんなボクらの気持ちに気づいたのか、魔法使いはたどたどしく事情を説明してくれた。

朝のコーヒーを飲んでいたとき神さまが家にやってきて、「きさま、アカリを助けて来い」といって、つまみ出されたそうだ。気がついたら鍛冶屋のドアの前に落っこちていたらしい。

まあ、ボクらにとっては頼もしい助っ人なんだろう。アカリが申しわけなさそうに、魔法使いに訊ねた。

「奥さま、びっくりしちゃったわね」

「いい……慣れてるから。でも、時間、ない」

魔法使いはそう言うと、ミオリに話を聞きだした。

「指輪……金庫、入れた……いつ？」

「昨夜の三時です」

「そのとき……そこに、誰かいた？」

「私の助手です」

「……その助手、今どこ？」

「おつかいに行ってもらっています」

そのとき、ドアベルがチリリンと鳴って、一人の女性が入ってきた。長い髪をカラフルに染めて、耳にハートのイヤリングをして、指輪もいっぱいつけている。そして極めつけは妖艶な流し目でアカリを見ていることだ。なんなんだ、この女性。アカリに色目使うなんて、まさか……同性愛者？

「あら、アカリじゃない！」

「おはよう、ジュリ」

ボクは危険を感じてアカリの腕に自分の腕を絡ませた。アカリは渡さないぞ。アカリはボクを振り返り、「タケルくんは初めてだったわね」とにっこり笑った。そしてその女性にボクを紹介した。

「紹介するわね。この人が私のだんなさまになるタケルくん。タケルくん、こちらは彫金士のジュリよ」

「ジュリさん、初めまして。とってもお綺麗ですね」

「やだわ、この子、勘違いしてるわよ」

ジュリがそう言うのと、アカリはボクを睨みつけた。そして腕をきゅゅとつねった。ボクが「いたっ！」と声をあげると、アカリは口をつんと尖らせた。

「ジュリはこれでも男性よ」

「えーっ!？」

目を丸くしてジュリをみると、ジュリは腕組みをしてつんとそばを向いた。

「まったく失礼しちゃうわ。どこをどう見たらアタシが女に見えるって言うのよ」

どこをどう見たって女にしか見えないでしょ。まったく紛らわしい。アカリに怒られちゃったじゃないか。ん、でも待てよ。これってアカリがやきもちをやいてくれたんだよね。ちょっと嬉しいな。そんなボクは置いてきぼりで、ジュリとアカリは話し始めた。

「指輪は気に入った？」

「それがね……」

アカリが言いよどむと、ジュリはアカリに身を寄せて「どうしたのよ？」と訊ねた。

「指輪が盗まれちゃったの」

「指輪って、あんたたちの結婚指輪？」

「そうよ」

そこまで会話すると、魔法使いがぬっと割って入った。

「指輪……見なかった？」

「あんた誰よ？」

「私の知り合いなの。それで、ジュリは見た？」

まるで通訳するみたいにアカリが話しに加わった。魔法使いは軽く会釈をした。ジュリは腕組みをしたまま明後日の方向を見ながら答えた。

「アタシが指輪を見たのは師匠が金庫にしようところが最後ね」

「その日、変わったこと……なかった？」

魔法使いが訊ねると、ジュリがまぶたを伏せて考え始めた。長いまつげにアイシャドウ。どう見たって女だ。

「そうねえ。昨日、仕事が終わって店を出たとき、見知らぬ男を見かけたわ」

「見知らぬ男？」

今度はアカリが聞き返した。ジュリはアカリをまっすぐに見て答えた。

「ええ。この村の人間じゃなかったわ」

「どんな人相してた？」

「金髪で、スマートで、イケメンだったわね。それが、おかしなやつだったのよ」

「どこが？」

ジュリは右手でピースサインを作ると、右目に当てた。

「こうやってアタシにウィンクしてくるの。『乙女チック☆ビーム

！』って」

「乙女チック☆ビーム？」

それまでアカリとジュリの会話を黙って聞いていた魔法使いが反応した。

「その男……そう言った？」

「ええ。春だからかしらね。変質者かと思って無視してやったわ」

アカリが魔法使いをそっと伺っている。魔法使いは水晶を取り出すと、カウンターに置いて手をかざした。

「見える」

「何？」

「泥棒」

「ほんと！？ 見せて！」

アカリが水晶玉を覗き込んだ。ボクもアカリの肩越しにのぞいてみる。そこに映っていたのは、いかにもきざな感じの金髪の男だった。

「誰？ この人」

「シュタイナー。乙女チック☆ビーム……やつの必殺技……女にしか、効かないけど。忘れ谷に出没する……でもおかしい」

「何が？」

「こいつ……カレーの材料しか盗まない」

魔法使いによると、怪盗シュタイナーは究極のカレーを作るために最高と言われる材料を盗むらしい。アカリがこぶしをぎゅっと握り締めた。

「居場所もわかったことだし、早速取り返しにいきましょう！」

「でも、どうやって忘れ谷ってところに行くの？」

忘れ谷なんてどこにあるのかも知らないんだよ。すると、魔法使いが教えてくれた。

「女神に……頼め」

「女神さまに？」

「忘れ谷にも……女神の泉はある」

「わかった！ 魔法使いさん、ありがとう。行くよ、タケルくん」

「……気をつけて」

ボクとアカリはジェラート山の女神さまの元へ向かった。

女神の泉に到着すると、アカリは女神さまを呼び出して事件の説明をして助けを求めた。

「まあ、それは大変です。忘れ谷まで虹をかけてあげましょう」

女神さまは手を高く掲げた。その手の先からすーっと七色に輝く虹が伸びていった。

ボクたちは虹を渡って忘れ谷の女神の泉へとやってきた。とてもうら寂しい感じのするところだった。春だというのにびゅうびゅうと風が吹いている。

女神の泉のそばには手入れされた花畑が広がっていた。それぞれに色とりどりの花を咲かせている。花畑で水をまいている女性が見えた。金髪で色白で青いオーバーオールを身につけている。ジョウロで水をまくたびに、金の糸のような髪がサラサラと揺れた。アカリは、その女性に近づいて声をかけた。

「こんにちは。忘れ谷の方ですか？」

「ええ、そうですけど」

「シュタイナーさん、どこにいらっしゃるかご存じありませんか？」

「彼、何かしたの？」

アカリはかくかくしかじか説明をした。女性は眉をひそめた。

「シュタイナーがあなたたちの指輪を？」

「ええ。明々後日結婚式なんです。どうしても取り返したくて」

女性は腕を組んでうつむいてしまった。ボクとアカリは顔を見合わせて、どうしようとアイコンタクトをとる。

「シュタイナーなら日が変わる頃、女神の泉に現れるわ」

女性がポツリと告げた。

「私はティナ」

「私はアカリです。こっちは婚約者のタケルくんです」

ボクはぺこっと頭を下げた。すると、ティナはボクらにそれまで自分の家で待つように言ってくれた。

彼女の家は牧場の中にあった。家の前では、犬がしっぽを振ってティナを迎えた。

「牧場主さんだったんですか」

「ええ」

「私も牧場主なんですよ」

「まあ、奇遇ね」

アカリとティナは意気投合しておしゃべりし始めた。ボクはティナのいれてくれたお茶を飲みながら、二人の会話に耳を傾ける。牧場主ということだけあって、話題は野菜や動物のことである。

退屈したボクは、席を立てて部屋の中を歩き始めた。棚には本やらぬいぐるみなどが飾ってある。棚の一番上に写真立てがあった。その写真には男性に肩を抱かれてにっこり微笑んでいるティナが写っている。待てよ、この男性、どこかで見たことがある……。

「あーっ！」

ボクは思わず大声を出してしまった。びっくりしたアカリとティナが来た。

「アカリ、あの人」

ボクは写真を指差した。ボクの指差した先を見たアカリも大声を上げた。

「シュタイナー!?」

ボクとアカリがティナを見ると、ティナは困ったような顔をした。

深夜、ボクらは女神の泉でシュタイナーを待った。ティナは泉のほとりに立ち、ボクらは木の陰でそれを見守った。

月が頭上に昇り、あたりは白く照らされている。月明かりの下にたたずんでいるティナはまるで女神様みたいだった。零時、誰かが

泉にやってきた。背の高いやせた男が、肩まで伸びた金色の髪をなびかせて歩いている。そしてティナの隣に立った。

「こんばんは、シュタイナー」

シュタイナーと呼ばれた男はいぶかしげにティナを見た。

「会わせたい人がいるの。ワッフル島から来たアカリさんとタケルさんよ」

ティナの言葉に、シュタイナーの眉がピクリと動いた。ボクたちは木陰から出て、ティナのそばに行った。

「あなた、ワッフル島へ行ったの？」

「ああ」

「だったら私が何を言いたいのかわかるわね。どうして盗みなんてしたの？ もうしないって約束したじゃない！」

ティナが怒りをあらわにして訴えた。しかし、シュタイナーは、にっと口の端を上げると、ポケットから指輪を取り出して、ボクらに見せびらかすように突きつけた。

「あっ、それよ！」

アカリが声を上げた。銀色のリングが月光を浴びてきらりと光る。「返してあげて」

ティナがシュタイナーの腕にすぎると、シュタイナーは首を横に振った。そして反対側の手でピースサインを作り、右目を覆った。

「乙女チック☆ビーム！」

「見ちゃだめ！」

「えっ!？」

ティナの声は間に合わず、アカリはもろにシュタイナーの乙女チック☆ビームを食らった。アカリは人形みたいに動かない。口をパクパクするも声が出ないようだ。恐るべし、乙女チック☆ビーム。ボクはアカリの前に出てシュタイナーをにらみつけた。シュタイナーは指輪を手のひらに乗せたまま高く掲げた。すると、どこからともなくコウモリが飛んできて指輪をくわえて逃げていった。ティナがびっくりしてシュタイナーを揺さぶった。すると、シュタイナー

は頭を後ろに仰け反らせたかと思うと崩れ落ちる。闇夜にティナの悲鳴が響き渡った。

ボクはアカリの肩をつかんで揺さぶった。

「大丈夫、アカリ？」

「うん。もう平気」

シュタイナーが気絶したせい、アカリにかかっていた技は効力を失ったようだ。ティナを見ると、シュタイナーを抱えて座り込んでいた。

「とにかくシュタイナーさんをティナの家に運ぶよ。アカリ、手伝って」

「ええ！」

ボクはシュタイナーをおぶって歩き始めた。アカリはティナの肩を抱きかかえて歩いている。

ティナの家に入り、シュタイナーをベッドに寝かせた。ティナは心配そうにシュタイナーを見つめている。

「ティナ、大丈夫？」

「大丈夫。ごめんなさいね。指輪を取り返せなくて」

「シュタイナーさん、ボクたちのこと知ってみたいですね」

ティナはうなずくと額に手を当てた。眉根を寄せて、不思議そうな表情である。

「どうかした？」

「ええ。いつものシュタイナーじゃない気がして……」

「どういう意味？」

「挨拶したとき、彼、怪訝そうな顔をしたでしょう。私のこと、知らないみたい……」

「確かに変よね。あなたたち、恋人同士なのに」

そのときシュタイナーがうめき声を上げた。ティナはシュタイナーの手を握り、呼びかけた。

「シュタイナー、気がついたのね」

シュタイナーは目をうつすらと開けると、ティナの顔をじつと見つめた。

「ティナ……ここは？」

「私の家よ。さっきのこと覚えていないの？」

「さっきのこと？」

シュタイナーは覚えていないようである。ティナは、ボクらのこと、指輪のこと、泉であったことを話して聞かせた。すると、シュタイナーは目を伏せて考え込んだ。

「今日は何曜日？」

「金曜日よ」

「金曜日!？」

シュタイナーは「金曜日」と聞いて驚きをあらわにした。

シュタイナーの話はこうだ。火曜日、男が一人訪ねてきて、その男と会った後から今日覚めるまでの記憶がないのだそうだ。

「シュタイナーさんは誰かに操られていたってこと？」

「誰がそんなこと……」

手がかりが欲しくて、ボクはシュタイナーに訊ねた。

「シュタイナーさん、その男ってどんな感じでしたか？」

「紫のバンダナをした、精悍な感じのいい男だったよ。僕ほどじゃないけどね」

結局、その男は誰かわからない。ボクたちはティナの家で仮眠をとって、翌朝ワッフル島へ戻った。

モウ太郎たちの世話をした後、ボクとアカリはなぞの男について話し合った。

「誰がシュタイナーさんを操ってたんだろうね」

「不思議よね」

アカリはふうつとため息をつくとき、ポツリとこぼした。

「指輪は諦めるしかないわね」

「ボク、もう一度青い羽を捜してくる」

「無理よ。あれは一生に一度しか手に入れることは出来ないから」
「そうか」

「それに作っている時間がないし。似たようなデザインのものを買って間に合わせましょう」

「うん」

アカリ、寂しそう。何か別の話をして気を紛らわせてあげよう。

「それにしてもシュタイナーさんって面白い人だったね」

「そうね。あの後、ティナにベッタベタだったわね。歯の浮くようなセリフばかり。あれはすごかった」

アカリはとっても楽しそう。

「アカリも歯の浮くようなセリフをささやかれたい？」

「まあ、一度くらいならね」

思い出したようでアカリはクスクス笑っている。

ボクはひざまずいてアカリの右手を取った。きよんとしているアカリ。いいぞ。咳払いをして、喉の調子を整えて、シュタイナーのまねをする。

「アカリ、今日は一段と綺麗だね」

アカリがきよんとした。

「とぼけた顔も可愛いよ」

今度は口を真一文字に結ぶと、目がつりあがってきた。アカリが立ち上がって、ボクにソファへ座るように命令した。怒っちゃったのかな……。おとなしくソファに座ると、アカリがボクの隣に座った。

「いやよ。他人の真似なんて」

「えっ!？」

「タケルくん自身の言葉で言って!」

素のボクという言葉で言うって恥ずかしい。でも、アカリ怒っているし断れない。シュタイナーって何て言っていたかな。

「アカリ、綺麗だよ。世界中で一番綺麗だよ……ボクがアカリをもらっちゃっていいのかな」

シュタイナーみたいに気のきいた言葉が出てこない。こんなに綺麗で良い人を、ボクなんか一人占めしちゃっていいのかな。ボクはネコ上がりの人間で、アカリにお料理作ってあげるしか能がない。指輪も取り返せないし、いつまでもお子ちゃまだし。アカリを喜ばせるようなことも言えない。だんだん自己嫌悪におちいつて、涙でアカリの顔がぼやけて見えてきた。アカリがボクの顔を覗き込んでいる。

「タケルくん？」

「アカリ、ボク、ボク、ほんとにアカリと結婚してもいいの？ この世の中には、ボクなんかよりアカリにふさわしい人がいるんじゃないの？」

「どうしてそうなるの！？」

「だって……」

アカリは先ほどとは打って変わって、困った顔をしている。やっぱりボクってだめだ。アカリを困らせている。

すると、アカリがニコツと笑った。

「タケルくんは命がけで私を守ってくれたでしょ」

ボクは無言でアカリを見つめた。海神に命をもらうって言われたときのことを思い出した。

「すごく嬉しかったのよ」

アカリはボクの右手を取って、さすってくれた。優しく、優しく。「私はタケルくんより長く生きてるわ。今まで出会った人もたくさんいる。でもね、タケルくんがいいの。世界中で一番大事なの」

アカリはそう言うのと、ボクの頬に手を伸ばした。そしてボクの目にじりに溜まった涙をぬぐってくれた。アカリの瞳が優しく揺れている。そして、そのキラキラと綺麗な瞳を隠すように目を伏せる。だんだんアカリの顔が近づいてきて、唇がボクの唇に触れた。

そのとき体にビビッと電流が走る。視界が急変した。アカリが大きく見える。どうしたの、ボク。アカリはアカリで口をパクパクさせて目を丸くしている。「アカリ！」って言ったつもりだったけど、

聞こえてきたのは「ニャア!」だった。

いざ、出陣！

ボクはアカリに抱かれている。体は毛むくじゃら。ひげはぴんぴんはねている。

「ファーストキスだったのに……」

アカリは涙目である。あれがキスなのか。よし、一つ大人の階段を登ったぞ！

「でも、なんでネコに戻っちゃったのかしら？」

アカリはボクを抱き上げて不思議そうにつぶやいた。

ボクが聞きたい。神さまは完全な人間にしてくれたはずなのに。でも、またチャトランを抱けるなんて！

アカリは嬉しそうにボクを抱き上げてすりすりした。そして花瓶に挿してあるネコジャラシを取ってきて、ボクの目の前で振り出した。

「ほら、チャトラン、こっちだよ」

「ニヤアン！」

ネコの本能が呼び覚まされる。ボクは夢中になってネコジャラシに飛びついた。あっちこっちに出現するネコジャラシ。ボクもあっちこっちに飛び回る。いいかげん疲れてきたので、遊ぶのをやめてソファで丸くなる。ああ、なんていう充実感……。前足で顔を洗っている、はたと気づいた。こんなことしてる場合じゃないじゃん！ ボクはアカリの膝の上に乗って、前足でかりかりとかいた。

「タケルくん、そんなとこ触っちゃだめ！」

「ニヤ、ニヤ、ニヤ、ニヤン！」

だって手が届かないんだもん。正体がばれる前はそんなこと言わなかったのに！ ボクの言葉は通じないし、どうしよう。

「困ったわね。とりあえずパパのところへ行きましょう」

いい考えだ。ボクはコクコクとうなずいた。

「女神さま！」

ジェラート山の女神の泉に着くと、アカリが大きな声で呼びかけた。すると女神さまが口を押さえながら出てきた。

「アカリではありませんか。指輪は見つかりましたか……まあ！タケル」

女神さまはアカリの腕からボクを取り上げると、抱えあげた。

「どうしてネコに……神に完全にしてもらったのでは？」

「それが、突然ネコになっちゃったんです」

「どういう状況で？」

アカリは「えっ!？」と言ったまま顔を赤くしてうつむいてしまう。女神さまはさらにアカリを追及している。アカリが困るのを面白がっているよ。アカリをいじめないでよ！ と、ニヤアニヤ訴えたら、女神さまがボクの鼻を人差し指でつんと突いた。

「わたくしに言えないことをしてたのね」

「……」

アカリは無言のままさらに顔を赤くした。まるで頭から湯気が出ているみたい。女神さまはクスクスと笑った。

「神の座に行くのでしょうか？ さあ、虹をかけてあげましょう」

女神さまは右手で弧を描いた。すると、虹が手元から伸びていく。

「ありがとうございます」

アカリはボクを受け取ると虹に足を踏み入れた。

神の座に着くと、アカリはさっさと神の座の台座に上がり大きな声で叫んだ。

「ただいま！」

すると、神の座の奥がスーッと開いた。アカリはどんどん中へ入っていく。ボク初めてなんだ、天国。言葉が通じていたら、アカリに質問するところなんだけど。さすが神さまが住んでいるところって感じの、厳かな雰囲気漂っている。

アカリが重厚な扉の前で立ち止まった。

「アカリです」

すると、扉が大きな音を立てて開いた。中は薄暗かった。壁にはろうそくの炎がゆらゆらと揺れている。ずっと奥に白い着物をまとった人がおぼろげに見えた。アカリはその人に向かって話しかけた。「お話があって来ました」

「何事だ？」

「タケルくんがネコに戻っちゃったの」

人影は神さまだった。神さまはボクらの前まで歩いてくると、アカリの腕の中のボクをじっと見た。アカリは口を尖らせて神さまに不満をぶちまけた。

「なんでネコに戻っちゃったの？ 完全な人間にしてくれたんじゃないの？」

「おかしいな」

神さまはボクに手をかざして、目をつむった。な、何？ 何が起るのかな。びくびくしちゃう。

神さまは手を下ろすと、難しい顔をして話し出した。

「どうやら呪いがかかっているようだ」

「呪い！？」

「タケルに術をかけたときには何もなかったが……。こんなことが出来るのは」

「海神！？」

「そうだろうな」

あの海神がボクに呪いをかけたの？ 神さまって結構ひどいことするんだな。

「とにかく、海神に会うしかあるまい」

「そうね」

神さまとアカリはうなずきあった。

ボクとアカリは、神さまが用意してくれた乗り物で海底にある神

殿へ向かうこととなった。クジラである。クジラの口の中に入れてもらって海底へ向かうのだ。

どういうわけか、ボクは赤い帽子と赤い戦闘服を着せられて、右手には大きな剣、左手にはこれまた大層な盾を持たされた。帽子についた緑の羽根飾りがおしゃれである。

神さまはボクに指を突きつけて言い放った。

「我はここを離れるわけには行かぬ。おまえがアカリを守るのだ」

「ニャン！」

「しかし、おまえ一人では心もとない。こやつらを連れて行くがいい」

ボクたちの目の前に、ポポポポンと五体のちっちゃいやつらが現れた。三角帽子をかぶって五色の服を着ている。赤いのはエラそうにふんぞり返っている。青いのは分厚い本を片手に眼鏡をくいつと持ち上げて冷ややかに赤いのと黄色いのを見ている。黄色いのはカレーライスを片手にへらへら笑ってる。緑のは眠たいみたいでうとうとしてる。紫のは、しゃくりあげて今にも泣きそうだ。

すると、アカリが彼らに駆け寄った。

「アラン、ベン、コロン、ダナ、エッジ！」

「アカリ！」

五体はアカリの周りを嬉しそうにフヨフヨと飛び回っている。そうそう、彼らは確か女神の泉にいたやつらだ。

「女神がこやつらをよこした。アカリの役に立ちたいそうだ」

「アカリ、ボクたちがサポートするから」

「ありがとう、みんな」

ボクは神さまの隣でアカリたちを遠巻きに眺めている。完全に蚊帳の外だ。切なくて一声鳴いた。アカリがハッとして振り返り、ボクを抱っこしてくれた。そしてコロボックルたちに紹介してくれた。ご丁寧な五体から結婚の祝辞をいただいた。

かくしてボクらとちっちゃいの五体はクジラに乗って海神の神殿へと向かったのだ。

海神の神殿は暗い暗い海底にあった。神殿の屋根は渦巻き貝で出来ていて、すごく大きい。入り口らしきところに立つと、扉がギィーっと音を立てて開いた。

「開いちゃったね」

「罨なんじゃない？」

「怖いよ、帰ろうよ」

「何言つとるんや！ タケルにかけられた呪いを解いてもらわな」

「そうですね。『虎穴にいらずんば虎児を得ず』です」

なんか青いのが難しいことを言っているけれど、海神に会って呪いを解いてもらわなくちゃ。

暗い廊下を歩いていく。ボクたちが進むごとに、先の灯りがポツと灯る。ひたひたひたとアカリの足音、キュピキュピキュピとコロポックルたちの足音が廊下に反響する。ボクの足音はないよ。ネコは足音立てないんだ。それに、神さまのおかげで二足歩行中。いつでも、剣で応戦できるぞ。

ボクたちは大きな扉の前まで来た。アカリはコホンと咳払いすると大きな声で呼びかけた。

「海神、アカリです。お話があってきました」

すると、大きな扉は仰々しい音を立てて、ゆっくりと開いた。中は大広間になっている。その最奥の大きくて立派な玉座に海神がふんぞり返って座っていた。中へ進むボクたちを胡散臭そうに半目で見ている。

「よく来たな」

「海神、タケルくんに呪いをかけたのですか？」

「そうだ。おまえたちが結ばれることなど認められるわけがないだろう」

「どうして、そんなひどいことを」

「おまえのほうがひどいだろう。人間界へ出かけて行ったかと思っ

たら、音信不通。帰ってきたと思ったら、婚約破棄」

「すみません」

うなだれたアカリを見て海神は笑みをこぼした。

「そこで、俺は考えた。アカリはそのネコと離れたくはないのだろう？　だったら、元のネコに戻してこの神殿でアカリのペットとして飼えばいい。俺とアカリが愛しあうのを横で見たいればいいのだ」
海神ってひどい。そんなの死ぬより辛いじゃないか。すると、アカリが大きな声で叫んだ。

「嫌！　私はあなたと結婚する意志はありません」

「何！？」

「だって、あなたは気まぐれに海に嵐をおこして、人間が困っているのを楽しんでる。私は人間です。仲間を傷つけるあなたは嫌い」
海神は顔を醜悪にゆがめた。そしてアカリをにらみつけると指をパチンと鳴らした。すると、アカリの体は大きな泡に包まれてしまった。

「気が変わるまでそこにいろ！」

アカリが泡を手で叩いているがびくともしない。コロボツクルたちとその泡を取り囲んだ。

五体は「変身！」と叫ぶと、両手を天に向かって突き出し、飛び上がる。すると三角帽子がヘルメットに変わり、腰のベルトが風車のようにくるくると回転している。

「コロボレンジャー参上！」

高らかに宣言した五体は決めポーズをとる。コロボレンジャーって何！？　三角帽子がヘルメットになっただけじゃん。コロボレンジャーはそれぞれのカラーの剣を手にとると、アカリの入れた泡に襲い掛かる。果敢にチャレンジするものの、泡に傷一つつけることが出来ない。そのとき、青のベンが悔しそうにつぶやいた。

「伝説の聖剣、ルーンブレードさえあれば……」

重苦しい空気が漂った。

そのときアランがボクの持っている剣を見て大きな声を上げた。

「それじゃん！ タケル、その剣で泡を切ってよ！」

わかった！ ボクは深く大きくうなずくと剣を振りかぶる。でも体の割に剣が大きすぎてしりもちをついてしまう。

「頑張って！」

アカリが応援してくれてる。ボクは振りかぶるのを諦めて、剣を横に流す。ハンマー投げよろしく泡に剣をぶつけた。

「ニャアアアーっ！」

泡はぱちんとはじけて、中からアカリが飛び出してきた。そしてボクを抱きしめた。

「チャトラン！」

チャトランって言った？ ボク、やっぱりネコのほうが良いの？ 切なくなつて、恨めしげに鳴くと、アカリは慌てて、「タケルくん、ありがとう」って言い直した。

「余計な真似を……」

海神がボクらに向かって歩いてくる。ボクはアカリの腕から飛び降りて、ルーンブレードを突き出した。ルーンブレードはなんと海神の腹に刺さった。海神は「うっ」とうなつてうずくまる。そして見る見るうちにその体は縮んでいく。そして、ボンツと煙が上がったかと思うと、その場には小さなタツノオトシゴが苦しそうにぴちぴちはねていた。タツノオトシゴの横には盗まれた指輪が転がっている。アカリはそれを拾い上げた。

「指輪……なぞの男って海神だったのね」

いつの間にか、タツノオトシゴをコロボツクルたちが取り囲んでいた。

「やっちまおうか？」

「そうだね」

まさにコロボツクルたちが足で踏んづけようとしたとき、アカリが止めに入った。

「だめよ！ 可哀想でしょ」

さすがアカリ。逃がしてやるんだね。

「家に連れ帰って水槽で飼うわ」

「えっ!？」

思わず声を上げてしまった。海神と一緒に住むつもりなの？ それはひどくない？ 呆然と見ていると、ボクを振り返ったアカリが大きな声を出した。

「タケルくん、元に戻ったのね。きゃあっ!？」

アカリは両手で顔を覆った。なんで悲鳴？ ボクは自分の体を見てみた。おお、人間の体になっている。でも一糸纏わぬ姿だった。青のベンが眼鏡をくいと持ち上げて状況を解説しだす。

「ルーンブレードのおかげで、海神が魔力をなくしたのですね。それでタケルの呪いが解けた——」

「そんなこといいから、何か着るもの探してよ!」

コロボツクルたちが四方八方に散らばっていく。ボクはぽつんと残された。

タツノオトシゴはというと、どこからか持ってきたグラスに水を張った中に入れられていた。ボクはというとアカリを抱っこしている。うん、抱っこされるのもいいけど、抱っこすると大人になった気分だな。

「ねえ、アカリ、ほんとに海神を連れて帰るの？」

「もちろん! タツノオトシゴなんて珍しいもの」

「でも、酷じゃない？」

ボクが逆の立場だったら死んだほうがましだ。だって、目の前で好きな人が別の人と仲良くされたら辛い。

「そうかな。パパに相談してみるわ」

どうしても諦めきれないようだ。

神の座に帰還したボクたちは、神さまの前にいる。アカリは早速、海神のことを神さまに説明している。

「聖剣で貫いたのなら、もう海神としての記憶もあるまい。後はタ

ツノオトシゴとしての天寿を全うするだけだ」

「そうなんだ。記憶がないのなら家で飼ってもいい？」

「いや、タツノオトシゴとして生きて、子孫を残さなければなるまい。いずれその子孫が海神として生まれ変わるかも知れん」

「そうか。残念だけど、仕方ないわね」

アカリは名残惜しそうにタツノオトシゴを神さまに渡した。結局タツノオトシゴは神さまの手によって海底の神殿近くで放された。

結婚式

大変な思いをして取り返した指輪を持って、ボクたちは教会へ飛び込んだ。ボクとアカリはそれぞれ控え室に連行された。

「あら、いやだ。臭うわよ！」

ジュリが鼻をつまんだ。クンクンと腕を鼻の前に持っていく。海に入ったから生臭いのかな。オセはボクの首根っこをつかむとお風呂に投げ入れた。お湯はほんのりいい香りがした。

「ちゃんと洗えよ」

捨て台詞を残してオセは風呂から出て行った。洗いますよ、洗えばいいんですよ。結婚式の前ってお風呂に入るのか。アカリはそんなこと言ってなかったけど。とにかく、頭からシャンプーを振りかけて全身洗った。滝のようなシャワーに打たれて泡を流せば、はい出来上がり！　ちゃっちゃとタオルで拭いて風呂場を出た。

すると、今度はテーブルの上に服が並べてあった。

「それ、着てちょうだい」

ジュリがネイルを塗りながら言った。ボクは白のタキシードを着て、白い靴下をはいて、白い靴を履く。今度はドレッサーの前に座らされた。ジュリは熱風の出る機械をボクの頭に当てて、ワサワサした。そしてなにか良い匂いのするクリームを頭につけて、櫛で髪の毛を整えてくれた。

「うん、いい感じね」

ジュリは鏡の中のボクに向かってウィンクした。ボクも必死にまねしたけど、どうしても両目をつぶってしまう。「あんたは、そんなことしないでいいのよ」と、言われた。

控え室には、ジュリとオセの他にチハヤもいた。チハヤはつかつかと歩み寄ってくると、ボクに訊ねてきた。

「タケル、キスしたことある？」

「うん。一回」

「それって自分からした？」

「ううん。アカリがしてくれた」

チハヤは両手を広げて首を左右に振った。ジュリやオセも呆れた顔をした。

「式のときに、牧師が『誓いのキスを』って言うんだよ。そうしたら、アカリのベールを取って」

「ベール？」

「アカリが頭からかぶってる透けた布のことだよ。それをタケルが上げるんだ」

「うん。それで？」

「キスするんだよ。タケルからしにいくんだよ」

「ど、どうやって!？」

チハヤはまた両手を広げて首を左右に振った。

「ねえ、オセ、手伝って」

「お、俺か!？」

「他に誰がいるのさ。真似するだけだよ」

オセは渋々チハヤの前に立った。チハヤはジュリからハンカチをもらって頭にかぶせた。

「見ててよ」

チハヤとオセが向かい合う。すると、ジュリが「誓いのキスを」と告げた。オセはチハヤの頭にかかったハンカチを持ち上げて後ろにかけた。そして顔を近づける。もうちよつとでくつつきそう。お芝居だってわかっていても、キスシーンって恥ずかしいな。息を呑んでいると、チハヤが叫んだ。

「オセ、ホントにしないでいいんだって!」

「すまん、おまえ、女みたいな顔をしてるからつい……」

チハヤは「悪い冗談はやめてよ」と言いながらハンカチを取った。

「タケル、わかった？」

「わかった。三人ともありがとう」

「タケルのためじゃないよ。アカリのため。一生に一度の結婚式だ

からね」

「ボク、アカリが喜んでくれるように頑張る！」

三人の心遣いに感謝しつつ、結婚式はアカリをがっかりさせないように頑張ろうと誓った。

「そろそろ花嫁さんも支度が出来た頃だろう。行くよ」

なぜかまた三人に連行されて、礼拝堂へ移動した。

礼拝堂の入り口で待っていると、セラフばあさんに手を引かれてアカリがやってきた。アカリはあのマーメイドラインのドレスに身を包み、頭には透けたベールをかぶり、手にはブーケを持っていた。口元が赤い気がする。セラフばあさんからアカリの手を渡された。

「お待たせ」

「ううん、待ってないよ。ねえ、ベールを上げていい？」

「後でね」

そんな会話をしていると、音楽が奏でられ、ボクらは祭壇まで歩くように言われた。礼拝堂の真ん中にしかれた赤いカーペットの上を二人でゆつくりと歩く。両サイドには島の人々が椅子に座っている。マイが手を振っている。タオがにこにこつつちを見てる。

祭壇の前まで行くと、牧師役の町長がコホンと咳払いをした。

「これより結婚式を執り行います。汝、タケルはアカリを生涯の伴侶とし、病めるときも健やかなるときも愛することを誓いますか？」

「はい、誓います」

「汝、アカリはタケルを生涯の伴侶とし、病めるときも健やかなるときも愛することを誓いますか？」

「はい、誓います」

「女神の御前にて、二人を夫婦とみなす。さあ、指輪を交換してください」

ボクはアカリの左手の手袋をそっと取り、お姉さん指に指輪をはめた。今度はアカリがボクの指にはめてくれた。それを見た町長が述べた。

「では、誓いのキスを」

ホントに言った。ボクは教えてもらったようにアカリのベールを上げた。現れたアカリの顔はいつもと違っていた。肌は桃色に上気して唇は鮮やかな紅色に彩られている。アカリ、なんだかいつもより綺麗……。ぼうつと見とれていると、町長がコホンと咳払いをした。そうだ、誓いのキスをするんだった。

ボクは少しかがんでアカリにキスをした。とても甘い香りがした。アカリを見ると、うっすらと涙を浮かべていた。

「ど、どうしたの!? ボク、何か失敗した?」

「ううん、嬉しいの……」

アカリは顔を覆って泣き始めてしまった。ど、どうしよう。失敗してないのにアカリを泣かせちゃった。

オロオロしていると、オセが大きな声で叫んだ。

「ほら、花嫁さんを抱きしめてやれよ!」

あ、そうか! ボクはアカリの体を抱きかかえた。そして耳元で「幸せになろうね」とささやいた。

島の人々がボクたちのために祝福の拍手をしてくれた。祝福の鐘が厳かな音を立てて響き渡る。ボクたちの耳に女神さまからのメッセージが届いた。

——おめでとう。いつまでも二人が幸せでありますよう祈ります

この後、チハヤたちがパーティーを開いてくれるということで酒場へ出向いた。扉を開けると、「おめでとう!」と言う声とともにクラッカーがものすごい音で鳴り響いた。ビクツとしたボクの心臓はぎゅっと握りつぶされたみたいに縮んだ。思わずアカリの腕にかまる。

「大丈夫よ」とアカリに耳打ちされ、ボクは顔から火が出そうだ

った。ボク、頼りないじゃん！」「うん」と小さく返事をして手を離した。

集まってくれた人たちの間を二人でお礼を述べながら歩く。一番奥にはマイとチハヤとユバがいた。ボクはユバの前へ進んだ。

「おめでとう。アカリを幸せにするんだよ」

「はい、先生、ありがとうございます」

ユバはアカリの手を握った。

「アカリ、この子はとってもいい子だよ。きっとアカリを幸せにしてくれる。くれぐれもタケルのことを頼むよ」

「はい、ユバさん」

ユバの言葉にボクは感動した。ボクのことをそんな風に思ってくれたなんて。マイとチハヤも声をかけてくれた。

「おめでとう、二人とも」

「ありがとう」

「でも、ほんとに結婚しちゃうなんてね。びっくりしたよ」

「どういう意味だよ！」

「タケルには早いつて言っただろ。忘れたの？」

「忘れてないけど。ボクはアカリを守るんだ。だから結婚したんだ」
チハヤは「へえ」と言いながらアカリを見た。アカリは頬をパツと赤く染めた。

「よかったね、アカリ」

マイが言うと、チハヤが呆れたように告げた。

「でも、タケルはお子ちゃまだから、アカリも苦労すると思うけど頑張ってよ」

「誰がお子ちゃまだよ！」

そう抗議すると、チハヤがボクの耳に手を当てて、ゴニョゴニョといういろいろなことを耳打ちした。それを聞いたボクは頭に血が上っていくのを感じた。

「タケルくん？」

アカリが心配そうにボクを見てる。「なんでもない」と答える。

チハヤが難しい顔をしてボクらを見ているのが目に入った。心配してくれてるのかな。

パーティーが終わり、ボクらはオオトリ島への船の上だ。空も海も茜色に染まり、地平線に太陽が沈みかけている。甲板で並んで海を見ていると、アカリが思いだしたようにボクに訊いてきた。

「タケルくん、チハヤに何を言われたの？」

「えっ！？ ううん、大したことじゃないよ」

とてもじゃないけど、アカリに言えない。ハネムーンにすることであれだったんだ。ボク、考えもしなかった。アカリと一緒に寝られる。それしか考えていなかった。アカリが結婚してからしか寝られないと言った意味をチハヤが教えてくれたのだ。ボク、なんにも知らなかった。

オオトリ島にあるコcott亭で夕食をとって、ボクたちは部屋へ引き上げた。

もう寝るだけ。待ちに待った時間なのに、ボクは緊張してソファから下りられない。アカリはボクの前まで来た。もうパジャマに着替えている。今まで見たこともないピンクのひらひらしたパジャマ。

「もう遅いから寝ようか？」

「うん」

ボクはおずおずとアカリの後をついていく。アカリは振り返り振り返り怪訝そうにボクの顔を見てる。とうとうベッドまで来た。念願のダブルベッド。アカリはさっさとベッドに横たわり、なんともいえない優しい表情でボクに手を差し伸べた。ボクはアカリの手を取ってベッドに乗る。そして正座した。ぽかんとするアカリにボクは口を開いた。

「ねえ、ほんとにするの？」

「まあ……緊張しちゃう？」

「緊張より、恐怖かな」

「恐怖!？」

「あんなことしたら、ボク、五分で死んじゃう」

「はあ？」

思いつきり間抜けなアカリの声が部屋に響いた。ボクはチハヤに言われたことをアカリに伝えた。

「一晩中、相手をこそぐり倒すって……」

言ってる間に、あの時アカリにこそぐられたことを思い出して涙が出てきた。五分でも死にそうだったのに、一晩中なんて耐えられない。人間ってなんてタフなんだろう。でも、そうやってみんな大人の階段を登ってきたのかな。

ふと顔を上げると、アカリが額を右手で押さえて頭を横に振っていた。

「どうしたの？」

「ううん、なんでもない。チハヤのやつ、今度会ったらどうしてくれよう」

なんとも物騒なセリフをアカリが吐いた。ボクはますます恐ろしくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9280u/>

虹の向こう

2011年11月24日18時49分発行